

明治三十九年十一月十九日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾五號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十五號目次

論 說

- 雄辯論……………南 鐵 生
- 自覺主義……………K N 生
- 個人主義論……………千田 流 兒

雜 錄

- 俳話數則……………紫 影 生
- 前田家姓氏見聞記……………華 頂 山人
- 濁流……………文 瀨 瀨
- 告別……………萩原清次郎
- 滿韓瞥見記……………入 江 生
- 枯草……………旅 の 童

文 苑

- 母子……………靜 池 庵
- 恐怖……………秋 水
- 草花……………其 月

○陸軍騎兵中尉山岸君碑銘……………村上 函峯

和 歌

- 四高和歌會詠草……………
- 露草集……………白 水
- 虫籠……………
- 四高俳句會席上即吟……………

雜 報

○卒業證書授與式○北辰會役員氏名○卒業生諸君を送る○新入諸子を迎ふ○時習寮に望む○新入生歓迎會○健康の必要を論じ精神の修養上柔道の隆盛を望む(南鉄生)○演説の必要を論じ其不振を慨じ此か振興の策として北辰會の演説會を公開にせん事を望む(南鉄生)○秋風來○南下野球部報○暗流○惰眠!惰眠!○軟文學を排す○金澤人士の偏狹(か、り生)編輯便り○明治三十八年度北辰會費決定計算書○寄贈雜誌

附 録

○方言について 附金澤市の方言輯 へ、な 生

諸士の猛省を促す

時運は到來せり、諸士、活躍せずや。今や吾運動部は大舉南下の準備に怠なく、言論部亦盛に氣焔万丈の域に達せむとす。諸士、北辰會は武裝して躍立せり。本會精神的革命の旗幟は此れによりて彌や鮮明たるべく、勇健なる校風樹立の機亦近からむとす。此れ天下有待の秋也。吾雜誌部のみ豈獨り惰眠を貪るを得むや。

由來雜誌部は北辰會各部の統一機關なり。隱然として其背後に立ち、言論に文筆に、各部督勵の任に當りし者、今や此の千歳一遇の好時運に際會す、豈躊躇を爲すなくして可ならむや。諸士、諸士が健筆に武裝せよ。武裝したる健筆を振つて北辰會誌上、縦横無盡に突進せよ。諸士が筆刀折るれば即ち止む。折れずば健筆をして鏘々の響あらしめよ。之れ吾雜誌部の諸士に願ふ處、特に英氣風發たる新入生諸子に對し期待して止まざる處也。吾部は諸士の希望を滿さむが爲め本學期間二回の雜誌發刊を敢てせむ。吾人には猛進あるのみ。猛進する處道自ら生せむ。雜誌部財政に關する問題の如き未だ後顧の餘裕あらざる也。

校歌及び投稿募集期限十一月三十日限 雜誌部委員謹白
原稿用紙は圖書館又は委員の手元にある

北辰會雜誌第四十五號

論說

雄辯論

南鐵生

人あり。口舌を弄して人心を惑はし、多言ありと雖も實行は一も之なく、無駄口をたゞいいて貴重なる時間を空費するの故を以て雄辯を非難せんとす。思はざるの甚だしきなり。

夫れ辯舌には種類多し。如何なる場合にも口を出したがる者あり。多辯と云ふ。全く無用の事を然も亂雜に述べんとする者あり。馱辯と名く。奇言異說無理に理を附けて巧みに似非推論をなし、以て人心を欺かんとする者詭辯なり。時に詭辯を弄し、時に多く辯じ時としては眞摯心底を吐露するが如くに見せかけて巧みに人を動かさんとする者、是能辯なり。然も以上は凡て雄辯の範圍外にして眞に雄辯たらんとする者の採らざる所なり。然り而して前の雄辯を難する者を見るに皆馱辯を難じ、多辯を排し、詭辯を恐れ、能辯に欺かれざらんとするのみ。然らば即ち難者が難する所のは雄辯に非ずして雄辯が正しく難せんとする所を難するなり。難者乞ふ少しく考ふる事を知れ。

然らば即ち雄辯とは何ぞや。誠心誠意自己の信する所を誠心誠意人にも信せしむるにあり。正當なる主張を貫徹するにあり。心底を吐露するにあり。然らば其識見は博かるべく、真摯にして豪膽なるべく、智慮あつて機智具はり、激せずして然も堂々の体度なかるべからず。是れ論を待たざるなり。

毛遂の従を定めんとして階を昇りて劍を擦するや、

「王の逐を叱する所以は楚國の衆を以てなり。今十歩の内王は楚國の衆を恃むを得ざるなり。王の命は逐の手に懸る吾君前にあり。叱するは何ぞや」

と云へり。其真摯にして豪膽なる見るべきに非ずや。進んで、

「且つ聞く湯は七十里の地を以て天下に王たり文王は百里の壤を以て諸候を臣とす豈其れ士卒多かんや。誠に能く其勢に據りて而して其威を奪ひたればなり。今楚の地は方五千里、持戟百万、此れ霸王の資なり。楚の強を以てせば天下當る事能はじ。」

と其識見を以てして楚王を持揚げたでたる所。

「白起は小豎子のみ數万の衆を卒めて師を興し、以て楚と戦ひ、一戦して鄢郢を擧げ、再戦して夷陵を焼き、三戦して王の先人を辱かしむ。此れ百世の怨にして趙し羞づる所、而かも王は惡む所を知らず。合従は楚の爲めなり。趙の爲めに非ざるなり」
何ぞ其急所を衝きて肺肝を刺すや見識あつて機智縦横なる所、高慢なるが如くにして而して然らず。堂々たる者と云ふべし。

蘭相如が章臺に於ける傲岸は能く壁を完ふして其重任を果たし、布衣の身を以て諸候に使して君命を辱しめざるが如き、バトリック、ヘンリが決然として「吾人に自由を與へよ、然らざれば死を與へよ。」と絶叫したるが如き、皆雄辯の上乗なる者にして、誠に識見あつて真摯豪膽機智に富み堂々として迫らざるに非ざるなし。

誠や雄辯に必極なるは真摯にあり。熱誠にあり。豪膽にあり。果敢にあり。機智富めるにあり。虚言を吐かざるにあり。紊りに強さうな事を云ひて、一度反對論者の言に驚きて、直に長縮するが如くならざるにあり。堂々たる長舌一片の冷評に其根據を抜かるゝが如くならざるにあり。駄辯や、奇辯や、多辯や、能辯や、皆雄辯の排せんとする所の者なり。

或は云はん。言語は明晰、識見あり、真摯にして豪膽の人ならば、別に演説の習熟をなさずとも演舌すべき時には能く之をなし得べきなり。と嗚呼亦誤れるの甚だしき哉。

成る程習熟なくともかゝる人は随分と一角の演説をなす事あるべし然も吾人は恐るゝなり。其熱誠や、豪膽や、機智や、之を用ふべきの時と所を失せざるを得るか。熱誠なる人は迄迄も熱誠として、其居常豪膽の人と雖も、一度演壇に立ちて反對者に冷評せられて、狼狽する事はなきか。機智頓才の人も群集のませつかへしに對して能く平常の機智を以て之に應ずるの能あるを得るか。熱誠の餘り其体度は餘りに狂的に、或は餘りに圖々しくならざるを得るか。吾人は千百人中其然らざる者果して幾人あるかを知らざるなり。今旅せんとする者あり。多く金銀を有すとせよ。此人は勿論旅する事に可能なるべし、然も此人黄金を有するの外之を使用する方法、時、

場合を知らざらんか、實の持ち腐りにして如何にして自由に、愉快に其旅を果す事を得んや。雄辯の資質如何に具はれり。とは云へ其資質の用法を知らざれば、決して雄辯たる事能はざるなり。

夫れ雄辯の資質を天性に具備する人にして猶且然り。況んや、天性此資質に乏しき者の如き、習熟せずして何の時か能く自信を貫徹するの時あらんや。

言語や、勇氣や、機智や、大体に於て天性に因る者多し、と雖も熱誠にして習熟せは得る所あるや必せり。否多く演説の資質雄辯の要素は習熟如何に待つ者なり。

今や政治に係はる者、上は貴衆兩院より、下は町村議員に至る迄、商工に係はる者銀行會社より各種の團體に至る迄、又學に係はる者研究の公表より學校の講義に至る迄凡そ自ら思ふ所あつて而して人に信せられ用ひられん事を願ふ者は一に雄辯の力によりて自説を貫徹せざるはなし。野蠻の世他を制するは専ら腕力にありき。文明の世他を制する者雄辯に非ずして何ぞ。吾人文明に所して生存競争の裏面に曝利を占めんとする者、それ習熟せん哉雄辯の術。

自覺主義

K N 生

余か爰に自覺主義といふのは諾威のイブセンヤ獨逸のニーチエー、ハウプトマンなどの面々に由つて代表されたる近世歐洲の一思潮を指すのである此の思潮の中でも精細に攻究して見たならば色々の傾向もあり又同一の傾向の中でも人々に由つて其人其人の特色もあるであらう併し其根本主義に於ては同一の点かあると思ふから之を一括して自覺主義と名けて置く此の主義は慥に十九世紀の終に於て歐洲思想界の有力なる一因子であつた今後もかくあるであらうと思ふ今までの處では未だ十八世紀の終に於てルソーなどの自由平等主義か佛國革命の原因となつたといふ様に社會の表面の勢力とまではなつて居らぬ併し今後或はなるかも知れない我國に於ても近來この思潮か或一派の人々に由つて輸入せられ鼓吹せられて段々青年の思想を動かしつゝあると思ふ

余は或一派の人々の様に此主義か完全無缺で之を以て凡ての人生問題を説明しうるものゝ如くに思ひ之を標榜して他を罵倒するといふ如き勇氣は持たない特に此派の人の中では徒らに己か意馬心猿の狂ふかまゝに振舞ふのか自覺主義であるなどと思ふて居る様な人もあるこれは以の外の心得違である併し又多數の學者道德家の様に深き思慮と同情とを以て此の主義の眞意をも探らないて平凡なる獨斷的知識や道德に照らして一概に之を排斥せうとも思はない寧此の主義は今日の文明の欠点を指摘したもので我々は此の方向より一層深き文明にすすまねはならぬと思ふて居るのである固より余は深く此の新思潮を研究したのではなく唯二三の著作を見ただけのことであるから余の自覺主義の解釋なる者は大に間違て居るかも知れない

余の見る所に由れば自覺主義の本領とは一言にていへば我々の自己を以て無上の價値あるものとなし種々の束縛に由つて萎微消沈せる我々の眞自己を深き胸底より呼び起して獨斷と虚偽にみて

る此の現世に新生命を與へんとするにあると思ふ固より斯くの如き思想の傾向は今日に始まつた譯ではない寧ろ人間本來の傾向であるといつた方がよい我々人間に於ては自己より尙いものはない自己かいつても唯一の實在である知識に於て疑はしいことかあれば自己に反つてくる宗教道徳に於て不滿のことかあれば又自己に反つてくる歐洲思想の歴史について見てもアポロの神が汝自身を知れと命じた以來幾度も此の自己に還つて新しき思想の出发点を求めた近世の始デカートか余は考ふ故に余ありといふのを哲學の出发点としたのは知識に於ける反自己主義でありホッブスカ人は狼なりといふのを倫理の本としたのは道徳に於ける反自己主義であつた現今に於ける自覺主義も同一なる思想の傾向にすぎない併し單に同一なる思想の繰返と見ては未だ其真相を穿ち得たものとはいはれない

試に現今の自覺主義を以て從來の反自己主義に比べて見ると從來の者は知識の方に傾いて居たか現今の世は意思の方に傾いて居る從來は自己の本体を知識に求めたか現今は之を意思に求めて居る即現今の自覺主義は反自己主義の一層進んだ者であると考へる知識に求めた者は二つに分れる一は感覺を以て最も確實なる知識の本と考へ人間の本性も此處に求めようとした所謂英國の經驗學派なる者が是であつて其結果は快樂主義となり利己主義となつた一は理性を重んじ真理の標準となし我々の眞自己を之に求めようとした歐洲大陸に於ける所謂合理學派なる者が是であつた其結果はカントの如き理性の命令に従ふのを唯一の善となすといふ様なストアック風の嚴肅主義となつた經驗學派も合理學派も凡て外より來る權威を排して知識道徳宗教の本を自己に求めたので

はあるか未だ眞に深き自己の根底に求めた者とはいはれない知識は人性の中でも尙客觀的要素に屬して居る眞に主觀的なる自己の本体ではない眞の自己の本体は知識ではなくて意思である此の眞理を看破したのはショーペンハウエルであつた此点より見て氏は其主義に於て現今の自覺論者と異なつて居るに關せずその先導者といはれるのである現今の自覺主義の人は皆意思を以て眞の自己となし之を以て凡ての標準として居る自覺といふことは昔印度の賢聖のいつた様に自己に知り諦さらめるといふのではなく自己の要求を見出すといふ意味であるイブセンの描いた意思猛烈なるプラントの如きが其理想である

現今の所謂新思潮なる者は頗複雑であるか其根本義を意思の自覺主義と見て之を説明すると最明であると思ふ勿論意思といつても色々に見られるので我々は或理由の爲に何かを欲するといふも意思である此場合には一見理由か意思を動かしたと見られるのでカント、フイヒテの様に理性と意思とを同一視した人もある併しかくの如き考は意思の眞相を穿つたものとはいはれない純粹なる意思は知識の説明を許さない理由を入れる餘地がない唯余は欲す故に欲といふのみである意思は我等に興へられたる直接の事實である知識は我々の意思を満す手段を教ゆれども意思其物を興へることはできぬ現今の自覺主義論者の意思はかくの如き意味に於ける意思であるかくの如き意思はショーペンハウエルのいつた様に盲目であるから衝突するそれ故に現今の自覺主義は學問的知識と相容れない學者をは學究といつて嘲笑して居る又かくの如き意思は純個人的でなければならぬ縦し其目的か他人を愛するにあつても他人の爲に他人を愛するのでなく自己の要求の爲に之を

愛するのであるそれ故に現今の自覺論者は凡て極端なる個人主義である社會を本とせる道德宗教とは到底相容れない道學先生といつて極力之を罵倒して居る獨り藝術の世界は我々の個性を現はすに最自由なる天地である藝術は人の個性を束縛せなければかりでなく反て之を發揮するの根本領であるそれ故に現今の自覺主義は最藝術を尙ひ之を以て自家の眞理を現はすに最適當なる手段であると考へて居る。

然らば斯くの如き自覺主義は從來の學問道德に對して如何なる影響を與ふるであらうか先づ知識についていへば從來の學問あまりに理論の一方にはせて眞摯なる人生の要求を忘れて居つた傾がある學問として理論的なるは固より已むを得ないことではあるが單に理論を弄して實地の要求を忘れた者は空理である眞理は眞理であると共に我々の情意の要求をも満足し得る生きた眞理でなければならぬ尙一步を進めて云へば我々の情意を伴ふて直覺的に顯はれたる眞理は單に觀念概念の連結の上に顯はれたる純知識的眞理よりも遙に有力にして深遠なる眞理である釋迦やソクラテスの求めたのは實に此種の眞理であつた自覺論者も學問的知識を排斥すると共に此種の眞理を重んじて居る此の主義の先鋒キールケガールの如きは個人の生存に關する知識をのみ眞の知識とした此の如き者は時には反て空想に陥ることもあるかどにかく從來の學問の弊をよく指摘して居る近頃は専門の學者の中にもこの刺激を受けて眞理の標準を寧ろ情意の要素に置かうといふ人か多い近頃流行のプラグマチズムなる者かこれである次に道德の方面に就いていへば從來の道德は社會を本とし他人を主として自己の本分を忘れて居つた鎖々たる利害の計算や拘子定規の理窟に由

つて人間本來の要來を抑壓せうと務めた其結果此社會か自然の美を失ふて卑屈となり虚偽となつた自覺論者此の墮落に向つて一大痛棒を與へて居る彼等は各人の胸裡に眠れる眞自己を喚起して虚偽の道德を一掃せうとして居る故に其理想とする所は意思猛烈で兼て眞摯なる偉丈夫である前にも云つたイブセンのブランドの如きか好適例である彼等は蛇とならずして驚となれといひ羊とならんよりは寧ろ獅子となれといつて居る。

彼等のいふ所は固よりあまりに極端である今日の道德が彼等のいふ如くに價值なき者でもない彼等のいふ所を言語通りにとつていかぬ併し彼等のいふ所にも一面の眞理を含んで居る確に今日道德の弊に中つて居るブランドの中に或一國の諸候か其境内の貧民を救助して居る併し一步でも自己の境外の貧民には一粒の米を與へない之を詰るものあれば曰く自己の權限外である世の中にはどうやらこんな淺薄な道德家も少くない様である又人形の家の主人公ノールか自己の覺醒に由りて夫と子とをすて去るといふが如き所謂道德家は目を廻はすであらうか今日夫と稱する者の中に妻を人形視して居ない人は幾人あるであらう而も結婚の神聖などいつて居るイブセンの様に我々の心を無遠慮に深酷に解拆されてはたまらない併し自覺論者のいふ様に我々は確に此の欠点があるかくいはれても仕方がない此等の虚偽卑劣の弊を脱して眞摯自由の道德を求むるといふは誰も希望せねばならぬ所である文明の眞の進歩は此處にあるのだと思ふ。

自覺主義は一見利己主義我儘主義と似て居るが決して之と混同すべき者でない反つて此等の主義と正反對に立つて居る利己主義とは己を己の私欲に屈して之の奴隷となることである然るに意思

は元來私欲に支配せらるゝものではない反て之の支配者である猛烈なる意思の自覺の前には私欲も何もあつたのではないゴルキーのチエルカッセの如き盜賊でありながら少しも賤しい利己的な所かない然らば分のわからない我儘主義であるかといふに又決してそうでもない我儘といふことは眞に意思の強盛より來るのではなく反つて意思の薄弱より來るのである 自覺主義に於ける自覺は之と違ひ自己の内面的必然より起る威力の發現である嚴肅であつて己まんと欲するも己む能はざる勢を持つて居る

以上は現今の自覺主義を善い方面より見て論したのであるが之の弱点及弊害を論すればまたいくらもある元來自覺主義は破壊的で建設的でない 現今文化の弊を攻撃するは痛快であるが之に代ふるべき明確なる理想をもつて居らぬ意思の強盛を主張すれども其目的内容を示さないニ―チェ―などは有力が即善であるといふが其力とはいかなる力であるいかなる意味で有力なるのか分らない此の如き自覺の結果は徒らに煩悶に陥るの外はなからう自覺主義の一面には常に厭世の雲か蔽ふて居る

個人主義論

千田 流 兒

吾人は茲に個人主義の絶對權威について論じ、曳いてこの主義が歴史の事業に現はれし勢力及び社會の影響に呈せし結果について觀る所あらむとす。たゞ吾人は個人主義の唱道によりてのみ、天才の事業と人格の理想とを啓發し得べきを信ず。吾人に活動の力を傳へ、吾人を永遠の光明に導くものは即ち大なる理想を告ぐる天才と人格とにあり。人格とは何ぞや、天才とは何ぞや、即ち吾人の理想なり、憧憬なり、主義なり、是を要するに自己の主張なり、自己の發揚なり。まことに天才及び人格の大なる理想ありて國と人とは始めて光榮あり偉大なるものあらむ。自己の存在や既に國家の以前に存し、道德の以前に存し、社會の以前に存せり。活動の國家と名譽の歴史とは常に天才と人格の大なる理想とによりて立てられ、天才と人格とは常に吾人の所謂個人主義によりて名づけらる、是を以て吾人の所謂個人主義と自由とが存する處はこれ實に名譽の歴史にして活動の時代なり。吾人はかゝる天才と人格の大なる理想によりて始めて無限の活動を得たり、進歩を得たり。歴史は亦是れによりて名譽と發展とを得たり。實に吾人の所謂個人主義は強き力によりて感激し躍動し健闘したる神命なりし也。即ち吾人はこの個人主義を以て事業のあらゆる偉大と成果となすも、敢て過言にあらざるべきを信ず。

二

吾が右の手は自らの力を證明すべしとは是れ詩人ミルトンの謂ひし處、まことに吾人は生存の渦中に風濤と戦ふて、憤激と飛躍とに誇り勇むものならざるべからず。吾人は捷ち誇れる力を極めて戦ひ進まざるべからず。時に或は失望蹉跌ありども、而かも吾人の強き力はこゝに發して動き、

恆に淋漓たる汗血を絞り、熱涙を拭ひつゝ、躊躇、悔悟、疑問に留まるとなく自由と威權とを期す。之を以て自ら卑むるをなさず、たゞ強き自信を得て復た戦ひを新たにし、更に戦ひを挑まむ。實に吾人の戦ひは人生其物にて價值其物なり、蓋し戦ひ、争ふは自己の力發動躍動する處にして、平和、靜穩は到底吾人が熱烈なる意情の伸ぶる處にあらず。

吾人の所謂個人的と云ふは差別を意味し懸隔を表示す、よりて抵抗は免れず、有無多少の問題に係はるは當然也。もし抵抗、矛盾、有無、多少なき時、何ぞ戦争あらむ、何ぞ人生あらむ。理想がもと吾人現在と恆に或る懸隔を距てゝ向上するは、是れやがて其永久無限たるべきを謂ひ得る所以にして、その永久無限たるは要するに吾人が絶えず求め終始望むによると等しく、吾人の戦ふは所詮彼我の問題、有無の問題にてその永久の性質を有する所以實に是れにあり。即ち一の有は一の無にて、同時に唯一の事實として最も嚴肅のものたるなり。若しそれ吾人に國民及び個人の絶對權威を問ふものあらば、是れ即活動と事業のいかゞを問ふものなり。之を以て國民と個人の權威は活動と事業と戦闘とによりて知るべし。活動とは何ぞ、事業とは何ぞ、是れ即個人、國民の力なり、強さなり、要するに自己の發動其物なり、個性の膨脹其物なり、而して自己、個性の發動主張は或る抵抗なり、或る撞着なり。即ち個人國民は茲に於て争はざるべからず、戦はざるべからず。争はざる個人と戦はざる國民とは是れ既に生命なきなり、理想なきなり。眞に戦はずして吾人は如何に自己の存立を確ふし亦そを明白に證明し得べき。

既に絶わざる健闘、活動が個人の意義目的を明かにし得べきを知らば、無限の進歩向上を望むに於て平和靜穩はその途にあらず。之に於てか、吾人は血を見て欣然是を喜ぶと共にかの社會主義論者の所謂平等均一を理想とすを見て苦笑せしむべからず、狂愚なる社會主義論の如きは危害の外何物をも残さず、却て吾人の生命、理想を廢死せしむるもの、若し眞面目に自己を覺知し自らの力を張るにあらずれば理想を云ふ能はず、社會を謂ふ能はず。社會主義論者の所謂平等均一は是れ個人、國民の腐敗なり、墮落なり卑屈なり。吾人はこの陋醜なる思想を逐斥鞭打し以てその排除を期するは吾人の義務たるを信す。然りと雖ども吾人は社會主義論の出發に於て平等均一を説くをよるのまゝに歸らしめむとするを嘆美す、即ち吾人は社會主義論の出發に於て平等均一を説くをよるこぶと雖ども終始何處までも凡平に歸せむとするの愚を責めざるべからず。吾人が平等自由を説くや、あらゆる潤飾を棄てゝ純粹なる自然に歸せしむるを意味し、毫も天才を呪ふことをなさず、人格を斥くることなし。社會主義論を以てすれば天才も人格も無數の凡人として終らざるべからず、かくの如くにしていかに自由を説き社會を論じ得べしとなすか。勿論吾人は社會主義が詩的に解せらるべく、その精神の宿る處を知る、たゞに硬き論難を以て是れに加へむは寧ろ妥當を欠くの嫌ひあるも、無限なるべき個人の活動を省みる能はずして社會主義が一切を活動なき社會に沈ましめむとするを見て忿憤の情忍び難きものあり。自然を欺き天才を棄てゝ却て是れをしも社會の起原とし社會の進歩となすに於ては眞に甚だしき誤謬矛盾にあらずや。

吾人の生命を證明し、吾人の理想を活かしむる處の自己を知るは是れ吾人にとりて最大の問題にして、一切のものは亦之によりて始めて解決せらる。之を以て吾人は自ら求め自ら進む處のい

かゝるを知るべきのみ。眞に吾人は天真なる情意と確實なる直覺とを以て神の燈火を得たるが如くに、自己と個人とについて分明に感ず。而して吾人が個人の發展を主義とするや、極めて單純なり、即ち多く複雑なる道法宗教を要せざるまで余りに切なり。その素材にて飾りなく快明にて儂りなきは無邪氣なる小兒の如く、而かもその強壯なるは恰も剛毅なる巨人のごとけむか。吾人がこゝに吾れありと覺ゆる時、凡べては侮蔑せられ、而かも自然の眞美と親しみこゝに吾人は自然と人生の無限、永久、絶對のあらゆる一切を盡くすなり。焔の如き吾人の生命は血となり肉となり、自然の胸裏より吐き出されしものゝ如くに感ず。終始燄々たる眞理の火影は、かゝる吾人の生命の上に輝き、拒まんとして拒む能はず、否まむとして否む能はざるものあり。即ち探りて吾人が所謂個人主義の意義となすに足らむ。

吾人の活くるは最も眞面目の事實にて人生は最も嚴めしき實在なり。自己を偽らず且つ誤らざるは是れ眞の生命、實在にて、凡そ人格の偉大と天才のサブライムとは凜乎として抜くべからざるもの胸裡に蟠まるによる。偽りの世と人、すべて實体を棄てて皮相に拘はるるも彼等は則ち超然しからざる也。即ち吾人は須らく現代を超越せざるべからざる也。かくて吾人はミラボーを愛し、ルーテルの貴び、サルダナパルスを慕ふ。

三

ルイ十四世曰く、吾れは國家なりと。佛國當時の専制、貴族の權力知るべきのみ。農民は終夜貴族の城壕の中に蛙を捕へ、終日貴族の田畝に凡べての汗と血とを盡さるべからず、而かもバ

ンは與へられず、牧牛と共に野の草を啖はざるべからざりき。

時なる哉、一千七百八十九年七月十四日バスターイルの四邊に爆然破壊を叫び兵器を喚ぶ時は至りぬ。恰かも世界最終の日に於て審判の喇叭の轟くが如きあり。まことに是れ眞理と自由の光明を布告すべき神命を附囑せられたるものなりき。彼等の叫ぶは自由にあり、眞實にあり、眞理の汚濁を拭ふは彼等の望む處、其拂ふべきものを慮るの暇なく、彼等は眞理を回復せずばやまず。偽善を破らざるべからず、獨專を弑せざるべからず。ために彈丸は飛び、兵刃は閃めき、ギロチンは轟きぬ。佛國革命は或は狂に似たるを云ふ者あらむも、吾人はかくも美はしきものをいまだ聞かず、是れ墮落頹廢の時代に於ける眞の天啓なりと知らずや。時代の凡べてが衰弱し墮落し卑屈ならば之を焚いて烏有に歸せむは眞理の靈しき力なり、而して來るものは自由なり、共和なり。

茲に吾人が所謂個人の價値について謂ふべからざる貴き意味を咀嚼す。是れ吾人が將來に於て俟つ大なる慰藉なり、世のあらゆる理想活動亦こゝにありて動く。佛國革命は實に自己の力を覺わたる抵抗の破壊にて、人世と自然とを靈活する勢力なり、精神なり。無限永遠なるべき自己の力に對し燃ゆる意情と溢るゝ熱涙とを以て省るものはかならずや革命を精神とし、破壊を勢力とせざるべからず。

愛すべき革命の生命を與へたる民約論を讀んで矛盾と云ふ者は更に三思せざるべからず。其所謂矛盾と云ふは民約論其物の矛盾なるか、將た社會の矛盾なるか。是れかならずや假相、虚偽、墮

落に滿ちたる社會の矛盾に歸するが如し。民約論は唯自然を歌ひ眞理を説きしもの、空想よりも寧ろ事實の論と謂ふを得べからむ。而かもルーソーは狂者と嘲けられ、民約論は矛盾として斥せらる。やがて是れ自然を呪ふもの、天才を排するものにあらずして何ぞ。民約論を矛盾とし、自然を呪ふ國民はかならずや將さに罰せらるべし、佛國革命の如きは歴史の必然的連續なり。よく忍ぶ者はかならず自ら省みることあるべし。吾人は假相を貴ぶことをなさず、自然の眞義に接するに急がざるべからず。ルーソーの民約論を以て或は學說として價値なきものとし或は非論理の最も甚だしき詩人的空想と謂へども、而かも其勢力影響の強大なる思ひ半ばにすぎるものあらむ其の勢力と影響の強大なるは是れ正さしく民約論が唯だに空想にあらずして最も事實を説明したる證明にあらずや。かの自由と人權との唱導は實に民約論の精神とせるもの、政治の進歩變遷は殆んど民約論が時と處とに現はれたる化身と見るも敢て誤りと謂ふべからず。ルーソーがあらゆる假相を斥けて個人の權職を自覺し、吾人をして美はしき自然に歸らしむべく假定せるは十分吾人本然の要求を説明せるものと云ふべし。民約論に於て社會の契約は自然的になるべくして人爲的たるべからずとせしは畢竟是れ也。然りと雖ども吾人は人格を認めざる社會主義論のごとくにルーソーの民約論を貴ぶにあらずして、社會を純粹にし個人の自覺を喚醒せむと力めたる意味に於て民約論を貴ぶ。ルーソーが極端なる民主主義を採りながら而かも主權の絶對的不可侵を認めたるは稍々撞着に似たるも、是れ即ちルーソーのルーソーたる所以にして彼れの主觀的に於て必然この論勢あらざるべからざるなり。民約論の説く處は即ち吾人の所謂個人主義の精神なり、其謂ふ處は即ち吾人生命

の力なり以て吾人がルーソーを慕ふは是れ一代の時勢にとりて面目を存すべき所以たるを信す。

吾人は簡明直截なる民約論によりて自然の大眞理を唱破し佛國に於ける革命思想を促かしたるルーソーを貴ぶと同時に、宗教信仰を自主自由の上に立て思想の一生面を拓發せしルーテルの事業を慕ふ。抑も中世紀に於ける宗教は一に形式假相に拘束せられて何等破壊なく、従ふて思想は腐敗し、活動は澁滯し、人は凡べて覆面のうちに呼吸せり。こゝに漸く信仰の革新醸熟し來り、奴隸的思想に代はりて、寧ろ個人、自己によりて得られたる信仰の自主自由に憑依するの思想起るは必然の現象なりとす。即ちダンテ出で、ペトラルカ現はれ、ルーテル顯はる。是れ所謂近世的革新文學にて、文藝復興即ち是なり、宗教革新即ち是なり。

ルーテルは昏迷せる思想を改めて吾人をしてよく自然の方に歸らしめ自由自覺の途に就かしめたり。眞に天國を啓くべき鍵はローマ法王の手にあらずして彼れの手にありき、因襲なる形式の外宗教の信仰なしとせる時代は漸く移り個人は自己の意味を自覺しそめ、破壊革新は世をして純正なる途につかしむべき唯一の手段なる時は熟せり。こゝに一代の歴史を其身に負ひ一世の事業を其名に得たるマルティン、ルーテルは千四百八十三年アイスレーベンに呱呱の聲を發せり、是れ宗教に於ける自主自覺の聲が世に現はれし時、吾人は此機によりて世界歴史の新時期を設けざるべからず。法王アレキサンダ六世、ユリウス二世、レオ十世の驕奢其極に達し、ローマ教會の富財の匱乏甚だしく、所謂贖罪符によりて世を伴なり、放火殺人竊盜の罪惡は一に淨財の喜捨によりて消滅し得べしと説くに至る。假相を棄て、實相により宗教の信仰を求むるルーテルの熱烈

なる至誠を以ていかで黙してやむべき、假相、覆面を褫落して實相、眞實に徹底するは是れルーテ
ルーが立ちし所以にて其期する所は人と世を凡べて自然の眞實純白に歸らしむるにあり、蓋し時
代と人とは既に假相、阿諛と共に粧ふに余りに煩はしきを察せしがためなり、所謂法王、所謂僧侶、
所謂信條凡べて神聖によりて粧はれ久しく世を欺き人を伴はりしも、畢竟之たゞ假相のみ、阿諛の
み、墮落のみ。即ちルーテルは教會の腐敗を辯難し、反抗し、極論し九十五ヶ條の告文を一千五百十
七年十月三十一日ウイッテンベルヒ寺門に掲げ教會の醜陋を責めて贖罪符販賣は神聖なるべき教義
に悖戻せるを示すや一世の耳目を愕かし、因襲姑息なる傳説形式を排除し個人の思想を以て絶対
的信仰の依憑する處となすに至れり。是れ偽りの世上に於て自然の教を布かむとする熱心なる告
文なり。世と人とが凡べて假相と形式との昏迷せる時、茲に人の世は偽りにあらず眞ならざるべ
からずと呼ぶ自然の聲あるは勿論なりとす。ルーテルは最も素樸に最も單明にルソーと等しく、
個人的思想の絶対無限なるを悟れり。既に吾人が個人的思想は絶対なり、無限なり。即ち絶対無
限なるが故に唯一無上ならざるべからず、即ち唯一無上なるが故に抵抗と自主なからざるべから
ず、即ち破壊、革命、こゝに現はれざるべからず。平凡、卑屈、薄弱を蹂躪する精神は發して大旋風
を世に恣まゝにするの時將さに此の機に於て現はるゝなり。ルソーの民約論は即ち是れにあら
ざりしか、ルーテルの宗教革新は即ち是れにあらざりしか。

久しく自由は棄てられ世の衷心は是がために痲痺し、天才の高き理想は罪なりとして怕れらる
ゝ時、最高の自覺は自ら戒むるの聲あるべきは、是れ吾人が本心の自然にとるべき責務なり、自
然を聞き弊惡を指摘し、自己個人の絶対無限を示しつつ、平凡、卑屈、薄弱を痛罵するは、是れ方に
人世の最も大なる聲なり。吾人はたゞ自己の強き力を覺て動搖息むなき波瀾の間に戦ひ、絶え
ざる世の浮沈を樂み、寧ろ獨り世を避け人を侮どり、自らの理想の裡に潜まむか。

吾人は先づ自己の意義を見たり。個人の理想を見たり。而して後國家の意義を見、社會の歸着
を見たり、かくて無限絶対なる満足はこゝに得られたり、自然、人世、無限あらゆる問題が自己の
力によりて成り或は成さるゝを知了せば、自己の思想は眞の神殿として尊ばれざるべからず。吾
人の生命は是れによりて活き、理想は是れによりて向上す。凡そ吾人の胸中に蟠かざる自己の信
念を覺ゆる如く、世にも至誠の感情あらむや。

世と人とが姑息皮相の囚奴となり、隨浪逐波の醜をつぎ、自信なく、理想なき時、自由の曉鐘
によりて其誤謬は覺醒せられずむばあらず。即ちルーテルは靈界の墮落を見て憤りしか、ルー
ソーは社會の懦弱を見て怒らざりしか、至誠の感情と確實なる理性とを以て人世を解し社會を知
らむとする者は、方に然らざるを得ず。恨むる者は劍を握りて戦ふべし、憎むる者は口を極めて言
ふべし、假借、退與は自己の主張にわらず、個人の發展にあらず、吾人は個人の意義及び價値を明
かにしよく戦ひよく争ひしルソー、ルーテルの力と事業とを慕ふて已まず。人世の眞義を忘れ自
然の理想を求めざるの世に吾人はこゝにルソー、ルーテルによりて始めて自己の價値と個人の
意義の何ものなるかを知り得たり。吾人は須らく理想と生命とを一にし、神と人とを一にし万有
を其實体に歸らしむるを夢みて社會と戦ひ道徳と争ひ、時と處とを超越せざるべからず。

四

マキアベリは近世の政治論に一生面を與へ道德宗教と政治の分離を明瞭にし、以て個人の據るべき處を自然に求め得たり。吾人は今茲に政治論上マキアベリスムの如何を謂ふを欲せずして、彼れが極端と絶對とを其主義とし、よく直截單明なる個人の意情の存する所を明かにしたるを多とす。彼れは道德を怖れず宗教を省みず、道德上の所謂善美を否認し、宗教上の所謂神の惠愛を疑ひ、政策のため道德及び宗教のいかに苦慮するの要なく唯期すべきは政治の獨立を認め君權或は共和を極端に主張するにありとせり。彼れの主張は全く道德宗教を政策の附隨とし、道德の善惡或は宗教の教義を以て政治的價值なしとするにありき。道德の善は惡たりとも惡は善たりとも政治上何等の良心あるなく、政治的權威の維持擴張によりて始めて目的を知るべく價值を論ずべし。之を以て政策の途上殘忍暴悞あらゆる惡業を敢てするも權威は之がために咎がめらるゝものなし唯多くの場合に於て道德を論じ而して政策を經營するの捷徑なるのみ。勿論道德宗教が拒むべからざる勢力たる以上は是によりて政策を取捨すべきも、一に是に拘束せられて道德宗教以上に政策の自由を欠くことあらば險難寧ろ多かるべし。君王はために宗教に熱心なる如く粧ひ、道德に篤實なる如く佯はりつゝ、而かも政策の必要上道德の意味に於ける惡魔となるの覺信なかるべからず、もし權威に觸るゝものあらば罪惡の手段を撰ぶに躊躇あるべからず。かくて始めて政治的權威の無限絶對を保ち得べき也。

彼れマキアベリが政治と道德宗教との分離を律せるは、現に吾人が個人として存する時既に道德宗教に絶對の依憑なきを認め得たるに由るものにて、彼れが政治施策の絶對を論せしと同時に、個人が道德宗教より超へて絶對無限の眞價の存すべきを示せり。ロックが國家對國家の關係が自然なりと謂ひしが如き見解に於て、マキアベリは政治が道德宗教の以上に超越するを論せり。吾人は更に個人が道德宗教を離れて自然に活くべきを欲す。道德に諛び宗教を貴ぶものは自己及び個人について其意義價值を論じ難し。之を以て自己と個人の眞義を了知せむと努むる者は宗教によらず道德によらず自由と自主とによりて思想を新たにせざるべからず。吾人は何が至善にて何が不善なるかが仁慈にて何が殘忍なるかを問ふの要なし、たゞ國家或は個人の自由自主を維持擴張する方策を探れば可なり、何を煩はしき道德宗教に依るの要あらむや。あらゆる社會上の事物は個人自己の貪慾詐欺の結果なり。この見所に於て社會の道德宗教に諛ぶるは個人の慾望詐欺より出づるは勿論、而かも其最も甚だしきもの也。吾人が社會に於て偽はり欺かざるべからざるは畢竟道德と宗教とあるがためのみ、若し社會に於て假相形式を貴ぶ道德宗教なかりせば吾人は既に偽り欺くの要なく、自然の力のまゝに求め眞理のまゝに謂ひ得べきなり。かくて吾人が自然に歸らむとするの時、偽りの道德に反抗し、誤まれる宗教を破壊せざるべからず。即ち知る、吾人が社會の道德宗教に處するの途二あるのみ、阿諛と詐欺とによるか、將た反抗と破壊とによるか、かならずや何れか其一に居らざるべからず。若し吾人を目して社會の道德宗教を徒らに避くるものとなすあらば、そは大なる誤りなり、吾人は道德宗教の其名によりて負ふが如き價值あるを認めざるなり、其名によりて負ふが如き假相形式を褫落せむとするは即ち吾人の所謂個人主義たるを

信す。吾人の所謂個人主義が然らば社會の道德宗教に處するに於て、阿諛と詐僞によるべきか、將た反抗と破壊とによるべきか、扞ぐるを欲せず屈するを知らざる吾人の所謂個人及び自己はただ反抗と破壊とによりて道德宗教に向ふて鐵槌を試みざるべからず。吾人が道德宗教に對して阿諛によるべきか反抗によるべきかは是れ正さしく道德宗教を社會的に解するが將た個人的に解するかの差別に起因す。既に吾人は道德宗教の假相形式を破壊すべく戮力せざるべからず。こゝに於てか吾人は惡魔の力をかりて道德宗教を毒し時代と害せむと欲す。バイロンが惡魔は眞理を語ると謂ひしは至言と云ふべし。即ち吾人は惡魔となりて始めて自然を味ひ眞理を明かにし得べき也。かくてマキアベリズムが道德宗教によりて嫌惡せられ、吾人の個人主義が社會の仇敵となるは必然のこととす。

マキアベリが專制政治の擁護者たると共に民主政治を以て最も信用ある政体となし、時と處とに於て最も適當なる法制なりとせしは、矛盾の如きも決して然らず、ルソーが狂烈なる社會の契約を論じつゝ主權の專制を論せしと一般、吾人はマキアベリの論據の價値を是れによりて認む。是れ正さしく個人主義論の採るべき適當なる矛盾なりと信す、何となれば吾人の所謂個人主義は感情に於て須く專制的、獨斷的なるべく、而かも理性に於て須らく共和的、一般的なるべきためにして強烈なる意情と明確なる理解とを有する所以なればなり。

アッシリヤ王サルダパルスは戰爭の捷利を欲せず國治の榮譽を期せず、たゞ日夜歡樂歌舞の裡に飲み且つ謳ひ快樂と奢侈とを以て自ら其權威と信じたり。彼れは快樂を以て目的とし主義とし

其他は悉く指彈すべしとなし、忠良なる宰相サレメンスの諫言を耳にせずメーラの愛に溺れアッシリヤ王國の前途について毫も憂ひ悲しむことなかりき。彼れは目的と手段とを撰ばず唯快樂遊宴を以て絶對の價値とありとなし道德及び宗教のいかゞに多く苦慮せず、却て是れを破り是を害したり。吾人は快樂其物についてこゝに述ぶるを欲せざるも、暴王サルダパルスがいかに世と人とを輕蔑し道德宗教を無視せるかを見て、彼れがいかに個人自己の絶對的眞價を最も忠實に自覺したるかを知り、其性情の潔白快濶を愛せずばならず。叛逆の内亂もユーフラティスの洪水も何ぞサルダパルスを脅かすに足らむや、長命は彼れの欲する處にならず、たゞ求むる處に従ふて歡樂を肆にし、美はしく活さむは彼れが唯一の生命なりき。かくて彼れは枯れ凋む蓋微たらむよりは手折られて亡ぶ蓋微たらむと欲し死の突然歡笑の間に襲ひ來らむを望めり、以て彼れが強き決斷を知るべし、眞に吾人は病を得て恐怖躊躇の中に死せむよりは氷刀一閃の下に死するを望む。勿論吾人は短命を欲するものにあらず、亦靜かに死するを望むものにもあらず、蓋し吾人は生命と死とに最も眞面目なればなり。然りと雖ども老衰の身を惜しみ病褥に苦しき呼吸を吐き尙醜劣なる生命を貪らむとするは吾人の斷じて避くる處也、何となれば吾人は自己の權威によりて活くる生命を望むも、醜劣自ら耐へざる生命は寧ろ死するに若かざるを信すれば也。

彼れが叛亂を征討するに際して甲冑の輕きものを撰び取り、其陣を出でむとするや鏡を求めたりと云ふが如き悠々、殆んど凡百の窺知し難きものあり。彼れ輕羅淡粧恰かも婦女子の如きも、而かも戰陣に立つて周章狼狽の色なし。眞に彼れの如きは方に天に冲する赫灼たる光輝の雄々しき

にも較ぶべからむか。眞に是れ自然の健兒たり、猛將たり常に英傑の心情は憂ひ僞はることなき小兒の如けむ。彼れに向ふて恐怖も更らにかなふなし、快樂と代ふるに於て王國とはそも何ぞや、王冠とはそも何ぞや。宰相サルメンスは國事の日々に多端に迫り、サルダナバルスの暴飲狂遊は愈々甚だしむを見てア、シリヤ王國の禍害將々に至らむを憂ひ、彼れに警醒を促がすも、彼れはさながら巖壁の上に立てるが如く驚かず悲しまず、極端と傲慢を以て世を愕かし人を怖れしめむとせり。即ちサルダナバルス宰相サルメンスに謂ふて

That is to say, thou thinkest him a hero,

That he shed blood by oceans; and no god,

Because he turned a fruit to an enchantment,

Which cheers the sad, revives the old, inspires

The young, makes weariness forget his toil,

And bear her danger; opens a new world

When this, the present, falls. Well, then I please thee

And him as a true man, who did his utmost

In good or evil to surprise mankind.

詩人バイロンはマンフレッドの劇に於て社會を怒り道德を憎み、強き自己の力は是れと伍すべからざるを謂へり。

I disdain'd to mingle with

A herd, though to be leader and of wolves.

The lion is alone, and so am I.

マンフレッドが社會を憎み道德宗教を恨み自ら超然自己の力に據りしと一般、暴王サルダナバルスは王國と王冠とを蔑視し、社會道德を自ら至誠となさず、個人を満足するを以て唯一の理想とし唯一の生命としたり。道德を以て人世の理想を説く者あらば是れ甚だ誤謬なり、歸する處は唯々個人の満足のみ、是を措いて吾人は將た何れに行かむか、若し道德が個人の意情と相容れずば極力是れに戮力を與へ其破壊に努めざるべからず。

吾人は道德宗教の阿諛、假相の中に耐へず、個人の信仰意情によりて眞理と自然とを赤裸々に表現せずむばならず。道德宗教の形式詐僞は世を壟斷し、一切の僞文明は即ち是れによりて形作らる。自然と自由とを主義とするを知らざる所謂宗教家及び道德家は政策を平和人道の名に假り、卑屈僞善を正義善徳の名に誤るるは甚だ吾人の怪しむ處、自然の靈力に歸りて個人の威權を高め眞に天才と人格の美を躰現せむは吾人の使命たるを感じ、義務たるを信す。所謂道德家及び宗教家は道德の外に吾人の生命あるを知らず、宗教の外に吾人の心靈あるを忘れ、強いて誤謬を辨護す。あゝ何等の醜惡、何等の僞善ぞや。

五

吾人の所謂個人主義とは實に吾人が自然より有せる義務を自覺し亦其發展を期するにあり、吾

人は神明の聲によりて自己の心情に至誠ならむを命せられたり。然かるに世の道德宗教は自己の意義を忘れ今の國家社會は自己の心情を没す、即ち現時あらゆる形式假相は第一義の自覺を拒認し、殆んど其底止する所を知り難し。是れを見て怨み怒らざる者は卑屈なり、墮落なり、自然の愛兒たり自然の健兒たる者、いかで黙して己むべけんや。是れに於てか個人の發展、人格の發揚を望む者は破壊戮力の情に燃わざるべからず、恐怖を壓服するに勇ならざるべからず。あるゆる威壓に克ち恐怖を制し得て之を脚下に蹂躪せずむば眞に個人の發展を望み眞理の明瞭を欲し難し。之を以て威脅に克ち恐怖を制する程度は直ちに以て其人格を論じ得べしと云ふの敢て過言にあらざるを信す。

吾人が胸裡に存する思想信念を遺憾なく謂はゞ、豈自己の外ならむや、まことに吾人は個人主義ならざらむと欲するも豈得べけんや。自然に近づかず自己に親まざる者はよく世の卑屈墮落と共に逡巡、以て甘んせむも、吾人は恆に自然の眞理と自己の心靈と俱に活きざるべからず、實に吾人は一切あらゆるものゝ上に吾れはこゝにありと謂ふの事實を拒む能はざるなり。吾人が自己を主張し自由を要求するは是自然の中心より發し來りし聲にて、吾人は是れを聽き亦聽かざるべからざる也。自己と個人との問題は即ち吾人が「人たる」の資格に於て最初の問題にして亦最終の問題たり、あらゆる一切は是れに始まり是に終はり、吾人の理想が自己の觀念によりて活くること、恰かも生命が空氣と鹽と水とを要するが如けむ。

人格と天才とは凡べて自由のために戦ひ、自然のために歌ふ。吾人は苟も自然と自由とに最も忠ならむと欲せば人格と天才の大なる理想によりて自覺なくむばあらず、即ちルーソー、ルイテルの如き自覺なくむばあらず。佛國革命の如き喚醒なかるべからず。武器用ゆべし、ギロチン用ゆべし、吾人の胸より奪はれし自由を救ふべく道德宗教を憎むはこれ實に人格及び天才のなすべき神命なり。佛國革命時代は暗黒恐怖の時代にして悲惨の流血を償せりと雖も、寧ろ佛國々民は之によりて光明と自由を見出し得たり。假相と虚榮とによりて吾人を伴はり眞理を否み自然を拒まむとするも、眞理自然其物は到底滅すべからざる不盡の燈なり。人はこの不盡の燈を蔽ひ其影に集むひ、強ひて光を避くるも、吾人は其迂遠なるに苦笑せずむばあらず、あゝ燈火其物に何の罪ありや。かくて吾人があらゆる虚偽を棄てゝ自由自主を謂ふに於て何の罪ありや。而かも道德家宗教家は自己と個人の思想を強ひて蔽ひかくし罪せむとす。吾人の謂ふ處、勿論不慎の憤怒と狂狷の反抗多からむも、而かも個人の發展を主義とするは神の眞理に立てり、吾人は自ら偽はり、本心に背くは更らに忍びざるなり。吾人は此處に立てり、他になす處を知らず。

吾人が所謂個人の心情は恰かも柔かき春風の如く、而かも凝然として金鐵の如く、熱しては火燄の天空に狂ふが如く、怒りては獅子の吼ゆるが如く、其高潔にして淡素なること涼しき泉の巖間より滾々として流るゝが如きあり、明快なる小兒のそれの如く而かも一度び立ちて叱咤すれば掀天翻然燃えて天上の火燄となる也。かくて涙と美とは常に吾人青春の胸に宿せり、力と事業とは常に吾人が腕の血汐に張る。吾人は自己の中に自然の囁きを聞き、自己の中に青春の力を覺て、始めて心靈の無限を謂ふべく、事業の名譽を謂ふを得べし。自己を知り自己を信するは即ち

是生存其物也。活くる生命と進む理想との存在及び價值は唯一の自己に歸す、自己ならざるもの凡べて無意義なり、無價值なり。

要するに吾人の所謂個人主義とは意情の唯一絶對を主張し、自由、活動、威力の無限を理想とし、ために宗教を嫌ひ道徳を疑はむとするにあり。是れ實に吾人が心情の實跡にて吾人が生命の意義と價值とは一に是れに係る。即ち自己の觀念によりて一切の理想と實在とが統一せられ影響せらるゝの謂也。かくて吾人の天國と自然と人格とはたゞ所謂個人主義によりてのみ啓示せらるべき也。



雜 錄

俳 話 數 則

紫 影 生

「夜話の長さを行けばこの山」といふ句は、來山の「短夜を二階へ足しに上りけり」といふ句と共に、俳句には珍しき著想なり。只前者の「長さを行けば」と、たほやうに言ひたるに對して、後者の「足した」と勘定づくめなるが、理窟に過ぎて俗に墜ち、川柳めきたり。同じ人の「早乙女やよこれぬものは歌ばかり」も同じ病を免れず。

世に一体の歌と傳ふる、門松は冥途の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなしとは、來山の句「門松や冥途の道の一里塚」に據りて、小説家流の作爲せしものなるべし。

來山は獨身の隱者にして、磁製の女人形を愛玩して、之が記を作れり、其文洒脱にして、人の願を解く。「獨寢や幾度夜着の襟をかむ」といふ句に、誓文身の事にてはいはぬぞと、ことわりたるは愈可笑し。天明の句に擬人法の極めて巧なるものあり。

蛇落ちて驚く崖の若葉かな

維 駒

筍にあなづられけり瘦腕

五 明

木の枝に蛇の落ちかゝりて、ざわ／＼と木の葉の震ふを、驚くと形容したる、弱腕に抜き煩ふを

筍にあなづらるといへる、慥に元祿の句に見ざる所なり。

誰やら批評家の語に、嗅感を詩化することは、近世歐洲文學の風潮にして、日本文學には古來缺如する所なりといふやうの説ありき。されどこは能く日本文學を解せざる者にして、和歌にこそ「色こそ見えぬ香やは隠るゝ」といふが如き愚劣なる觀察を見れ、俳句には巧に嗅感を詩化せる例、決して乏しからず。

市中は物の句や夏の月

九 兆

酔き句甘き句や夏木立

五 明

詩歌でも俳句でも、偶然古人と暗合するものと、故意に前人を襲踏するものとの二種類あり。暗合せし場合には、其功を古人に譲るべく、前人を祖述するものは、腐を化して新となし、鉛を煉つて銀となす底の手腕を要す、楊萬里は杜詩の薄雲巖際宿、孤月浪中翻と、庾信の白雲巖際出、清月波中上とを比較して、出上の二字勝るとし、庾の永韜三尺劍、長捲一戎衣と、杜の風塵三尺劍、社稷一戎衣とを比して、杜の勝と定めたり、放翁は韓羽の作、門外碧潭春洗、樓前紅燭夜迎、人より出でし、晏叔原の門外綠楊春繫馬、床前紅燭夜呼、廬を評して、氣格乃ち本句に過ぐ、剽といはずして可なりと斷定せり。俳句の如き短詩形にあつては、殊に等類に陥り易し。左に舉例する所、詞を借りたるもの、意を同じうするもの詞意共に相似たるものあり、暗合もあるべく、祖述もあるべし、要は其作者の前後と其手腕の優劣とを判すべきのみ。

幟立つ母なん遊女なりけらし

大 祇

衣更母なん藤原氏なりける

燕 村

勝迹の旅人あやしや辻角力

大 祇

飛入の力者怪しき角力かな

燕 村

入道のよくとまゐりぬ納豆汁

燕 村

僕等のよくと盛りけり葱汁

召 波

西行の姿は秋のゆうべかな

宗 因

秋はこの法師姿の夕かな

芭 蕉

妙身童女を葬りて

芭 蕉

霜の鶴土へ薄圍も被せられず

其 角

母の喪に墓にまうでて

其 角

さればとて石に薄圍もきせられず

一 茶

時鳥くくとて寝入りけり

調 和

時鳥くくとて明けにけり

千 代

余此頃十年來の句を編集せんとして、古人の集を見るに、余の句の百年前二百年前、既に巧に道破せられてあるに、慥にたらずんばあらず。

夕月に田螺なくなり桶の中

一 茶

春雨や小鍋の中に田螺なく

一 茶

星影に田螺なくなり豊浦寺

大江丸

田螺なく田毎の寺や星明り

木棉とる大和河内の日和かな

蕪 村

木棉とる岡崎村の小春かな

つとめて新意を出すにあらずば、古人の嗤笑を免れざるべし。

前田家姓氏見聞記

一、三 華 頂 山 人

我れ北辰校に入りしより星霜を閲する二年常に見る校裡吾むす壘壁の上、古松參差し風籟に和して「城春にして草青みたり」と語るものこれ昔し加能越三國百萬石 主たりし前田家の遺物にあらずや我れ好古の癖あり學事の餘暇杖を野田山に引きて藩公の墳塋を弔ひ古書に尋ね古老に問ひ前田家の歴史に就て知ると以て唯一の道樂となせり今前田家の姓氏に就て見聞せるところを抄出せんとす然りと雖も未だ正確なる研究を遂げたるものにあらずれば誤謬定めて多からんこれ亦後日の研究を待ちて訂正することとせん、

加賀藩祖前田利家は尾張國海東郡荒子領主縫殿助利春(利昌)の第四子にして天文七年を以て生る少壯にして織田信長に仕へ屢々軍功を著はし後に豊臣秀吉に従ひて重用せられ五大老の一となり

官位は從二位大納言に昇り領土は加能越に跨る慶長三年秀吉の薨するや遺命を奉じて幼君秀頼の守護に任じ同四年大坂に薨す年六十二從一位を贈らる子利長時勢の變遷により徳川氏に仕へしより利常、光高、綱紀、吉徳、宗辰、重熙、重靖、重教、治修、齋廣、齋泰、慶寧の子孫相承け三國百餘万石を領し海内の雄藩たり居城は金澤にして昔し尾山城と稱せるものなり明治維新に至り版籍を朝廷に奉還し五年侯爵に列せられ利嗣利爲の二主相次きて現時に至れり

前田家は菅原氏を稱す即ち贈太政大臣菅原相道眞公の後裔とし世々菅原朝臣と稱す吾人は前田家を眞に菅氏とすることに疑を抱けり前田家の菅原相より出でたりと云ふの本據は醍醐天皇延喜元年右大臣道眞公は一旦勅勘を蒙りて九州に貶謫せられ三年終に配所に薨す其子孫の九州にあるもの、内に前田氏と稱するものあり此れよりして前田家の起れるなりと、本藩系譜諸記録之に従へり

此の由緒に就ては一二の異説あり即ち一は道眞九州にありて二子を生む兄を前田と云ひ弟を原田と云ふ(即ち前田家は此れより出でたるものなり)と此の説を出したるは林道春が寛永系譜に起り前田創業記等之に和せり前田創業記に曰く

縫殿助(利春)父者主膳尾州荒子之豪士菅原姓前田氏菅原相之後胤矣菅原相爲人雄俊博識也延

喜元年二月朔日配流筑紫大宰府道眞於此産二子一兄以三前田一爲三稱號一弟以三原田一爲三稱號一

前田氏自三筑紫一來三尾州一住三荒子一至三利春一六世

即ち此説によれば道眞の筑紫に於て生める子が前田氏を稱し其子孫の筑紫より尾張の荒子に移れ

るものなりと見ゆ

他の説は前田氏の流は道眞が九州に配流せられたる後に生まれたる子孫にあらずして道眞の配流せらるゝや子女之に坐して刑を被るもの多きも未だ冠せず婚せざるの子女は父と離別することを悲しむを以て官の許可を得て共に九州に下れるものあり（大鏡北野縁起等此事跡を記す）其子孫九州にありて前田氏となり原田氏となれるなりと即ち垂統列史に曰く

高徳公諱利家其系出於野見宿禰……贈太政大臣道眞歷事宇多天皇醍醐天皇勳業大著天下稱爲賢相延喜元年以讒貶大宰權帥有男女二十三人皆被貶黜唯聽チ小男ノ隨行ヲ其一稱ニ前田ト其一稱ニ原田ト世居ル筑紫ニ前田氏數世之後舉族東徙シ尾張ニ至リ休岳公ニ蓋六世ト

更に奇抜なるは前田家は菅亟相より出てしものにてはなく藤原氏なりと云ふの説なり藩翰譜の一説に曰く

又或人の曰く前田もとは藤氏なるべし右大臣藤原魚名の末葉北陸道七國の押領使越前の追捕使齋藤越前權介爲頼がのち六波羅の奉行人齋藤伊豫守其基が孫前田孫四郎利世が孫にあらずや

と此問題に就ては我れ未だ研究せず果して前田家が藤原氏より出でしかに就ては十分考證すべき問題なりとす

以上の二説に就て思ふに菅公が果して九州に下り其地に於て婦女を近け子産めるやに就ては甚だ疑はし菅公は宇多醍醐兩帝の寵遇を被り儒林より破格の拔擢を以て攝家藤氏に對抗して太政に參與せり然るに一旦讒によりて左遷せられ太宰權帥となりて九州に下るや謹直身を持し忠貞上に奉じて衷情を表し以て三年を送れり彼の十五夜の月を詠めて去年今夜侍清涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣今在此捧持毎日拜餘香と嘆せる彼れ、今や得意の時代去りて詩に歌に深刻なる悲痛をなせるの彼れに於て婦女を近づけたるの事跡を聞かず當時の史實を記せる大鏡を始め日本紀畧扶桑畧紀等にも九州にありて子を産めることの記事を有せざるを見ても此事實は大分之を否定せざるべからず吾人は前田黨の手に成れる記事の外正確なる立證を見ず

又道眞の子女の隨行して配所に越けるものゝ子孫に前田氏を稱するもの出でたるを云ふものあれどもこれ亦要するに確證とはなきなり菅家後集には道眞が配流後に小男小女を慰むる詩あり然れども別載の詩によるに小男は夭折せるものゝ如く小女は終る所を知らざるが如し其他に正確なる立證を認めず又菅原氏の系圖を見るに彼の子女の終りを全ふせるもの十男三女あり各々其經歷の概要を知らるれども未だ此等及其子孫の何れよりも前田原田兩氏の祖となれるの人を見ず猶は前田家と宗を同うすと云ふ原田氏は其族多くは大藏姓なるを見ても此説もまた正確なる根據ありともすべからざるなり

要するに前田家の菅亟相の後より出でしと云ふ事は不明の事に屬すと云ふべきなり故人曾て前田氏の出所を藩主利常に問へるものありしに答へて曰く「利家以前は余之を知らず」と又將軍家光利常に諷するに和歌を以てして曰く「誰がうわし種とはなくて賤が家の自づからなる梅の花垣」と傳へ曰ふ利家平生自ら菅公の後たることを稱すと蓋し前田家の菅原氏を稱するの消息此邊にあ

るにあらざるか由來家系を重ずるは我が國粹として存し英傑の古來名門の系統を借り來りて以て己が頭上に冠せたるの例亦少しとせずさは云へ我れ研究の不十分否な堂に升りて室に入らざるの徒が名家の家系に就て喋々するは實に其祖先を辱しむるの罪重し後日の研究を待ちて之を贖はんとす

更に菅原道真公の後と稱せらるゝ名家の前田と稱せらるゝの出據を伺はんにこれ亦兩説あり一は筑紫にありて既に前田と稱せられしものにして筑紫菅原附近の地名より出でたるなりとす藩翰譜の一説に

按ずる人の曰く菅原の御すへ筑紫大宰府の菅原のほとり前田と云ふ所に住すこれ筑紫前田のうつて出し所なり其子孫尾張にうつるなりと、

此説を是認すれば前田氏の祖先が九國にありし時に前田氏を稱せられたるならんか（前の垂統列史、前田創業記の引文も亦此考を起すに有力なるを見る）

又他は利家の父祖が尾張の一豪士として住める時居所の地名に因りて前田氏を稱したりとの説なり藩翰譜に曰く

利家の父前田藏人利昌尾張國海東郡荒子の城を領す系圖を考ふるに藏人利昌が領せし荒子の地前田といふ所をさること僅に十町とのせらるこれは住せし所によりてかくは名乗りしなり又菅家見聞録に曰く

利家公は菅丞相の後にして其先き筑紫の地より出で給ふと聞く……夫より代々九州の菅家

と稱す是れ也代を経て筑紫より美濃國に移り又美濃より尾張に趣き愛知郡前田の庄を領し給ひ荒子村に城を築て住み玉へりさるによりて人其家を前田殿と稱ふるなりかるが故に自らも終に前田と稱し玉へりとなん、

此説によれば菅原氏の後なる名家が居住地なる尾張の前田庄の名を取りて前田氏と稱ふるものにして九州より移住の後の事なりと知らる我れ思ふに菅原氏の後より前田氏の出づるか否かは未決の問題としても藩祖利家の尾張より出でたることは明かなれば彼の父祖が居住の地名を選んで以て氏となせるは頗る當を得たる事とす我國の諸姓氏中居所の地に因んで命名せられたる其例少なからざればなり

前田家の姓氏に就て我の伺ひ知れること斯の如し要するに加賀藩主前田家が菅丞相より流出せりと云ふことはこれ疑問にして未決の事に屬すと云ふべきなり然りと雖も我れの推斷たるやこれ坊間流布の些少の書籍を根據として成立するものにして寧ろ盲斷に屬し未だ参考用書の源底を盡して考證せる確論にはあらざるなり我れ此事に就て金澤に流布する参考書を求むるや切なと雖も發見せるもの右二三の書に過ぎず然り今後舊藩主及諸舊家の秘藏せられたる藏書記録文書を見るべきことを得ば裨益する處定めて多かるべく此未決の問題を解決するに力あらん近年前田家の事業として加賀藩史稿の編輯あり未だ完成に至らざるも史記に倣ふて世家列傳志表に次を分ち完成の曉には有力なる史料とならん然りと雖も一たび本書を緝き見んものは前田氏の姓氏に就て正確なる考證をなさずして之を不明の中に葬れるを知らん、況んや餘の諸書をや唯だ後日の研究を待



ち之を明かにせんとす (終り)

濁 流

文 瀟

清泉の山間に湧出するもの、露の玉の如、實にや美しき其容姿、涓々として鳴り、潺々として流れ、漸くにして一溪流に濺ぐ、緑樹の蔭なくば、濕土の惠なくば、なごて彼溪流の運命に達するを得む、幸に健なれ、汝、清泉、願はくは永遠に其様を保てよ、

濁流流る、濁流流る、見るさへ恐しく滔々として流る、漠々として天光を濛はし、如何なる清流も皆其色に化せずんば止まず、堤防に立ちて清泉を呼べば幽かに答ふ、あゝ止みぬるかな

清泉來れ、清泉來れ、汝清泉腕を扼して來れ、身體を鍛うて來れ、汝が力能はずや、汝が力能はずや、此濁流を溶々たる金波流るゝ一江流たらしめむとす、

清泉君よ、われ能はず、吾父も母も兄弟も姉妹も皆之に化せり。境遇は寸時にも、われに然ら

らむ事を強ふ、君よわれ能はず、今となりては反つて濁れるは清きより愉快なり」

なに能はずとかな、あゝ薄弱なるかな、汝か意志よ、汝が自信よ、汝知らずや、確固たる自信と意志とを持ち、正義の旗を翻して同志を集め、堂々たる陣を構へて彼と戦ひ、策を帷幄の中にめぐらし、勝つことを千里の外に決せよ

清泉「あゝ君も與に談すべからず、願はくは君よ生か身になりて見よ、わが身は同志を集めむために止まる能はず、われの周囲の幾百萬は前へ前へと進むに非ずや、豈、われ一人止まるを得むや、而して周囲は皆濁れるに非ずや、豈、われ一人濁らざるを得むや、君の知る如く、われも生れながら濁れるに非ざりき、然れども境遇は如何なる大學者をも變ずるものなり、況んや生に於てたや、われに對して助力し得る範圍はわれの境遇をこそ變ずべきなれ、人は生れて以來の一分一秒を代表するものなり」

人とは何ぞ、汝は人に非ず
清泉「人も同じければ然云ふなり」

あゝ汝の墮落も其点に至りて極まれり、汝が濁れるを挽回するは唯他日を期して汝を他流に濺ぐあるのみ、

告 別

萩原清次郎

早いものだもう三年になる、遙に東の空に芙蓉の天を摩するを見る、夢であらうか、兎に角余の胸は燃ゆる、
迎へるものは愉快だ、故郷は招き友は笑ひそして希望の巨船は將に理想國に抜錨せんとしてゐる、さて別れるのは！

余が行きなれた菓子屋の主婦曰く「折角ななじみ申して御別れ申すのが名残をしい」、余もそう思ふ、余は境遇が持ち來る如何なる人に對しても愛を抱持する、少くとも愛せねばならぬものであると信じ且つとむる、で金澤の人々に對する愛も三年の今となりて暖かく余の心に生長した、余は感謝するこの愛はこの地の人々の性格氣質に對する余の精神の自由の流れであること、余は金澤に終生の恩人を有するのである、狂暴規なき余の感情をして平靜ならしめ余の爲めに喜んで門を開き余の渴ける時水を供し余の飢ゑたる時食を與へ給へる恩師及び先輩友人に對して余は敬愛欽慕の情を抑ふるを得ぬ、而して別離に際せる今感慨之を久うして遂に余は「永遠」の前に立つをたぼゆるのである、不斷の憂調は天外より波動し來り余の胸はせまつて余は遂に泣く、されど其涙は甘い涙である、願くは神よ常にこの天樂を余に斷つなからんことを、而して靈肉危からん時余をしてこれらの恩人を想ひ起すを誤るなからしめんことを、

余は中學時代劇場に行つて佐倉惣五郎の芝居を見物した事を想ひ出す、傍の婦人皆袂をたはうて泣くのである、別離の惣五郎、之を演ずる役者の同情、而して觀者の感通、余は怪んだそも何の要ありて人は泣かんが爲にこゝに集ふかと、別離……相去り相遇ふは人生普通の事に屬する、されど知らずや別離の曲は連々無極の絲となり運命とつらなり永遠に通ふ事を、別離が深く吾人の心琴にふれ悲調悲歌を奏するは吾人に哲學を與へるからである、

別離は宇宙の音樂である、乞ふ余をしてほしいまゝに泣かしめよ、余は人の余を笑ふに任じ余をわはれむに任ずる、されど少なくとも余を遮らざらんことを、天地の妙調に投せんことは余の最上の志願、例へば別離は過去と將來との分水嶺の如くである、既往の流れは悲調を傳へて遠く幽遠に波動してゆくが將來の光景を見れば霞中に濛々乎たる百花の谷を畫いて鳥嘯り波躍つてゐる、遙かに見る無邊のかなたに金洋の天影をうつしてゐるのを、余は將來の春色に恍惚たる事暫時突如として故郷の山水は出顯し友は仙臺より飛んで余の前に立つを見る、「友よ爾來久澗なりし何故にしかく鬱々たる」、「學問とは山と岡との區別論に過ぎざるか」、あゝ友をしてこの言を發せしむ、「友よ失望する勿れ、我國に於てかゝる教育が廣く行はれつゝあるは、誠にかなしむべき事であるが漸時改良せられるであらう、否、たどひ少數なりと雖も我國現今教育界中人物なきに苦しまぬ、友よ乞ふ安んせよ」――

忽焉として舞臺あらたまつて路上一群の子供を見る、彼等は惡口をいひ石投をし泥こねりをしてゐる、かなしむべきは我國未だ一つのアンデルゼンを有せない事だ、我國御伽噺の作者は何ぞ自

ら卑し其抱負の小なる、た伽嘶といへば日本では本屋の丁稚の事位に考へられてゐるがこのた伽嘶が如何に大なる事業を爲し得るかを思へ、獨逸のウイールヘルム、ハウフなどの着眼は實に見上げたものだ、余は信するた伽嘶によつて將來の大國民を作ることが出来る、余の小供よ！余のまはりに環をつくれ、余は海賊の話をしてやらう——

須臾にして三位一体の暴風雨襲ひ來り教會の友が余の前に且つ泣き且つ怒るを見るのである、金澤の兄弟姉妹が余に對する杞憂と咒咀の響は遠く友の耳にも届いたと見ゆる、「君は教會を捨てたといふ、神の怒を知れ、來世の應果を思へ」、余は長太息した、余は多くの分類中基督信徒のなす分類法を最も嫌ふのである、彼等は人類を大別して Christian and nonchristian とする、勿論多少分類の根據を有せない譯ではない、即ち相異の点として最も著しきは Christian の神經系統が多少リニューマチスに罹つてゐる事である、余は友が信條に化石せるを見て惘然の情を禁するを得ない、今は余は黙しやう、答辨したとて益彼を怒らしむるのみだ、あゝ如何にして迷信を打破するを得べき？西洋に於て中世紀の迷信を倒し近世文明を建設するのに如何に多くの勇者の努力を要せしかを見ればどれ位この事の困難なるか？判るこれ等の勇者の中には希臘羅馬文學の無邊の理想境を紹介したクラシックス派の人々もある、又自然と人情の眞を畫いて天地の洗禮を授けたるロマンチズム派もある、而して更に練腕を振つて天下を横行し法王をして顔色なからしめし科學派の勇士もある、而も今日と雖も猶所謂宗教家は餘喘を鼓して科學に對抗を試み或は之を物質主義と罵り或は *Sensualität* と嘲けりつくある、外國は知らず我國宗教界の現状はどうであるか、余

の見たる二三の教會の迷信に至つては其弊たる實に恐るべきものあるを認める、神經衰弱の感銘を稱してリバイバルといひ黙示といひ蝗の飛ぶか如くに幽靈の後を追つてゐる……迷信は宗教ではない、宗教は *Genial current of the soil* でなくてはならぬ、あゝ可憐の友よ、余の答へざるを責むる勿れ、春が來れば氷も溶けるであらう、余は放逸を喜ぶか故に教會の羈伴を脱し君等と斷つ、あゝ自由、自由！友よさらば！

余はゆきて山をかけ林にさまよはん、芙蓉の高きに座して君等を笑ひ下さん——
忽焉として余は芙蓉の頂に立つた、天地正大の氣は心氣を透徹して足下の山嶽は抱負をささやく。余は前途の光景はこゝに筆を擱き顧みて再び金澤の風貌に一揖し別離の餘韻をして永からしめんと欲する。

余は訣別を紀念せんとて友と一日の旅をした、瀛車にのり大聖寺にて下車し山中山代を巡つて再び動橋より乗車して歸つたのである、此日自然笑ひ友笑ひ余も亦笑つた、山代より動橋への途上夕陽漸やく薄く淡次第に濕ふた、夜陰天をひたして鐘聲幽冥に消ゆるの時感せまりて友曰く「君よ「國家」の言を發する度に我を想ひ起せ、我又しかせよ」[Sei also, Vaterland's' sincere Löstung! 余は一回向山にのほり二回大乘寺山に趣いて金澤に對し訣別を表した、猶餘日を存するが故に或は更に告辭を繰り返すであらう、あゝ金澤！余は終生余の教育者なる汝を忘れぬのであらう、

滿韓瞥見記

入 江 生

今年の夏は滿韓地方への學生旅行者が非常に多い、と聞いては、持て生れた旅行好の身の、立つても座つても居られず、何かよい折もがなご、左右思案の處へ、幸ひの好機會があつたので、兼ての望を達して約二十日間彼の地に遊ぶことを得た。

其折の日記をもととし、後に思ひ出した事や、書物で散見した事柄などを、之れに附けかへて、此程淨書して見たのが即ち此壹節で、其儘机の抽出の底に葬つて仕舞ふのも遺憾のことであるので、再録してここに載せることにした。

法螺を吹くやうであるが、滿韓の地は、苟も眼を東洋に注いで、自ら其經營に任せむとするものゝ、必ず看過してはならない所で、政治上にまれ、殖産上にまれ、之れを導いて偉大の勢力を此地に扶殖す可きことは、我國の天職であり、同時に我國民の義務ではあるまいかと思はれる。此壹節もとより、唯一「滿韓はどんな所か」位の説明に過ぎず、恐らく何等價値の無きものであらうが、いつか此日本の新發展地に遊んで見む、との志望ある人が、之れを以て参考の壹助とせらるゝことを得ば、記者の満足は此上もないのである。

八月壹日、午前三時半過ぎ、船は早對馬の東端三島燈臺九哩を離れて、釜山港口に着いたが六

時少し前、檢疫も無事に済んで八時錨を揚げて港口に入つた。只見る灣口には周圍七里の絶影島牛の如くに横はつて外海の風波をさへぎり、港内波は靜かに鏡のやう。釜山の市街は正面、目の前に見えて居る。解がまだ來ないので舷側に立てポンヤリと町を眺めて居る處へ、白衣男女の壹團が小舟に乗つて本船に寄せて來た。何であらうと舷門に出て見ると、之れぞ有名な所謂官妓の壹行で、我々に對して歓迎の意を表せむ爲めに態々來船して呉れたとの事である。四人の婦人が即ち其舞妓で、髪は束髪、上衣は筒袖、下衣は何だか紹のやうなもの、此外に、冠を載いて威議堂堂たる男子十人、之れが囃子で、各々太鼓、胡弓、鼓のやうな物を持って居る。やがてトン／＼ピュー／＼と聞ゆる囃子で舞妓は立上つて所謂朝鮮ダンスが始つた、乗客は皆ここに集まつて、ダンスが續々向けられる。曲は何といふのか、何しろ少しも面白くない舞踏だ、唯クル／＼と歩き廻つて、足をあげ手を振るばかり、はては越中禪のやうなものを兩手に持つて振り廻し始めた時は大喝采、或者曰く「禪踏だ」と、蓋し其名の當を得たものであらう。

午前九時乗客は悉く上陸した。棧橋の處には朝鮮の人足がウジ／＼と群つて口々に何だか譯の分らんことをせなつて、争つて手を出す、荷物を持たせて呉れといふのであらう。此人足を朝鮮語ではチゲクンといふ、チゲは擔子のことでチゲクンは擔夫を意味するのである。棧橋からすぐに釜山の市街即ち日本の居留地で、流石は徳川時代からの殖民地だけに、今では五千余の日本家屋が軒を併べ、町名も日本的に、本町、北濱町、辨天町、等各々一丁目二丁目があつて十二區に分れて居る。町の後ろに居留地に負はれて鬱蒼と松の樹の茂つて居るのが龍頭山で、之れには金

比羅神社が祭つてある、こゝに上つて見ると、釜山港は一眼に見渡されて風景類が無い、總ての景が日本其儘で内地と寸分の違もなく、家屋の如きは日本の金澤の町などよりもゾット立派である。朝鮮の家はとさがして見たが、市中には一戸も見當らないで、山の上から見ると、唯アチラの山の端や、ヨチラの海濱に見すばらしくゴラゴラとして居るのが見えるばかりで、之れを見ても、釜山が事實上日本の全勢力範圍内に在ることが分る。内地からの汽船賃は、大坂、神戸から三等六圓、下關から四圓。三十八年の秋から山陽九州等の直通列車と、釜山を發して京城に行く直通列車とを連絡する下關と釜山との連絡船が出來たから非常に便利で、此間を十一時間で往復することが出来るやうになつたのである。「因に誌す本年八月末の最近調査によれば、釜山の日本人口數五千五百八十六、人口二万〇六百五十二、と計算せらる。」

午後二時船は釜山港を抜錨して鎮海灣に向つた。此時甲板の「スカイライト」の上には高壇を設けられて、乗客の壹人齋藤中佐の、日本海海戰の實歴談が始まつた。中佐は旅順閉塞隊勇士の壹人で、日本海海戰には驅逐艦「雷」に艇長として拔群の功績あつた人である。語る者が當時の勇將、語る處が當時の艦隊根據地であるだけに、一層深きインプレッションを興へられた。此時風は左程に強くもなかつたが三時頃から雨が降り出して、六時頃には咫尺も辨せない濃霧になつたので、已むを得ず船は鎮海灣口の並山列島に仮泊する事となつた。船中の余興百出、隱藝續出、甲板の上は宛然たる洋上の大懇親會場である。

八月二日、午前五時半雨始めて晴れ霧も稍薄らいだので船は錨を揚げて仁川に向ふ。正午頃

には己に金鰲列島を右舷に、干汝岩を左舷にながめ、五時頃には左舷遙かに濟州島を見出した。此頃雲霧漸く散じ海上の夕陽鎮島に沈んでかなた山の端に五彩を色どれる海上の美觀！舷側に立つて繪具筆を手にスケッチに夢中になつて居るもの四五、レンズを向けてシャッターを切つたもの亦二三、やがて、木浦の入口にかゝると見渡す島は畫のやうに展開し來り、又去つて、朝鮮の景も此邊は馬鹿にならない。加土島沖で第一回の滿州旅行の學生團體を乗せた三吉野丸に出合つたので皆々左舷に出て一齊に萬歳を連呼したが彼から答へる聲もかすかに彼方此方と別れた。今宵の月は十三夜である、八口浦上月に浮かれて甲板に夜を明かした風流漢は誰れ!

八月三日、空は少しく曇つて來たが、波は至つて静かなので船の進行矢の如く七時近い頃には己にペイカー島を右舷に、クリホルト島を左舷に、九時頃には遙かに豊島を望み、過ぎにし日清の古戰場を通過して十一時に早、船は仁川港内に投錨した。此邊は日露海戰の序幕舞臺で殊に我船のこまつた處は當時コレートの爆沈した邊であるとか、其地に臨んで當時を追想すれば感慨眞に無量である。

例に由て形ばかりの檢疫が済むと直に上陸が出来るので、但、棧橋まで海上約壹里、之れを氣永の韓人船頭、呑氣に構へて悠々櫓を押すことであるから時間のかゝること夥しい「オイ、もつと急げよ」とどなりつけても先生平氣な顔、何處を風が吹くといふ風附でニタリ／＼しながら相變らずギ、ッ、チラ、ゴ、ッ、チラ。こゝらはたしかに韓人の特色を著して居る。やがて一時間半許りで漸く上陸して、先づ日本の居留地に行つて見た、位置は丁度町の中央にあつて最もよい處を占

め、西は清國居留地、東は各國居留地に包まれ、本町、裏町、山手通、海岸通の四條に分たれて居る。本年八月末の調べによると、日本居留地の戸數、四〇、三〇〇、四一、人口一〇、六〇、三〇〇、二〇八、とある。目下日本及各國居留地を中心として西清國居留地にも入り込み又東南の方、朝鮮町の方面にも擴がりつゝあるの、之等居留民が清國其他の外人に支拂ふ借地料及借家料は一ヶ月三万圓以上にも及んで居るといふことである。居留地を縦斷して日本人公園といふに行つて見た、南の方海に面し丘の方には大神宮の社があり、樹木も茂つて仁川第一の眺望を占めて居る。見晴らしのよい處にはズット内地風の掛茶屋があつて、仁川の町から港口の方まで遙かに見渡されるのである、流石は朝鮮の横濱だけに、港内水廣く内外の船舶輻輳して優に朝鮮西海岸に於ける通商貿易の中心たるに耻ぢないと感じた。仁川港に就て今一つ注意すべきことは潮の干満の甚だしいことで、内地では有明海が其第一と云はれて十八尺、仁川は殆んど此二階三十二尺の干満の差を見るといふことである。之れは慥かに仁川港の一大欠点であると思はれた。

公園を背面に下りるとそこが所謂韓人町で、土饅頭を伏せたやうな家がズラリと併んで居る。家の造り方は至つて無造作で、高くもない不細工な丸木柱を構へて之れに出入口を除くの外泥土と瓦と石とをませたものを塗りつけてそれに小窓を一つ二つつけたものである、屋根は無論ワラぶきである。家の中には先づ床を地面から二尺許りの高さに盛り上げ、其床の下には川の字形になつて居る幾條かの溝を造り其一方に火焚を設け反對の一方に煙出をつけ、冬になると特に湯氣を其溝の中に通じて室内を温める仕掛になつて居る、所謂温突といふのは即ち此事である。室内の設

備といつては之れだけで勿論天井などいふものは皆無、襖も無ければ障子もない、四隅は蜘蛛の巣だらけ、此邊の食物の上は繩で眞黒、又小便壺は大抵室の中に置いてあつて大人でも小供でも客の前であらうが一切構はず、チャー／＼とやる、其便器を口の側によせて唾をはき込む、彼等は習慣上何とも思はぬが我々の眼から見ると、穢さ、臭さは實にたまつたものでない。然し當人は一向平氣なもので、金があれば其中に籠つたまゝ、二日でも三日でも床の上に大の字なりになつて例の名物の長煙管をスパーリ／＼、金が無くなれば又出て働く、儲かれば又入つて寝る、とかういふ生活に日を暮して行くのである。要するに韓人の家は陰氣で不潔で狹隘で、只防寒といふこと計りに重きを置いたものと見ゆる。仁川の觀察は之れに止めて夕方再び本船に歸つた。因に、本年八月調によれば、仁川にある日本居留民の戸數は三〇、二〇〇、〇六、人口は一〇、三〇、二〇〇、〇六、とある。

八月四日、午前七時半、艇に乗つて本船を離れ、仁川に上陸、三町計りを歩いて仁川停車場より京仁線に乗り込む。京仁線は京釜鐵道の支線で、廣軌であるから列車の中は非常にユツタリとして、窓も大きく、幅が廣いばかりでなくズット下の方まで切れて居るので之れにもたれて沿線の風景を見るに至極心持がよい。同じ列車に乗り込んだは我々の一行と五六人の韓人男女で、それが丁度自分のすぐ横に座つて居るので仔細に韓人の容貌風采を観察することが出来た。韓人といつた處で、元は同じ東洋人種であるから其色合背恰好、髪や毛の黒いところは少しも日本人に異ならないが、只能く見れば何處と無く薄ボンヤリした所があつて、口をわけ眼がドンヨリとし

て何か道具が足らぬやうに見える。衣服は洋服と支那服を折衷したかのやうに、上衣は筒袖で、男子のは長くて臀の邊まで達するが、女子のは余程短かく胸迄しか無いので眞黒な乳房を臆面なく露はして居る。そして男女とも此上衣の襟に紐をつけて之れを結ぶのである。下衣は支那服のツポンの裾を括つたやうで男子のは頗る太く又長いが女子のは稍短かい、之れを男女とも細い帶で腰に結び止め。裾は蹠節の上を細紐で結ぶのである。韓人の顔の特色は鬚髻と痘痕とで、鬚髻は殆んで大人悉くはやして居るといつてよい位、それが又日本人中に見るやうなケチなのは少しも無く、皆立派なものばかりで一見中々に上品に見える、荷車を引いて居る人足が勅任官的の鬚髻をはやして葉巻煙艸（向ふでは煙艸は非常に廉價で、葉巻で一本二厘といふのがある位）をスバリ／＼やつて行く等は到底日本では見れぬ圖である、又痘痕は五六人中必ず一二人位にあるので、之れは全く衛生思想の無い明らかな證據である、彼等には勿論種痘をして豫防をするなごいふ考もないし又其方法も開けて居ないから、未だに小兒で痘痕あるものが多い、之等は日本の醫術が彼地に普及せられた上で治療の方法が十分つくであらうが、草根木皮の醫術に満足して居る目下の彼等は實に哀れなもので治療政策は韓人を歸服せしむるに唯一の良策であらう、なご考へて居る内に涼車は早や、京城に近附いたので、向ふに南大門の巍然として聳えて居るのが見えた。

十時半頃南大門停車場に着、之れより宮殿に至るまでの路が京城の中心、即ち朝鮮繁榮の中心ともいふべきもので米人と韓人との共同營業になるといふ電車も通じて、町幅も本通は相當に広く十間乃至二十間もある。電車通路は全線を九區に分ち總長九哩一區の賃錢二錢五厘の定めとか。家屋も仁川のなご比ぶれば少しは整頓して居るやうに見えるが、其不潔さは同じで大通路はまだしも、少しく小路に切れると、其臭さ、穢さは寧ろ仁川以上。韓人の小兒が眞裸体になつて溝の中でビチャ／＼行水して居ると思へば其横で女が眞黒の水呑泥の中で白い衣服を捧のやうなもので叩いて洗濯して居る。往來には人糞と、馬糞と、牛糞と、犬糞とがあちらこちらにゴロ／＼一種形容の出来ない臭氣が其邊を閉ち込めて居る、小路などでは、朝起きて、向ひ側の家同志、戸を開いて顔を合はせる時に「御早う」の代りに臀を向きあつて放糞するのが例であるやうな、マサカとは思ふのであるが之れは在京の一人日本人の物語である。

京城の見物は王宮に止めを刺すので、宮殿は慶運宮、景福宮、昌德宮の三つに分れて居る、慶運宮は新王城とくなへ、今は國王の御座所で、又舊王城の景福宮を西闕、昌德宮を東闕と申す、慶運宮の方は拜觀することか出来ないが其外は今回特に拜觀を許可されたので、京城に着いた我一行は先づ昌德宮に向つた、此宮は景福宮の建てらるゝまでは永く國王の住まれた處で、景福宮に比ぶれば規模は小さいが新王城に比ぶれば區域も廣く御殿も立派である、國王御座の間が錦福軒、其他何殿何閣とり／＼に昔の榮華の名残を見せて居るが何しろ朝鮮には古社寺保存法どころか古宮殿保存の企もないので折角の建物も只荒廢のまゝに任せてあるなごこゝらの点に亡國の兆はアリ／＼と現はれて居る。「殿後の秘苑」と額のある門を入ると此中は御園で、山水自然の地勢に人工の妙を施し、松や栗や、種々の樹木の林があり、池があり、亭があり、中にも宙合樓とて

國王宴會の處は緑の林の中にあつて樓上からの眺は實に絶景である、其後ろには又山があり、谷があり、深山の趣をこゝに見せて高い松の木の上には眞白の鶴が群をして舞うて居る、態どならぬ風景は去りがたき思がした。庭の行きつまつた處に六角の堂があつて其横にある小川の少し石に激して小便程の瀑布をなした處に、「飛流三百尺、遙落九天來、見是白紅起、翻爲萬壑雷」と題した石がある。勿論例の白髮三千丈式で、韓人も中々ホラ吹きだワイと感心した。

一時間計りで昌德宮を辭して舊王城の景福宮に向ふ。「光化門」と題した大きな正門前の大通には其兩側に内部、外部、度支部、軍部、法部、學部などの各省が軒をならべて建てられて軍服だけは嚴かな韓兵が威儀堂々と衛兵に立つて居る。景福宮の門を入つて又小門などを過ぎると「勤政殿」と額がかけてある建物がある、中々大構で殿内廣く規模の大きさも昌德宮の比でない、之れは國王大政を見給ふ處で、正前には玉座あり、以下石の柱に「一品」「二品」と順次に彫りつけてあつて、群臣拜謁の席順が定めてある。此外「思政殿」「修正殿」「交寧殿」等が其後に控へ、更に左方には「慶會樓」として國王宴遊の場所がある、殿内第一の建物で四十八本の大石柱で建てられた二層樓で壯觀を極め、そごろに其昔韓帝の榮華を想起さしめた。

景福宮を辭して光化門を出で本通を日本居留地の後ろ、南山公園といふに行つた、居留民の散歩場として朝鮮政府から借り受けたもので鬱蒼たる松の木が茂つて居る南山の腰「倭庄台」一帯の地を占め京城の全市街を一目の下に見て景色もよく夏の涼みにも適し園内には大神宮や天満宮、甲午紀念碑等もある。日本の掛茶屋水店は例の通り拔目なく山腹に陣取つて客を引いて居る、

公園の少し下に居留民の學校があつて運動場には「テニスコート」の備へさへあるには何となく愉快な氣がした。今夜の宿は何處此處といふよりは好意に留めてくれるといふ御寺がよからうといふので、我々の壹行は南山の山腹にある本願寺の別院に泊ることにした。京城に於ける本願寺の勢力は中々偉大のもので創立は二十三年、朝鮮の信徒も九百人計りあるとのこと、目下本堂の新築中である。一切の荷物は寺に置いて先づ何よりの急務は身体の洗濯と、早速居留地の風呂に飛込んで炎天十日の垢を落し、夕食は料理屋に注文して作らせた久々の御馳走に一同舌鼓を打て喜んだ、飯を食へば先づ居留地の見物と、第一に足の向いたのは繪葉書屋、名所の繪はがき、シヨタマ買込で内地への通信。京城居留地の商店は流石に何れも大仕掛の店計りで舶來物屋など一寸内地にも見當らぬ位の立派なのがある、此邊商業の盛の事は京城中で一等と言はれて居る。居留地の見物もよいが今日は一日歩き通して大分足も疲れたので一通にして切上げ八時頃寺に歸つて暑さに癒られぬまゝ、椽先に椅子を持出して下を見下すと、京城の大觀は一目に眺められる、晝の不潔物、塵芥はあどなく隠されて、鴨川の流こそなけれ、丁度東山から見下した京都の夜景といふ趣があるので立場が日本其儘の寺の内だけに一向異國らしい氣も出なかつた。(因に本年八月調の京城居留民戸數は、四〇三〇四十一、同人口一〇六千三百二十八人と註せらる。)

八月五日、午前五時起床、居留地を横断して鐘路に出た。京城繁華の中心で、南大門通りと東西大門通りの交叉点にある普信閣といふ建物の中に納められた大鐘から其名が出たので今の李朝が朝鮮國を建てられた始めから朝晩之れを鳴らす仕來りであつたと、謂れを聞けば有り難いとで

ある。之れから西大門まで幸ひ電車が通じて居るので丁度目の前に止つたのに飛び乗つて、黙つて二錢五厘の白銅を一つ出すと洋服姿らしい韓人の車掌が黙つて切符を呉れる、黙つて受取つて、黙つて腰をかけ、町をながめながら走る内に西大門に着いたので、こゝで降りて三三行くと西大門停車場、一時間計り待合所に待つて後、仁川までの切符を買つて乗車した。

京城から仁川に至る鐵道の沿線は朝鮮の内でも最も開けた部分であるにも係はらず、其間には、町らしい町さへない、何れもはげ山、荒地のみで、小さな家のかたまり——村といはば言はれるやうな——が彼地此地に散在する計りである。

仁川停車場に着いたのが十二時半、早速下車して埠頭から舢に乘込んで本船に向つた、大月尾島を右に過ぎて小月尾島を離れ、各國艦船の間を縫つて約壹時間を経て本船に歸り着いた、時に午後二時。フト見れば朝鮮唯一の軍艦某號も盛に煤煙を吐いて出航の用意をして居る。發船まで、あと二時間を余すので、仁川港に名残を惜んで町を遠望しながら甲板を逍遙して居ると、異装の人が二三人同じく甲板に在るのが見當つた、之れは上陸して朝鮮服を買ひ込んで來た人で、中には冠まで着けて長煙管をスバ／＼吹かせて得意がつて居る物好の人もある、亡國の民を眞似て得意がるのも感心したわけでない。

午後四時船は仁川の錨地を發して鎮南浦に向つた、海上は至極平穩、甲板の余興例に由て益々盛である。

八月六日、眼が覺めた頃には船はもう大同江を通過して居る。新江の島と呼ばれる、飛潑島、乃

至旭ヶ岡の展望の雄大さ、海と見まがふ巨流、日露戦争時代、上陸軍の目覺しさも眼の前に見ゆるやうな心持がした。乗客は皆甲板の上に乗つて、船員を捕へては質問續出、中には「大同江には何時頃入りますか」などと頓馬な事を聞く人があつた。

午前十一時鎮南浦に着した、港内水深く、無論波は立たず、非常に静かな良港である。やがて舢に乗つて町に上陸すると、各國居留地とは名計りで實は日本の家屋のみで氣持がよい、殊に、此地の殖民は最近の計畫にかゝるものであるから、家は悉く新築、有望な空地に至る處にあり、韓國の市街中最も發展の余地多き町であると思つた。此地は平壤の門戸に當り平安道の都色と交通し、黄海道の農産物を控へ、遙かに北清地方と相對して、商業上、形便の地を占め、米穀の輸出は第一位に居るけれども、冬季氷結する爲めに其間交通の枉絶するは其最大欠点である、日露戦役には或重要な上陸地点であつた爲め此地は俄然大膨張を來たしたので戦争當時の繁榮は各地中一番であつたとの事である。(本年八月末の調べによれば、居留民の戸數、七百六十三、人口二千八百八十九)。

午後四時半、一行は平壤行の小蒸氣船平安丸に曳かれ行くダンベイ船二隻に乗り移つて愈々大同江を奥に入つて平壤に向つた。一山來つて一山去り、一岬を送つて一岬を過るの風情は、先づ内地の瀬戸内海を想像すれば大した差はあるまい。日が暮れると十七夜の月は眞ん圓く大同江を照して静かに動く水の流れに金色の魚を跳らせて、チャブ／＼と船はたを叩く音も氣持よく聞かれる。月は清く、風は涼し、客は皆酔ゑるが如く、舷を叩いて軍歌を歌ふものがあれば、濁音高

く義太夫をぞなるものもある。忽ち後ろの船に當つて、澄んだ、透き通るやうな吟詩が聞けた、フト耳をそばたてると吟はたしかに越將軍懷郷の詩！「越山併せ得たり能州の景……」溺々たる餘韻は永く引いて、大江を渡り、一句は一句より悲壯悽快。自分は何となく全身にゾツとするやうな心持がした。嗚呼大同江の流、大同江の月、其流を渡り、其月を浴びて、時や往年の越將軍が遠征の詩を聞く、此一刻は自分が今回の旅中最も深く「サブライム、ビューティー」を感じたもの、一であるのみならず、自分の生涯中、確かに、永く記憶せらるべき景であつたと信するのである。

八月七日、午前一時半、船は平壤に着した、月は愈々高うして愈々白く、左岸に見ゆる平壤の市街には燈火は明けて耀いて、我を迎へ顔に見えた。上陸して三根館といふ韓人式宿屋に入る。

平壤は京城に次ぐ朝鮮の大都會で、古くは秀吉の朝鮮征伐時代に小西行長等が軍を止めた處として、下つては二十七八年役の激戦地として、近くは日露の役開幕第一の陸戦地として、記憶すべき大古戦場である。此古戦場の跡を尋ねむと、寝不足の眼を磨り／＼大同江に沿うて、先づ大同門をくゞつた、之れから以内は所謂平壤の市街で、商店が左右に軒を併べて商業は余程盛であるやうに見ゆる。然し、町は例の通り随分不潔で、其度合は確かに京城仁川以上、殊に市場の穢さは言語道斷で、最も不快な蠅群は此地に一番多く、總ての食物——苟も食ふことの出来るものの上には眞黒にたかつて居て、それが飛んでは顔にとまる、辨當袋につく、扇で追拂つても中々逃げない、大抵の者は十疋や二十疋の蠅を身体につけて歩くといふ有様、其不潔さ、臭さは

實に堪へられたものでない。早く町を通り過ぎやうと、殆んど小走りに急ぐ内、フト後ろの方に喇叭の音が聞けた、誰云ふとなく「日本の軍隊だ々々々」といふ聲が起つて、振り返つて見ると、果して日本兵の一中隊計り、カーキ色の服に身を固めて前に立つ喇叭手七八人、漆黒の鬚を貯へた將軍劍を按じて肥馬に跨り、一隊の士卒之れに従つて、威風堂々、眞に四邊を拂ふ有様で、韓人は皆小さくなつて、物をも言ひわす傍によけて居る。見送つた我々まで肩身の廣い心持がしたのである。

軍隊に従ふ事數丁で分れて先づ、乙密臺といふに登つた、此地は平壤郊外の高地で、前に牡丹臺の天險を控へ大同江の流に臨み、其間には有名な玄武門が見下されて眞に天下の要險である。山を下りて箕子陵に行くには是非此玄武門を通過せねばならぬので、今は壘壁多くは壊されて、僅かに形ばかりを殘して居るが概して想像程は大きくない、彼の原因重吉が乗り越わたといふ障壁すら一丈余りよりない、之れを越すことかあれ程の困難であつたのかと思へば當時の苦戦が忍ばれるのである、門を通過して向ふの山へ歩みを移すと松翠深き處にあるのが、箕子の陵で、光緒十五年（明治二十二年）の再建との事である、古色の掬す可き趣は無いが「箕子陵碑」と題した大碑もあり、殷の太師、太韓皇室の祖靈として崇敬の念に打たれた。此の處から町に出る途中に七星門といふのがある、日露戦役で陸戦第一の火蓋の切られだ處で、當時八ヶ間敷く歌はれた田所一等卒の戦死を思ひ出さずには居れない。

古戦場の見物も略々之れで終つたので、再び町に引返して大同門前より乗船、正午頃の潮時を

見計つて又もや平安丸に導かれて大同江を下つた。

平壤は、三十二年からの雜居地で現今の日本居留民戸數一千三百二十九、人口は五千七百一と注せられて居る（本年八月末調）最も多く來て居るのが山口縣で、次が長崎大分福岡の諸縣であるとか。

此地大同江の流域數十里の沃野を控へ水陸運輸の便があり、商業最殷盛の地であるが、鎮南浦も開け沿海貿易が盛になるに従つて自然其影響を受けつゝある模様である。其他、平壤は美人の名産地とて日本の京都に比せられたものであるが、一同美人らしい女にも出會はなかつたので案外であつた。

夕刻本船に歸り着いて、今夜は鎮南浦沖に碇泊。月に誘はれて、一時頃までも甲板に逍遙した。八月八日、午前六時——起きて甲板に出て見ると船はもう全速力で大同江を下つて居る、椒島の側を通過して初めて外海に出たのが八時、波は靜かに風は無し、乗客は皆上甲板に出て、輪投、「デッキ、ビリヤード」に禿頭から湯氣を出す爺さんもあれば、音楽室に入つて、獨り、ピアノに夢中になつて居るバイかつた學生もある、甲板を唯フ、ラ、と散歩して居る人があると思へば長椅子にゴロリと横になつて語る者も見ゆる。どこを見ても吞氣者の寄合、世の中の人が總てこんな風にして生活して行くことが出來たら、さぞ此世は氣樂な愉快なものであらうに、と思つた。

十一時頃、何人の手すきびか、甲板上に掲示が出た、曰く「日清戦役の黄海を戦は此洋上に於て戦はれたり、遠からずして前方に海洋島を見む」と果然、十一時半、海洋島の影が初めて右舷前方雲煙漠糊の間に現はれた。

夕食を終つて再び甲板に上つて見渡すと、早、大和尚山の高峯が前面に見ゆる「ソラもう大連だ」の聲がそれからそれへと傳へられて、船中俄かに色めき立ち、上甲板は再び人の山。八時半船は徐々に大連港に入つて形の如く検査を受けた、脈を計り、額をたさへて、一人一人綿密に検査するも、流石に釜山や仁川よりは嚴重である。九時半頃船は有名な大棧橋にかゝつたが、上陸は明日のこととして今夜は船の中、暑さに寢られぬまゝ、夜半甲板に上つて町を臨むと、何を云つても滿州の大玄關である。電燈の光点々、棧橋の上に、ズラリと併んだアーク燈の光、其光に照されてきらめく遙かの陸上まで一直線に建て列ねられた倉庫の屋根に、流石は東洋の大貿易港であるとなづかれた。東洋一の高煙突と云はるゝ大連發電所の大煙突は夜の闇を透して巨人の如く前方に聳わて居る。（未完）

（十月十一日記）

枯 草

一、二、丙 旅 の 童

○固より、野路にはなれにし枯草の、色も、香も、戀もなき身。玉の臺に勾はむともあらず、麗はしき人の花乳したふ胡蝶にはあらず。唯、寂しく、微けく、秋の虫の夢守となりて、あした悠久の天空の雲の姿を眺めては、夕は黄金色なす秋の領、夜は寂莫の天の戸に、行く川の流に、

野の花の夢の香に、清く、かすかなる、靈唱を觀じて、斯くて微笑まむかな、斯くて樂まむかな。天あり、地あり、花あり、星あり、我あり、そこに幽玄なる默示、無限の歌あるに非ずや、何をか悲み、何をか煩へむや。

○今は都を立別れ、孤影寂しく佇めば、夜の薫りの高うして、天地靜かに夢に入る。流れくる、幻の如く、密の如く、雲間を出づる明澄の月影、秋の虫の音、清く、あはれに、自然に、宇宙に秘めし靈曲、あゝ何を語り、そも何か示せる。莊嚴なる、偉大なる万朶の花か、夢の「花帶」みだれに亂れて、神興雲の如く我を震はし、茫然沒我天を仰げば、星斗燦たり幽艶の微笑、新月細く大我をささやく。嗚呼、万有は我なり、我は万有なり。朝な、夕な、万卷の書に、深き思の跡、涙の光、憧れの花を訪ねて、万有に歸る、我が靈雨たらむ、月たらむ、雲たらむ、星たらむ、花に宿るべし。行かむかな、旅の童の足たゆく。俯仰、無限の大宇宙、大自然は、否、我大故郷は、嫣然として微笑むなり。

○詩人と云ひ、宗教家と云ひ、哲學者と云ふ、其手段や異なるとも其目的に於ては一、敢て優劣を以て、律すべきに非ず。若し、夫れ大詩人、大宗宗教家が、幽玄神秘なる美感、熱烈なる憧憬、深酷なる懷疑を以て、假象の内に眞如實相を觀する、かの天才的直覺に至つては、よしや哲學者は彼が貧しく憐れなる究理的頭腦を以て空想なりと嘲ることも、俗人は其腐頭を以て狂なり烏滸なりと罵るとも、余は斷乎として、其精確なる推理以上にと絶叫せむとするものなり。あゝ、彼が複雑なる万有の實相と我との結合をば、色とし、形体とし、美として感受するや、其靈妙なる天才的頭腦は、實に幽響ある幻として、實相の暗示の興奮する所、莊重なる美感、熱烈なる憧憬、深酷なる懷疑は、電光の如く、大洋の如く、汪洋として起り、自我の琴線は高調より幽調に到達して、更に進みて、自我と万有と相融合同化して、美感はいよく神に、渴仰はいよく熱烈、こゝに不朽の大詩歌、大經典は万有の根本原理を豫言して、日月の如く、哲學が過去現在未來の汲々乎たる幾千年の慘憺たる經營の上に超然高く輝くもの、是、天才的直覺にあらずして何ぞや、確實なる特殊なる神秘的推理法にあらずして何ぞや。余をし再び斷言せしめよ、大詩歌、大經典は哲學の究極を語るものなりと。

○世に科學者哲學者程獨よがりの者はあらず、彼は究理を以て眞理に到達すべき唯一の武器なりと妄信するなり、詩人を目して妄想狂となす彼は自ら究理狂なるを知らざるなり、燕雀、鴻鵠が羽毛の己れと異なるをみて以て鳥となさざると何を撰ばむや。我が歌、虛名を竹帛に垂れむとにあらず、眞理の發見者として仰がれむとにはあらず、唯、天地と相共鳴する所、我が必然的の聲のみ、大我のささやくのみ、大詩人たらむとにはあらず、固より大哲學者と仰がれむとにはあらず。名も、徳も、實も、實も、花もなき、煙の如き故郷に歸る旅童のみ、虛名を得むため究理狂とならむに餘りに愚なるを如何せむ、唯願くは、人として生れ、人として歌ひ、人として讀み、人間として死なむのみ、然り、これのみ、豈他あらむや。

○吾人は現世を超絶せざるべからずとは、實に、是、樗牛全集の表装に不朽の光を放つ北斗星に非ずや。さなり、吾人は超世の心眼、超世の情操、超世の憧憬を以て、自然と同化し、宇宙と同

化せざるべからず。國家、社會、道德の如き偏狹なる觀念を全然超絶して、万有の一大靈として
 の人類の活動の、如何に靈妙、如何に神秘なるかを觀じ、憧れ、歌はざるべからず。これ詩人が戀
 愛を幽玄なる現象として歌ふ所以なり、これ文學の必ずしも所謂道德と一致せざる所以なり。さ
 はれ、余は淺薄なる所謂寫實主義を謳歌するものに非ず、否、寧、大に排斥せむとするものなり、
 文學者の目的は決して万有の寫實的描寫に存するに非ず、實に其活動の實相の描寫に存するに非
 ずや。あゝ、偉いなるかな、詩人の眼中、生死なく、名利なく、從容として天地諸象の内に没し、
 万象を洞察し、かくて歌ひ、かくて微笑む。



文 苑

母 子

靜 池 庵

(上)

勝は今ね流しを了つて湯に往つた。

里はね部屋に睦子を寝せて居る。多分自身も眠つてゐるらしい。

靜かな夏の夜。

さち子も今夜は餘程容體が善いと見えて、薄紫の、白で縁模様のある、幅廣のリボン、無論寝
 ながらではあるが、髪に挿したり、手に取つたり、洋燈の光に透して見たり、などして慰んでゐ
 る。

母は先刻から此の體を見て、さも嬉しさにね堪へぬごとく、

「さちさん、其のリボンがね好きなの？」

「は」病人のさち子は母を見上げて、

「ねッ母さん、ほんごに有り難うございました！」

今更のやうに軽く辭儀した。實は此のリボンを小包で送つて貰つたのは、慥か昨年の運動會前後

で、最早彼は八九ヶ月にもなるのである。

「私、これ、大變氣に入つてよ」

「左様、それはよかつた。〓も一つのは？」

「あれね、わッ母さん、木村様の奥様にあげてよ。あの頃まで、此のてのリボン、一つもあちらには來て居ませんでしたから」

「左様、左様だつたの」

母は入嬉し氣である。そして不圖何か想ひ出した様に、獨りニコニコ笑つて、

「後から又同じもの送つたから、さちさん不思議に思つたでしょうね？」

「いゝね。なぜ？」

母の笑顔に、何とはなしに自分も笑つて、

「え。わッ母さん、なぜ？」

「あれには面白い譯があつてよ……」と、母はわざと暫く言葉を切つて、

「あの山下の奥様ね、齒醫者様の……それ、此の間に見舞にた出でた……」

「は、は」と點頭く。

「あの方の横顔が、どうかして見るとさちさんそつくりだよ……」

「まア！」

「此の間見た時は、それ程とは思はなかつたが、さちさんが居ないうちは、あの方さへ見りや何

時もさちさんの事思ひ出してね。〓年輩も大抵同じ位だし〓、今頃はさちさんもあんな帯してゐるだらうの、あんな羽織を、あんなコートを……とね、奥様の身形さへ見りや直ぐさちさんの格好が目先にチラつく様でね……」

本町に買ひ物に往つた次第に、いつもさちさんと一緒に往つた平野屋ね、あの店に寄つたら、あのリボンが着いたばかりといふの。で同じもの二つ買つてね、さちさん、一つは山下の奥様に挿して貰ふ積りだつたの！」

「まア左様？」

「左様な父様に話したら、大層な笑ひなすつて、でもそれ程思つて買つて來たなら、あげたがよからうと仰しやつたけれど、さてどうもさまりが悪くて差し上げられなかつたの。で後でまたさちさんに送つてあげたのよ」

「まア左様？」さち子は感に堪へぬらしく、良暫くあつて、

「まア左様？」と三たび繰り返した。薄紫のリボン見詰めて。

「親馬鹿たよう云つたものさね」

母は笑つた。けれどさち子は眞面目に、

「まア左様？」と四たび繰り返した。

目には一杯涙を湛へて。

(下)

「では話して見ましょうか？」と、妻は予が顔を覗く。

「話し玉へ、何でも」

「でも變な事よ。——たッ母さん笑つちやいやよ」

「何、笑ふものですか。話して御覽。誰も居はしないし」

「では話しますがね。まだ兄様にも、一度も申した事は無いのですよ……」

鳥渡斷つて置く。妻には弟が四人ある。皆予を「金田の兄様」と呼ぶ。で妻の母も時には予が

事を「兄様」といふ。妻も亦。但し妻の母のは、弟などが大勢居る前での三人稱で。妻のは、

主に他人の居ぬ折の二人稱。

「兄様、あの太横丁の床屋ね」

「ん」

「私は、いつもあの床屋にばかり往つたでしよう……」 榎木町に移つてからも……」

「ん。何か、あの床屋のかみさんが、たッ母様にでも似てゐたと云ふのか」

「いゝえ」

「では？」母と予と殆んど同時に尋ねた。

「あの床屋のかみさんが煙草をのむのよ。私は、餘り人の煙草のむのを好きませんがね。あのか

みさんの煙草の呼吸が、妙にたッ母様のた煙草めしあがつて、どうかした時「さちさん！」と、

た側でた話なすつた時の、た呼吸の匂ひに違ひませんの！」

母の目からホロリ涙がこぼれた。

予は、成程母子だ！と思つた。

(終)

恐怖

秋水

夕されは露を命の虫の聲々、そよ風になびく草葉を輕く傳ひて、鳴くとも見ぬ蟬の騒しさ、天の眞名井の清水にや喉うるほして、鳴く蟋蟀のやさしさ、さては秋の七草の葉末に咲ける花々の、この里遠きみ山路の秋の夜の静けさを愛で、桔梗は強く誠しやかなの音に、萩は涼しく白銀の鈴の如くに、平花撫子、思ふかまゝの響に、ともすればさびれ勝ちなる秋の心を慰めんとて鳴き亂したるばかりに草花の色は虫の音に似通ひたる面白さ

後は峯前は谷、風吹は松の小琴雨降らは水の鼓、盡させぬ自然の心をたゞ一人の友として慰める畫師か詫ひ居に、今宵はしも壁の煤けも著く見ゆる迄に燈の明く、奇しくも見なれざる稚子の七つ許りなるか面は青う眼はどち、深き傷手の跡と見わけて白き布は手と足と軀とに巻かれつ、薄き敷布の上に横はりぬ、畫師は燈の小影に身を寄せて、憐みの腫子を離さざる間に、稚き者は氣を失へる人の元に歸る時になす如く震ひ戦きけり

やゝありて太く開きし眼にあたりを見廻し、初めて身の痛みを覺えたらん如くに叫びて又眼を閉ぢぬ

「痛むか、ことはりなり、この小さき身には、痛むか、あゝ、いとしの者よ」

繪師は命毛長き畫筆に谷の清水をふくませて稚き者の口にそくきぬ、彼は幾度となく舌に音させ、やめて又眼を開きぬ

「痛むか、眠れ静かに、ゆめな恐れを、痛むとや、今しはしなり、やかて癒ゆべし」

かくて一夜經ち二日過ぎ、痛みは常に衰へ行けるも、尙ほ時に眼を塞き手を握り、まゝならぬ腕をさへ曲けて震ひ戦く事日に十度に餘りて、血の色はや、浮ひ來たるも、この度毎に元の青さに歸り、額の皺は斜めに、紫の唇を白雪なす齒に噛みしめたる面差の凄しさ、若し其閉ぢし眼に、怒の光を輝かさば、夜を人知らず鐵輪に忍ぶ怨女の様にも似る事かな

日々並へて五日目の夕なりき、痛みなほざりに氣もすがくしくなりてか、こは何處にやとばかり言問ひぬ

「こは翡翠山の奥なり、五日前の事なり、我この奥の芙蓉か池に綸たれし折りしも、雲翔ける斷崖の上より、黒き物の池の面にひゞきして、波高う岸を打つと共に人の子の浮き上れば、揚げてこゝに連れ來つる迄なり、如何に誤ちてかくはなりしぞ、垂乳根も心をや碎かん、里はそも何處ぞや」

繪師の語る間に、彼は又もや目を閉ぢ、白き齒は唇を噛み、眉を打ち寄せ、息もあらゝかに、

身は風に鳴る盧の葉にも似て輕ふ震ひぬ

二、

「そか名は、茂」

尙ほ白き布の巻かれて残る腕ながら、早や何物かに觸れでは止まざる稚心のいぢらしう、繪師か筆筒の太き細き筆ども取り出しつゝ、今し畫絹の上は低ふ白萩のしなやかに咲き出てゝ、尾花のみ高う傲りて思ひのまゝに亂れ合へる時、ふと問ひかけて顔上げたる繪師に斯く答へき

「あゝ美はし、畫は何よりも數奇」

畫師はほく笑みて

「さば、畫の稽古は？」

「それも數奇、た弟子とて教へ給はずや」

畫師は再びほく笑みぬ

月去り年は暮るゝも彼はこの深山を出でて古郷を慕ふ心もあらず、たゞ朝夕は畫師か筆の走るを見て喜び、さらぬだに言葉少き畫師か特に試筆に心をなやます折は、終日言を交へざる事あるも、尙淋しさに遠き故郷の同胞を慕ひ詫ぶなるにもあらず、畫筆の妙に走るを見ては一しほ興を増しつゝ、常にすか／＼しき振りの多かりき

年は幾度も暮れて師の畫師は身まかりぬ、今は思ふかまゝに筆は絹を滑り、刷毛は丈余の紙を走るも絶えて勞かるゝ事なき迄に進みぬ、人跡たなし庵の朝夕は峯行く雲の態も奇しく、眞木の

葉に立ちのほる霧の静けく、時には山の尾をめぐる鶴の上に浮きたる頂のけたかく神々しきに、さては神のこの類なき詫ひ居に誠を籠めたる修行を愛て玉ひてか、心ある者のみにそのみ心を證れよかしの黙市はつきせすとも、慣れてはやかて等閑になり果つる習ひなれば、折り折りは彼方の峯にも彷徨ひ、此方の谷にもうづくまり、面のあたり幽邃なる景物に觸れて、その裏面に密む靈に會ひ親しくその響を聞かすは止まざりき

時しも頃は長月の未なりしか、四方の梢に織り出す紅葉は、谷間に深き朝霧の中に、さも天女かさぐめき會ひし饗宴の席をしつらひし錦の幕を、あまりの樂しさに忘れて空に昇りたるが如く、晴れ行く霧のまにまに映れ出つる鮮やかさ氣高き、渡らは錦中や絶ねんと恐るゝ大宮人の心もいちらしき事ながら、畫師は幾度となく錦の浮橋に裳を濡らし、幾度となく鏡なす水の底に心を澄ます瑠璃の玉を驚かし、雲幾重霧幾重、騷擾たる人寰を遮りて閉ぢたる城門の如くにくゞりて、やかては自然の幽境をしらす神が宮殿の階にも脆き得心して、今日も又山深く分け入りぬ

高く峯を望みて耽る彼か思はいやましに高き秋の空に昇りて果つる期もなく、低く谷を見下してたどる心は一入深く沈みて底に伏す靄の中へと隠れ、行く水や吹く風や、思は思を生み、心は心を勵まし、雲深き里に雲の如き思をたどれば、身は遂に我にもあらずたゞ虚空をたゞよひて風のままに野を翔り谷を辿る面白さ、瞬く隙に見ゆる物の様形の移り行きて珍しく、常に顯はれ来る色彩の巧みなるを畫とすれば誰か手に成りしを語り得る人はあらし、太く粗き點は荒岩をなし、

細くやさしき線はたのづと谷川の流をなす、人は自然を畫かんとするか果た自然はすでに人を畫き盡くせるか、我が畫くか我が畫かれたるか、天地混沌とし我なくた、美はしき活畫の音なく而も何物をか語るあるのみ

畫中の彼はふと芙蓉の池に水鏡を映して立ちしが、そと渡る風に亂たるゝ小波に憂き心を碎き初めしか、見あくるや千尋の崖の上に、鷺の嘴の如く突き出たたる黒き岩、かすみて細やかに見えずとも——彼は汀の草に斃れぬ、色は青く額は皺を斜めに、紫なす唇を白き齒に噛みて目は閉ぢ、息は荒らかに身は風に鳴る蘆の葉の如く震ひぬ

三

豊坂昇る朝日子の影に玉なす白露を美はしき色の源として吸ひ、そよ吹く朝風に小さき夢の跡を拭ひて、明け行く空に望の色の鮮やかに、紅や淺黄や、色も様々に草花は笑み興し、櫛より桐に桐より楡に轉りながら曉の色を愛てゝ小鳥は騒さかへるを、世は様々の浮世なればか、まはゆき光を避けて夕顔は薄闇の領する死の國にも似たる黒き水のほとりに笑み、鴟は闇浮の帳に幾重もつゝまれたる葉蔭繁けき森を隠家に、廣き下界の災や苦を鳴く聲々に吐き出たせるにも似たる様かな

戦へは勝ち攻むれば取り企つれば圖り行へは終り圓かに、今望みしものはやかて手に入り、行かんぞすれは足いつしか其處を踏むべく、月も圓かの國の光を、身一つに治め給ふ宰相の響を人皆は朝に末永かれと祈り夕へに厚きそのみ徳をたゞゆるを、しかすがに尙世を憂き者に思ひて政治

の非を怒り宰相の足らざるを罵り、一切のときめく者を嘲り合ひてたゞかりそめに心を慰むる人の遂に絶へはつべき世には非らず、彼等はたゞ頭腦に事理を研め口に泡を飛ばして直否を辨し、或は胸に燃ゆる光なき情火に身をやきて狂ひ興する人に過ぎしとは、少くとも、手に物を運び足に固き地を踏む人の彼等をどこしえに評し去る語なるべし

都城の北隅に縁滴る常盤木の茂みか中に聳へたる薨の下に今日しも集ひよるかゝる黨類の一千余人、狭からぬ會堂もさすかに満ちて今は一人たに入り得ず、湧き返へる人聲に驚きてか、静けきこの窓ぎわに遊ふ習の小鳥も寄り來ず、白雪によし枝は折るゝとも色は變へしと誓ふ松か枝、凋落の秋を霜に傲る黄菊の裝飾や、汚れぬ色を誇る演壇の白布もさる事ながら、名にし負ふ正面に高さ殉教者の額は、今一しほの靈氣を帯びて見る人の心底に義氣をそそぎ、懦夫も刹那は身を捧けてたゞ高さ心靈の呼ふかまゝに水火もくゞらんを願ふばかりなり、實にやこの畫はこの黨類を結ぶ唯一の力にして、この靈畫の永久に傳はる間は如何に世の一切より嫌はるゝともこの黨類の盡くる期なかるべしとは、一度この前に立つ者の等しく囁やきて去る語なりき、こは今しも彼か彷徨する藝術の天地を廣く聽衆に語らんとして騒かしき聲の内に登壇せる老畫家の作なり

論議半にして喧騒は起りぬ、豫てより期して忍び込みたる反對者流は一時に立ち上りぬ、鐵拳や、泥塊や、木片や、瓦石や、卓子は椅子をまたいて倒れ硝子の窓は蜘蛛手の如くにひびりて破れ、人斃れ家震ひ白刃は遂にこゝかしこに閃めき初めぬ、ひらりと一人壇を越ぬ、這ふか如くに丈余の白壁に攀つると見る間に、額は聲高に床に落ち幾人どなく踏みにぢり最後の者は窓より投げぬ

げぬ

半生の榮譽を外にして成せば彼か靈ども恃む畫の後を尋ねて畫師は會堂の側に立つ時、こゝにも人の多く集ひて切り裂きつゝ細かき片屑を風に亂たして立ち去る人々の姿は彼方へ消えて、たゞ一人微服に人知れず宰相はいたましげにこの側に寄りぬ、荒獅子はそれたる丸か射たる巖をたけり狂ひて噛み付ける如く、畫師はあらゆる片屑を懷いて紫の唇をかみ息あらゝかに倒れんとして、ふと目を宰相の顔に注ぎ、うつゝ氣もなく満身の憤怒をこめて先づ宰相の面に唾しぬ、宰相はたゞほく笑みて畫師の手を取りさ

四

緑か岡に營まれたる宰相か館、左は山右は水、眼の下は黄金波打つ大野の夕暮、森に木の實を落し野に馬の鬣を吹きし風は、瓢乎としてこの榮華の窓へと吹きぬ、銀燭あでやかに装られて廣間は世を變へたる許りに榮え渡り、位高き際の人のみ語り合へる折りしも宰相は見る目いぶせき客人を導き一切の權門を越えて首席に伴へり

世に類なき友を得たる嬉しさにと云へる今宵の饗宴のこの様に、人は悉く目をそば立つる折りしも、宰相は徐ろに歡ひを述べて語り出てぬ

「人はたゞ影なり、今日榮えて明日は萎え今ありてやかて無き電、雪佛は朝に朔風に誇るも夕照に其姿をとめす、遊絲は緑の天空を翔ると見る間もあらず、さも神の怒に觸れたる魔性の如く羽をすぼめて塵埃の奈落に沈み行く幻の命なり、この束の間の命に我等の叫ぶなる名とや何、

榮華とや果た何、うたがたの空に亂れて暫やぞす光か、銃彈のこゝにありとばかりに響を揚ぐる時遅く早や彼方の雲に消ゆる習、思へはつれなき我が世にもあるかな、されど藝術はこしへなり、世に人のつきさる限り彼か胸底の力となり慰藉となり、勞かれたるを勵まし敗れたるを痛はる、若し世に神ありとすれば藝術は實にその面影なるべく、若し世はたゞ一つの眞理の下に動くとせば藝術はこの見わたる眞理のしはし現はれたるなるべし、藝術の士はこの面影を感ずる人なり、人の力の及ばざる靈に觸るゝ人なり、百万の知者に鳩首するも彼等はただ蟻虻の騷きなるのみ、藝術の士は一人よく彼等一切の迷ふ所の眞理を得て筆に托せ鑿に寄す、我は今この一人を得たり、世亂れて千里の駿足を生すとら、あゝ我は今この畫家を得て治まる御代を祝く」と

人はあきるゝのみ

彼は尙語をつぎて幾度となく彼の傑作の空しく失はれたるを惜みて永くこの國か譽を後の世に傳へ得ざりしを恨みつゝ、尙彼か力の能ふ限りを盡してこの一代の畫家を保護し、再ひ彼か製作を不朽にして永く人の世に光を垂れん事を述べつ、光まばゆき鸚鵡の杯に紫匂ふ葡萄の酒を捧げぬ、畫師は徐ろに受けて目は歡ひにかゝきぬ、感にせまりたる彼か唇はたゞ切れゝにこの好意を謝し、雅量なる聖代の宰相か像に先つ筆を揮はんと誓へり

身一つに世の盛衰を集めたる俗界の偉人は、よし彼か口に説く如き意味にてしかく藝術を敬愛せずとも、區々たる筆と鑿との如何に人心の機微を衝き如何に胸奥の弦線を振はしむるかを知れ

は、卓越せる畫を尊崇するは經世の材に秀てたる士をなすよりは優るとも、そは彼か藝術の崇高を身自ら解するよりしてに非らず、たゞそれか世道に及ぼす功果の大なるを證りて、寧ろ如何にしてこれを經世の道に用ふべきかに心碎きつゝ、不朽の作者に對しては愈々これに思を惱せり、一朝の機會はゆくりなくも絶世の畫家か心を擒にし、畫師は寬量なる而も鑑賞の明ある宰相か心底に服して、よし尙凜たる意志と勃々たる靈氣とは身に溢るゝとも、あはやわき目に彼は宰相か藥籠の物となり終りぬ

五、

閑邸の奥深く幽邃なる室に籠りて畫師はひたすらに彼か友——よし身は俗界に俗利を追ふ人とは云へ、尙その奥には表に狂ふあら波のあらきには似もやらず、うろくづの夢を圓かに綠なす藻屑の動くともなく流るゝ水底に宿る眞珠の如き靈をやとす友——が姿に、已か筆の及ひ能ふ限り、その寬容なる白髪のお老貌を壯嚴に而も優美に、寧ろ英雄その物の標式として、其の彩色の消え失せざる間は、どこしへに偉人か經世の材幹と心意の幽遠とを仰かしめん誓ひより、朝は彩雲のみ池に影やとすより、暮は蕭殺たる秋風の小鳥を驚かす迄、色彩に思を惱まし筆意に膽を碎き、神興到れば絹に向ひ、去れば又悄然として已に歸り、かくして日を送り月を越えてその秋も愈老ひ行けば、時雨は落葉にさゝやき嵐は月にむせびて、天も地も今は飾なき眞相を顯はし、狂ふ者は我に歸へり迷ふ者は心に悟り行くものは足止め停む者は後へを顧み、老も若きも人はたゞ回想の境に入り、樂しと過去を慕ひ悲しと來し方を恨み、諸共に心亂るゝ秋の夜や

夕雲はあらゆる天地の美はしき物を身一つに奪ひ去り、小賢かしく囁り合へる群鳥の影も消れて、たゞ生きのこる虫の息たえ／＼にむせふ力なさを、いまは人の眼底より物の影のやう／＼薄れ行く淋しさにも似たる事かな、燈の影に畫師は日毎に成り行ける像を眺めて、半はその末を思ひわつらひ、半は成り上れる節に慰められつゝ、心を走らせしか、思のしづまるにつれてふと彼は心なく入れし像の瞳子よりあやしき光に射られぬ、彼は不快となりぬ、彼は恐怖を懷きつ次いで怨恨を起せしか、そは遂に幼き昔を更にひいて芙蓉か池の斷崖を思ひ出て身は戦きぬ

この靈筆に己か威を末永く殘し得るを喜ひつゝ、宰相はその像の成り行きを心にかけて、前より所勞にて伏し玉へるにも關らず、幼き姫君を伴ひてこの畫室を音つれ玉ふ折りしも、伏し目に沈みたる畫師の姿を、ふとわけたる瞳子のあやしき輝きとに宰相は——病に氣のたかぶればか——奇しき思ひに襲はれ玉ひき、されどそはたゞ暫の閃のみ、畫師は尊むべき友をしとやかに迎へ、宰相はその像のけだかき筆意をほめ玉へば、畫師はたゞ己が力の及ばざるを愧づるのみなり、宰相は姫君の頭を撫で玉ひて

「この父はやがてなくなる父君、その父君は何時迄も姫が父君にてましますよ」

姫はあやしげにこの畫を見つめ玉ひしか、何思ひ玉ひけん、恐ろしと許り泣き戦き給ひて、父君の袖にすがり給へり

畫師は再び像のまなさに射られつ

「邪心の我が胸にやせるか、我が筆は我が真心を寫し得ぬ迄に鈍れるか、再び試めさしめ玉へや、

心寛き君よ！」

刹那に鋭き刀物は六尺の像を二つに

六、

宰相のいたづきはこの日頃どみに草まりぬ、熱に冒されては苦み、苦み勞かれては眠り、心少しだにすが／＼しければあらゆる來し方を思ひ浮べて今更に世を夢とや觀じ玉ふらん、老も若さも賢さも愚かなるも、たゞ來し方の善行をのみ思ひ浮べて臨終の床に人知れず微笑む人は稀なるべし、見る影恐ろしき死が暗黒の翼を張りて臚ろに霞み行く目の前に顯はるゝ折の心は、たゞ罪の思出のみなり、そは愛憎の輔にやきて不義驕漫の鉄床の上に鍛ひ上げたる罪の鎖の如く重き心にからみ、細き蔓にたゞれたる色して朽ちし葡萄の鈴の様して重く下る如くに萎わたる胸につらく懸れり、人心の根底は恐怖苦痛の深淵にして活るゝ期なく、ほゞ笑や戯や得意や喜びや、そはこの深淵の水の僅かに出口を求めて淺き瀧津瀬を騒かしう走るに過ぎず、逃れ行く水の后より九俣の底深く混沌たる黒闇の中より絶えず新しき冷水は迸りて、身を凍寒の地獄に葬らすんば止まじ、樂しと世を觀する者は逃るゝ水の多くして響のやゝ高さに迷ひ喜び、悲しと世を見る者は行く水の少くして常に湛然たる暗緑の深淵に望みて靜思すればなるを、暗憺たる死は程近く寄せて憂き思の出口と恃む色も響も心も、漸く消初めてたゞ黒闇の深淵の底深く奇しく臚ろに見得らるゝ海龍の暴れ狂ふを見は、心はたゞ後目痛き罪に驚き身は無量の恐怖に震はすてやは

過去一切の罪は鯨聲をなしていまはの宰相か心に寄せ來りぬ、強剛を誇りし意志、健闘を喜び

し意氣、あゝ今何等の力ぞや、宰相は刻一刻にいたく戦きぬ

畫師は宰相の死をひかへて心はいらつとも思ふまゝに畫もならねは、伏したる宰相か側に待し
て細やかに眺めしか、宰相か恐怖の情の面に顯はるゝにつれて彼は不可思議なる感に壓せられつ、
彼はその心を説き得ず、彼は不快と云はんより恐怖と云はんより寧ろ憎惡の念に近き者なりき

閉ちし目を開きて宰相は畫師の面に注きしか、再び閉ちて宰相は更に一度激しく震ひぬ、忽焉
として宰相が心は木々の梢に錦織りなす崖頭の景色となりぬ、幻か思ひ出か、二人の稚子——
人は七つ他は九つ——まぎろうべくもなく若きは從弟の茂他は正しく已、幼く叔母の手にかゝり
てしひたけられたる恨みと、叔母の一人の子の茂がいつくしまるゝ妬みと、彼か境遇の多幸なる
と、若し彼だに無くは彼か境遇はやかて己か物となる望みと、今しも年少の身に我を張り通して
己か意のまゝとならさりし怒りとに燃えて、斷崖の上に立つ彼を杖にて打ちぬ、打たれて彼は血
を流しぬ、かたくなる叔母の如何に己をさいなむか、血を見て驚きし已は恐怖に滿ちて遂に
彼を斷崖の外に推さんと計りぬ、無邪氣なる稚子ながら彼は思ひ出つるも恐ろく己を睨みて落ち
じと力の限り争ひぬ、恐怖の瞳子に怨恨の瞳子とは手と足との争よりも激しく、其は鈍き鑿以て
深くどこしに癒ゆべからざる迄に腦裡を彫り窪はめぬ、茂か誤りて落しどの己か語を信して叔
母の泣ける時は再びその痛手を深からしめぬ、繁榮の極みとは云へ雪の朝雨の夜心しづけき折
は、この深き痛手は心を惱まして人知れずこの盡くるなき恐怖の深淵に望めりし
恐怖の頂天に達したる宰相か表現を銳眼の畫師のいかて何物をも感せざるべき、怨恨の瞳子は

闇浮に燃ゆる業火の光を帯へり

ふと眼を開きて恐ろしき怨恨の瞳子に射られたる宰相は、暴風にゆられたる巨艦の終に最後の
暗礁に觸れたる如く戦きて九泉の下へと沈み行けり

畫師は卽座に筆を操つて怨恨の瞳に影する無限の恐怖を寫し得て神に入れり、像はたゞこの宰
相の面影のみにあらず、あらゆる一切俗世の姦雄が標式として永久に見る者を戦かしめ、今尙暗
中に光りなき色をたゞよはす

草花

其月

秋のはじめに妻にわかれて

草花を愛下しいとしの妻ゆきて思出たほし秋の野に山

花ならば桔梗わが妻秋風にもろく凋びぬ桔梗わが妻

若き母看護の母の手をとりて許しませ母子は可愛ゆきを

かあちやまと片言交り幼な兒が位牌指さしかあちやまわつこ

在郷中中島一郎君卒業の報に接して

雲に入る告天子の聲を樂しげに草に臥し居て聞く牡牛哉

詞友のわが亡き妻に寄せられたるいづれも
あはれ深ければ餘白をかりて其月生しるす

現世に花を愛でにし君なれば蓮の臺の香にねむるらむ

人真似に香を手むくる幼児の心やたなじ佛なるらむ

いとしく愛でたまひにし菊の花み慕近くば手向てましを

ねん墓を心都にまもりぬと涙す蟲の雲の十五夜

霜枯をうしと常世の花に入り鈴のひびきに歌ふみ靈か

奥津城は秋の七草花輪して待てば萎めば哀に思ほせ

新塚に今年の月の訪ひそめて眉ひそめたる時雨空かな

ささやかに手向もねせず人はたゞ遠方にし泣かばつくる恨か

主の國に靈がへりして常春の御園に君は星と生れぬ

英盛

律子

秋水

秋羽

陸軍騎兵中尉山岸君碑銘

村上 函峯

昔者屋島役。佐藤嗣信。以身蔽義經。中箭而死。今也旅順役。見之於中尉山岸君一矣。明治三十七年七月。君從征俄軍。航柳樹屯。向旅順。九月十日。從大島中將。至某地。觀戰。會煙霧冥濛。彈

丸雨下。君謂中將曰。將軍重任。不可冒險。請暫避之。某當獨留。乃執雙眼鏡。視敵狀。忽炮

彈洞頭而斃。時年二十六。中將親視其屍。慟哭久之。一軍莫不感泣。君所手雙眼鏡。遂經

天覽。藏于振天府云。嗚呼君死不唯比美嗣信。至其忠勇上達。天聽。其榮譽為何如哉。君

通稱一雄。氏山岸。加州金澤人。父名尊具。母山岸氏。三十一年。應試為士官候補生。屬第三聯隊。

三十二年入陸軍士官學校。卒業。為見習士官。尋任少尉。叙正八位。中罷復起。為少尉。此役以

功進中尉。叙功五級。授金鷄勳章。叙勳六等。授旭日單光章。君容貌俊爽。精悍之氣。溢于眉宇。

暇輒讀書。欲入陸軍大學。不果。未娶。十一月二十四日。禮葬遺骨于大乗寺先塋之次。頃者介

人。請文於余。乃記其梗概。且係以銘曰。

昔有嗣信。今有一雄。其忠其勇。殆將無同。

彈丸雨下。將軍方危。君進當敵。死固所期。

肉飛骨摧。千秋流馨。欲知厥烈。請徵此銘。

短歌

四高和歌會詠草

身に着れば我にふさはし秋風のぬがんにをしき薄色衣よ

落日や紫雲うする、靈場の空山さびて秋風ぞ吹く

秋羽

美鳥

此の夕待つらむ親を思ひいでて流離の國に旅の子泣きぬ
 古里の我が家と君か夏の家と街の並家二町ばかりに
 誰の君の愛を秘めぬる名残とや勿來の關蹟白百合の咲く
 破れ傘に白菊黃菊蔽ふにも似たり我が世の白蓮の君
 足柄やさねゆく笙に宮出でく嫦娥は近う松に忍へる

旅 (別)

垂乳根は門よりな出そ振り返りたもわし見てば心たくれん
 嗟峨野路は昔忍ふの我がゆくてなりと思ふに笠持つ日かな
 君と二人槐の下に語らひて泣きて別れし夜半もありけり
 旅の夜は衾に通ふ秋風に友と別れしわびしき思
 うしや獨りラノスに迷ふ旅の子か星なき宵に見し三日月か
 小波は泣けと流人を浪速より罪か追手は鬼界か島へ

山

古里のそれにも似たり旅衣きなれぬ國の山と云ふ山
 故郷やさびれ行くなる秋の日の山に都の雲をくらんか
 月は細う葉山の森の初宵や海のあなたを人思ふかな
 秋なれば峰にかへれる夕雲の色なつかしや友なき吾に

山寺の庭の澁柿赤らめと鴉も飛ばす夕日淋しき
 名匠の虎は抜け出てく靈山の月に嘯ふく山たろしかな

紙

書き出せば歌も反故とぞなりぬべき眞白き紙よ切なる思ひ
 わか歌の日記の一葉白かるは涙の日なり君にはぐれし
 清ければそめんにをしき白紙や書に秀才なき耻らひのわれ
 若姫か置き忘れたる色紙かややさし水莖月夜朧ろに
 亡きみ名をとむればかこと紙なからみ靈とばかり齋きつる哉

○

ピンポンの音にまじりて稚な子の笑ひ聲すも庭の木の間の
 あゝさびし夜半に奏つる蟋蟀の聲は一步を夜見に導く
 月の宮ゆ海なる姫にさくぐびよう花輪して浮く珊瑚の島や
 行く所瀧は白妙行く限り紅葉は錦奇しき中山
 灯をかきて獨よみたる古ぶみにまた泣かされしうらぶれの夜や
 いとはまじ身は沈むとも月の夜を湖心に浮きて沈し聞き得ば

み 冬 り

剛

晃 東

天 南

秋 水

其 月

水 衣(贈)

晃 東

秋 羽

天 南

秋 水

其 月

水 衣(贈)

天 南

秋 羽

晃 東

秋 水

其 月

水 衣(贈)

秋 羽

晃 東

秋 水

其 月

水 衣(贈)

天 南

晃 東

秋 羽

秋 水

俳句

紫

影

癩癩の石に擲つ柿澁し
 柿の實の累々赤き戸口かな
 柿に來る鳥影うつる障子哉
 月天心砧の音の冴ぬさる
 沙魚を釣る川の濁りや蘆の花
 花火やんで更行く空や天の川
 朝寒や萩の小川に嗽ぐ
 芒招き紫菀領き秋高し
 草花や水湧出る雨後の庭
 物言はぬ異人に逢ひぬ藥掘
 藥掘猿酒を得て戻りけり
 沙魚釣の籠覗き去る松露かき
 蘆の湯に乏しき客や雁の聲
 雁高し山に北派の筆意あり

初雁や絃歌の中によそ心
 露の世を三人懺悔法師かな
 思ひかけぬ人衣をぬぎし角力哉
 低く飛ぶ雁の腹見る湖上かな
 行際露うち拂ふ矢東かな
 角力取並ぶ土俵の夕日かな
 腹黒き角力を悪む張手かな
 風邪聲に雁渡るよと妻のいふ

露草集

白水

頬白や末枯したる桑島
 末枯の櫻ヶ岡や夕日射す
 桐の實のカラ／＼なりて朝寒し
 我父の舞納めなり菊の宴
 藁しいて子供角力とる寺の庭

小雀の龍宮に入る月夜かな
 南天の實赤うして丁南居
 はきだめの西瓜のへたや秋の霜
 宵寒や新酒樽の人力車宿
 夕暮や人なつかしむ奈良の鹿
 櫛の實の掃き集めたる夕かな
 曼珠沙華荷馬車の道の砂埃
 夕月の花野に虫をさく夜かな
 負佛花野の石に下ろしけり
 初潮や葦の花ちる月あかり
 葦の花汀に高し宵の月

虫籠

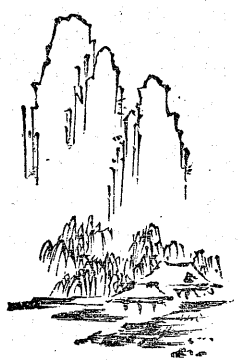
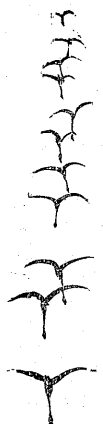
死に残る金魚の数や秋の水
 蓼の花に石切る人や橋普請
 一つ死んで残る鈴虫放ち息

雨の日を鈴虫鳴くよ甕の中
 花蓼や蚯蚓の糞のところ／＼
 簷淺く切籠に虫の來鳴き息
 柿の皮長くむく可く競ひけり
 鈴虫や祇王が墓に月もなし
 鈴虫の籠に水ふく夕かな
 枕頭の熟柿に母の情かな
 花蓼や納骨堂の晝の雨
 鍋を洗ひ櫻を洗うや秋の水
 鈴虫のつまも籠れり籠の中
 吟行の我に佳句なし柿の秋
 燈籠や何も知らざる二人の子
 酒れ沼や田螺も居らず蓼の花

四高俳句會席上即吟

日に映る露や芙蓉の紅の上
 紅芙蓉

門を出て	山眺めけり	秋のくれ	紅芙蓉
秋の暮	親の無き子を	慈しむ	同上
星月夜	船天草の灘をゆく	秋雨	同上
王城の	松黒々と星月夜	同上	同上
新發意と	寺の留守もる	宵の秋	同上
散り續く	槐の花や	星月夜	白水
葉がくれに	蜜柑をつく	眼白哉	同上
圓窓の	灯漏れて	白芙蓉	同上
隣から	飯をかりけり	秋の暮	紫影
煙草やめて	口淋しさよ	秋の暮	同上
鳩吹の	森のはづれや	漆搔	同上
星月夜	鎌倉山の	軍議かな	同上



雜報

卒業證書授與式

七月四日午前九時第十八回（大學豫科第十二

回）卒業證書授與式は至誠堂裡に舉行され歡喜極まれる盛儀は文武朝野の貴賓が臨席の前に怡然として而も嚴肅の間に終りぬ

文部大臣の寄せたる祝詞は先づ朗讀されたり曰く
今や戦後國運大に振ひ國家將來人材を要する益々急なるの時に方り諸子多年修業の功を積み茲に成規の課程を卒へ更に進んで大學に入り最高専門の學藝を究めんとするは本大臣の深く喜ぶ所なり

惟ふに諸子の前途は多望なると共に諸子が國家に貢ふ所の任太く重く學海の前途尙遠く加ふるに自今他の師導に依頼するの時代は去りて深く自から省み自から修むるの境界に入らむとす他日の成否は懸て諸子自己の覺悟如何に在り諸子宜しく從來修養したる智徳を根底とし堅實不撓進て益々研鑽を加へ毅然として常に學界の儀表と爲り以て各々其志す所を遂げ他日學徳兩つながら全きを致し國家に貢獻せんことを期すへし

一言を贈り祝詞に代ふ

明治三十九年七月四日

文部大臣 牧野伸顯

吉村校長立つて告辭を讀まると曰はく

卒業生諸子 本校は本日茲に諸子の爲めに卒業證書授與の式典を擧げ、以て諸氏が正に本校所定の課程を修了し、我校友業生に要する所の資格を具備するとを證明す、是れ實に諸子の榮譽にして、亦予が大に祝する所なり、而して諸子は此榮譽を擔へると同時に、亦其責任の大なることを忘べからず

抑我が國日露大戰の結果により、皇威遠邇に輝き、歐米各國の尊信を増し、竟に東亞の局面を一變するに至れり、蓋し史乘の記する所我國運の隆なると未だ之れに加ふるものなげん然れども熱く國家の情勢を觀るに、社會文明の度尙ほ未だ幼稚たるを免れず、百般の事業作新すべきもの多く、況んや滿韓の經營、清國の誘掖旦夕の能く辦する所にあらず、乃ち我が國民の責務、之れを交戦の前は比すれば何ぞ倍蓰するのみならんや、苟も誠實有爲の士、出て内外の衝に當り、深く富強の道を講じ愈々國勢の發展を圖るにあらずんば、戰勝の榮譽或は永遠に保持するを能はざらむ、されば國家の諸子に期待する所甚だ大なるものあり

諸子は本校に入學以來、多年刻苦の功を積み、茲に其業を卒へ、是れより進んで大學に入らむとす、其前途遠達に屬すも雖、夙夜匪懈敢て懈るとなく、各其志す所の學術技藝を研鑽

せば、必ず克く其目的を達せん、切に望むなくば、諸子常に今日の光榮を顧み、他日の大成を期せよ、

予は今諸子が本校を去るに臨みて、特に一言す可きもあり、凡そ人の身を立て世に處するに於て、須臾を忘るべからざるものは、人格品性の修養是れ也、蓋し人格品性は百事成功の基にして學術才能は之れが補助たるに過ぎず、苟も人格修養に於て誹議すべきあらん乎、縱令其學術才能の稱すべきものありと雖も決して世に立ち、所志を達すること能はず、此れ予が恒言にして、諸子に告ぐると亦一再に止まらず、然も近時學生生徒の状態を見るに、或は本末顛倒首尾舛錯し、往々人格品性の尊重すべきを解せざるもの無きにあらず、茲に重て諸子か注意を促す所以なり、思ふに世路の擧ち難きは之れを山嶽に比す、學術の窮め難きは之れを海洋に譬ふ、百里の行程或は其半に僵れ、九仞の功或は一簣に失はん、諸子幸に深く此に鑑み、益々其志を高くし、其業を勵み、日夕盈進して止むとなくんば、庶幾くは德器成就、必ず國家の期待に答ふるを得ん、諸子旃れを勉めよ、

明治三十九年七月四日

第四高等學校長 吉村寅太郎

次て卒業生總代の答辭に曰く

本日を下し我校は生等の爲めに卒業證書授與の式典を擧げられ、朝野貴賓の眞臨を辱うし、特に牧野文相の祝詞を賜はる、生等感激の到りに堪へず、回顧すれば生等本校に入りしより

歳を關する事既に三度、頑愚の資質を以てして尙今日の榮を貢ふもの、偏に校長閣下の嚴肅なる督勵と、諸先生の懇篤なる教導との結果に依るのみ、生等何等の辭を以てかこれに謝すべき、今や我國大勝の後を受け、戦後經營の重任は強く生等を壓せんさす、而も身は非才果して、これに堪へ得るや否や、加ふるに社會の風潮は日に輕佻浮薄に傾き、誘惑の牙を青年學生の上に加ふるや切なり、あゝ才短にして任は徒に重し、思てこゝに至れば轉た懼然たらざるを得ず、然れども小虫尙半身の魂あるあり、生等と雖も亦窃に自ら信する處なくんばあらず、爾今恩師の訓戒を指南とし、進んで至高の學府に入り、知徳の修養につこめ以て他日國家の爲めに應分の貢獻を爲すを得ば、聊以て今日の光榮に答へ、恩師か鴻恩の万一に酬むるに庶幾からんか、謹て答辭を述ぶ、

第四高等學校第十八回卒業生總代

明治三十九年七月四日 一部英法科 大橋 八郎

かくて目出度く式を終り前途多望なる百余の秀

才は洋々乎として最高の學府に登り行きぬ、(秋水)

北辰會役員氏名

會長 吉村寅太郎

副會長

今井省三

劍道部委員長

上原菊之助

理事

本間好茂

委員眞館保

關谷吾一。田島亘。原康次郎。

講話部委員長

西田幾多郎

柔道部委員長

田部隆次

委員英秀瑤。松村義郎。小室文次郎。關谷

吾一。京極 逸三。

野球部委員長

委員正力松太郎。小泉禎次郎。久田丈二。

演説討論部委員長

永井靜雄

委員鈴木寛一。町田三郎。

委員河合良成。正力松太郎。新井堯爾。

庭球部委員長

市村 塘

語學部委員長

茨木清次郎

委員山下潤藏。色部貢。江守彌次郎。

委員和安藤圓秀。和色部貢。漢堀田時次郎。

フットボール委員長

委員小川重雄。久保田 圭

漢北澤哲。英平松憲夫。英牧野純一。英密

委員山下潤藏

色部貢。江守彌次郎。

田良太郎。英岡田國衛。獨香川健爾。獨竹

遠足部委員長

林 並 木

内松次郎。獨秋田政一。獨原康次郎。

漕艇部委員長

田 中 鉄 吉

雜誌部委員長

浦井鎧一郎

委員安藤榮吉

長田勝芳。宮田格。大内靜

委員河合良成。小笠原秀實。青木精一。塚

委員安藤榮吉

長田勝芳。宮田格。大内靜

本良禎。江南文三。

各組代議員

弓術部委員長

中野 嘉 作

英三、河合 良成。

獨三、三邊 長治。

委員谷中峻太郎。飯盛里安。泰資彰。

文三、牧野 純一。

工三、密田良太郎。

- 理農三、飯盛 里安。 一ノ二甲、加納憲治。
- 一ノ二乙、楠木福松。 獨二、 藤井林治。
- 二ノ二甲、上坂 巖。 二ノ二乙、池原英治。
- 三ノ二、小林鉄太郎。 一ノ一甲、河尻淨環。
- 一ノ二乙、山下榮次郎。 一ノ一丙、推野 郁。
- 二ノ一甲、寺尾與三。 二ノ一乙、大塚 親。
- 三ノ一、佐竹 清。

卒業生諸君を送る

命運の欲するがまゝに會離の命するがまゝに、生等はこゝに敬愛する卒業生諸君と袂を別たさるべからざるか、一樹の影尙別となれば惜々たるを、星霜幾度か黄金なす薰陶の鞭を受け慈愛の露を蒙り、この風濤激しき現社會の一隅にからくも扁舟の身を擁して、輝く星斗の光もしるき空に漕ぎ得る今日あらしめしものを、わりなくも淋しくこの地に別るゝ事の切なさ、暗

然として魂を消する生等は、云はんとして多くを云ひ得ず、されどこはたゞ別離の至情なるのみ、諸君の去るや恨むべきにあらず、諸君の行くや稠密なる用意と遠大なる希望に満つるなり、諸君の進むや更に大なる理想と幸榮と満足との里に於て生等を再び迎へんとするが爲めのみ、諸君を祝くのみならず生等はその鴻志に感じ其好意を謝せざるべからず

思ふに物界と謂はす靈界と云はず、文化の燦然たる今日の如きは古來世界の幾度も経過せざりし所なり、然れども吾人は星斗爛々たる晏天に對する時に、雲影の何處に存し疾風の何處に隱るゝを知らずと雖、朦朧たる霞の空に比して清朗なる明月の秋は暗膽たる暴風の襲來を受くる屢なり、文明の裏面は滔々として敗徳と柔弱との暗流急にして濤聲の時に表面に顯はるゝや生等をしてたゞ眉と擡ましむるあるあり、暗流は

遠き眼界の彼方を走るにわらずして生等か足下

べし

咫尺に濁波を揚くれは、常に固き學園の地盤に立つとも、ともすれば意馬心猿の荒るゝかまゝ、に美はしき園地をすてゝ溷濁の中に溺れんとすされど既に幾星霜を峻嚴なる校風の下に絶えず修養を重さねたる諸君は、恐るべき暗流を叱咤し確立せる心靈の力にこれを追ひ、右手に斷縛

水清く山緑なる扶桑の國、時は今光まばゆき覺醒の曙、願くば諸君か満身の意氣を鼓して向上の一路をたどれ、白山の峯靜かに北海の波狂ふなる金城の下、生等はたゞ諸君か榮譽なる健闘を祈る、(秋水)

新入諸子を迎ふ

か、り、生

の利劍を揮ひ左手に眞理の寶玉を最高の學府に探る勇猛の意志なれば、生等か憂慮はたゞ一片の暗影にすぎずとも、尙住みなれし故園を去りて秋風蕭殺の旅程に上り、人事移りやすき都門に入る家兄を送る弱弟の清緒に外ならず、若し夫追ひ難き魔形の諸君か心靈を暗うする折あらは、切々たる生等か衷情を諒として降伏の劍に勝利を歌ひ、玲瓏なる靈界の至寶を求め得ば、莘々として遺訓を奉する生等を思て諸君の歡喜を語れ、生等亦諸君の爲めに踴躍措く能はざる

二百の健兒雲霧を排して來れり、吾何を以て諸子を迎へむや。吾四高や實に茅屋陋室、吾校風や實に萎微沈滯、毫も諸子を饗して以て多大の満足を與ふるに足る者あるなし。あゝ校生は冷々たること死灰の如く、師友は高く止まつて敢て關せず、箚食壺漿、誠心を吐露して諸子の來校を待つものゝ如きに至りては眞に寥々乎として曉星も管ならざるべし。然れども諸子、吾に

幸に一利劍一白馬あり、願はくは屠つて以て諸子に献ずるを得む。若夫れ諸子の胸中、吾校風に接して慨然たる者あらむか、乞ふ献ずる所の馬血を啜つて神明に誓盟する所あれ。然らば吾徐ろに諸子に語る所あらむ。

諸子、諸子は金澤の土地の何たるやを知れりや。幕初百万石の加賀藩は實に家康の戦慄する所たりしと雖も、薪上の苟安を偷んで幕府の忌諱に觸れざらむことをのみ勉めし前田家歴代の消極的方針は茲に金澤市を一個遊樂の地に化し去れり。戦鼓の響は謠曲の調と化し、劍撃の聲は三絃の音と變じ、武士道眞に地を拂ひて、魔風戀風肌寒き荒野原となり終れり。三百年の惰眠は未だ醒むべくもあらず、金澤の城下は今尙ほ依然として伏魔殿也、淫靡の地也、腐蝕の地也、百媚を吾人の前に呈して幾多血に燃ゆる青春を蕩蕩化せむとする地也、鏘然として鳴り響く秋

水をも赤銅に酸化せざれば止まざる地也、硬骨漢を軟骨化せむとする病癩病的の地也。

然らば吾校風やいかに。「麻中の蓬助けずして直し」とやら、此格言の半面は確に金澤市對吾校風の關係を描出せる者也、濁波の中に梶取る扁舟の運命あゝ亦危い哉。北辰の星光は常に吾校風の進路を照しつゝありと雖、吾行る船の棹は短く、吾操る梶の折れたるを如何にせむや。茫茫然として漂ふこと茲に數歲、校風頓に振はず、校規毫も揚らず、名は北陸の重鎮たりと稱すと雖も六百の生徒中「我は第四高等學校生徒なり」とて自覺心を有する者果して幾人かある。あゝ、校生は獨立自尊の氣風あるもの少く、偏狹にして頑矜、而も質朴勇健の美質を欠き、往々にして輕々浮薄の黨と化せむとさへするなり。諸子の上級生や毫も頼むべからず、諸子の校風や毫も尊ぶべからず。吾今や活氣潑々たる諸子に接

し、其前途を憂慮して先づ長大息せざるを得ざる也。

諸子、高等學校時代は人生の最高潮の時也、赤き血潮は各血球に無限の潜勢力を貯へて、細き脈管を破れよと許り開張する時也、今や諸子は至難の關門を蹴破りて此宮殿に闖入せる者なれば諸子の意氣や諸子の抱負や實に想見するだに羨望に堪へざるもの存す。然れども諸子、吾人も實に其數に泄れざりき、諸子と同様なる多望の時期を通過し來りし者なり。「喟城之朝雨」を高らかに歌ひて郷關を辭するや、吾人の意氣眞に天を突くもの有りて存しき。而も一たび來りて軟弱なる金澤の風俗、活氣なき四高の校風に接するや……嗚呼諸子よ、昔戀し昔戀し、短袴黒帽、白いズボンに黒き上衣を着けたる上級生の中に交りて三々伍々、或は庭球コートの傍或は植物園の樹蔭、美しい希望を赤い誠に包

んで、物珍しくも第四校を觀察せしときは人生最大の愉快なる時なりき、

然れども諸子、校風は吾人を同化せずば止まず、幽靈の欠伸とも稱すへき不得要領なる校風は蠢々乎として吾人を染酔せしめたり、あゝかくして止まること一年、吾は生氣なく向上なく、机前に坐して徒らに冥想に耽る不活潑兒と化し終れり。止まること二年、人性頑偏し、自負心強く自惚出で、唯我獨尊を生嚙つて世界を小兒視し馬鹿視するの奇矯兒と化し終れり。今や止まること將に三年ならむとす、あゝ吾性格の變遷や亦危い哉。諸子、今や徒らに遅々因循の時にあらざる也、確固たる決心と周到なる注意とを以て立たずば諸子も亦吾人も其の運命を同じうせざるべからず、之れ諸子の喜ぶ所ならむや。諸子、表面の平和を見て喜ぶ勿れ、禍根は既に裏面に充満す

れば也。萎靡せる校風は諸子を督勵し諸子を感奮せしむるを得ず、諸子の上級生また既に諸子を感化し、薰陶するの資格に欠如せり。萬事頼むべからず、諸子は諸子の獨立獨歩によりて軟化を免れざるべからず、校風を革新せざるべからず。之れ諸子の自家防禦の道にあらざるや。諸子の責務にあらざるや、われ諸子に期待する所甚だ多し、一言以て諸子に與ふ。

時習寮に望む

か、り、生

暴風一過して世は清酒、今や災後の時習寮は八十の健兒を抱いて温に崖下に立てり。亂暴なる時習寮は炎々たる猛火に舐め盡され此に平和の時習寮は生れ出たり。平和平和、風吹かず波起らず、平和の床に平和を枕とし、平和を夢みて平和に睡れる平和の時習寮あゝ亦平和なる哉。

借問す諸子、諸子は平和を以て満足するや。平和はある意味に於て沈滞を意味す、されば平和は血に燃ゆる青年の好んで追求すべき者にあらざるや、平和來らば平和を樂しむ敢て不可なしと雖も、之を探索し之を捕捉し、後生大事と平和に嚙りつくが如きは之れ吾人青年の潔とせざる所なり。青年は活氣に於て生活す、活氣溢るる所寧ろ平地に波瀾を惹起するの概あらざるべからず、何の要ありてか婦女子の如き消極的平和に戀々たるを要せむ。諸子若し尚ほ平和を欲すと云はむか、死せ！死して墓穴に入れ、墓石の中は人生最平和の地ならむ。

寮生諸子、外洋は滄瀾澎湃として天に漲り、濁波滔々として岸に寄するにあらずや。諸子は、いかに不可侵を唱ふとも激波は小さき樂園をも吞噬せざれば止まざるべし。一たび併吞せられむか諸子は亦爲すべからず。唯機は先を制するに

新入生歓迎會

か、り、生

あり、呑噬に先ち諸子は先づ奮つて外洋に漕ぎ出ざるべからず、諸子は強健なる鐵腕を有す、諸子は明晰なる頭腦を有す、諸子は熱烈なる赤誠を内に貯ふ、諸子は腕の折れむ限り血潮の枯れむ限り、全力を盡して前程に漕行かざるべからず、之れ諸子の責務にして亦諸子を待て始めて爲すを得べし。

諸子は校風の振興者たらざるべからず、校規の發揚者たらざるべからず、今や時習寮は舍監寮委員等に於て略其人を得たるが如し、此れ吾人の甚だ喜ぶ所なりと雖も、人未だ働かずは未だ人を得たりと言ふを得ざる也、吾人は時習寮現今の平和、否寧ろ沈滞を以て平和其自身を味はむが爲めの平和を見るを欲せず、機を見、折を得て大々の飛躍をなさむとする豫備的平和なりと信せむと欲する者也、

時は明治參拾九年九月の末、學生課と云ふ恐ろしい關門を辛うじて通過して來た一掲示が突如北辰會掲示場に現はれた。其の文意は

- 一、薩摩芋でも掘り出した様にゾロ／＼校門を潜つて第四高等學校てふ籠の中へ入つて來た許りでは學校の性質も校風も解る筈がない、少くとも皆で一堂に會して胸襟をさらけ出す必要がある之れ特に新入學諸君の爲めに本會を開く第一理由
- 二、新生徒と舊生徒とが途中で行き合つても「川向ひが火事だ」てふ顔付をして居ては逆も美しい校風が發揮せらるゝものではない、且下の急務は先づ新舊生徒の親交を計るにあり、之れ進茶を吸つて心情を吐露する必要の存する第二理由
- 三、吾北辰校は全く情眼を食つてゐる、眠つてゐる間は死んでゐる同様、學校で死なして置くのは諸子!!! 諸子は責任なしとするか、諸子は耻辱とせざるか、本會は少くとも眠つてゐる諸君を叩き起す第一警鐘たらざるべからず。之れ本會を開く第三理由

多言を要せぬ北辰會員たる者は凡て來れ、眼い者は顔を洗つて來れ。腐つた者は石炭酸を撒り掛けて來れ。若夫れ高潔天地に耻ざる士ば堂々闊歩して來れ!!!

此の痛快なる而も眞摯なる掲示は一部三年代議員の名によりて發表せられた。學校は眞に惰眠を貪つて居た、此の掲示を見て騒ぎ出す様では其寢どほけ加減も思ひやられる。三年以來校風と云ふ言語若しくは文字が公衆の面前に發表せられたのは此の掲示を以て嚆矢とする。賢明なる第四高等學校生徒諸君は校風と云ふ者は第一高等學校にのみ存在して居ると思つて居たらしい。

九月二十九日午後一時、天高肥馬の街道を堂々濶歩して集り來る諸士凡そ四百余名、中には随分高潔でない諸士も見受けた、が不思議にも石炭酸を吹き掛けて來た者は一人もなかつた。先づ會場の狀況に就いて一言せしめよ。

至誠堂は熱誠なる新舊兩生徒を以て充たされた、至誠堂も嘸ぞ喜んだらう。

入口は時習寮諸君の盡力になつた輕便アーチを

以て見事に色取られ、其の上に四本の白及を菱形とせし中へ「斬馬」と許り墨黒々と書きつけた篇額が掲げられた。當日參會せし諸氏の中、此の篇額の下を身を慄はした者が決して無かりし事を信せむと欲する。會場は周圍を赤條四本を染出して幕と萬國旗にて美事飾り立てられ、外に本校五綱領の要綱を赤インキを以て古新聞に書きつけた者がヒラ／＼頭の上に淨いて居た。特に會衆の眼を引いたのは校風發揚の四大文字が演壇の上に横一文字に描き出されてあつた事だ。

該會は河合良成氏の登壇によりて開かれた。河合氏先づ開會の趣意を略述し、次に本校の過去現在未來に關して長談義をやつた。其の中次の様な意味の事をも述べた。

其過去に關して「居ること一年余は時習寮内一種の關流あるを認めた。其關流内一種の關

鬪あるを知りき。而も余は思へり、泉の湧出するや清水は先づ濁らざるべからずと、豈計らむや泉は湧かむとするにあらざして枯れむとするなりき……青年は天秤の如し活動せずば必ず墮落すべし。活動なき本校果して此の數理に反抗するを得しや

其の現在を論じてや極力運動部雜誌演說諸部の不振を嘆じ一轉して生徒の奢侈不活潑に論及し最後に其將來を説きて

「雄猛子の如くに勇ましかりし北辰校、一たび咆ゆれば山森霜を生じ萬獸息を潜めし北辰校、今や砂漠の木蔭、熱さ砂中に蹲まりて、青蠅其の眞額に跳梁するも僅に耳朶を動かすのみ。あゝ北辰校は果してかくあるべきか……然りあの長たらしき頭髮は宜しく銕を以て切り去らざるへからず、あの美しき白靴は丸善インキを擲ちて此れを黒色とせざる

べからず……吾人は斬馬の劍を打ち振りて快刀亂麻を斷つが如くにすべし云々」

河合氏降壇するや一部二年今川淵君登壇す、君は本校校風の萎微振はざるを慨論し、熱誠なる論調を以て新入學生諸君に向つて大々的警告を與へた。君の辯は句々肺腑を吐いて出づる者吾人は其の熱誠を謝す、

楠木福松君次いで登壇、徐ろに一杯の水を傾くるや、君の口を衝いて出づる千言萬語、實に君の快辯には感服せざるを得ない。君曰

「蛙鳴蟬騒は吾人之を取らず、空虚の大鼓ほどよく鳴る者だ。校風々々などと騒ぎ立て、其の實行を後にするが如きは斷じて不可也、吾人は先づ空論よりも實行を先にすべきである其の一段として寄宿舎の新築を急務中の最急務とす」と

君の論は實に諤々の卓論其の言ふ所凡にして凡

ならず、幾多狂暴なる書生的議論と其の趣を異にし、其の中經綸的才能を認むるを得たる。君よ自愛せよ、北辰校は君の辯を要するの機亦なしとせず、

次いで獨三森岡二部君登壇、君は金澤市の淫靡なるを極論し之れに對照せしむるに四高魂なる者を以てし、我々風なきにあらず發達せざるのみ、活躍せざるのみと論じたり。君は本校有数の辯士、其の言ふ處凡て肯領すべし、特に金澤市の優弱なる風俗を巧に歴史上より解明し以て新入生の注意を喚起したるか如きは、吾人の君に多謝すべき所なりとす。「金澤市人は小人なり、豈閑居して不善をなさざらむや」とやりつけしが如きは實に吾人の意を得たる者と稱すべし。

會衆毫も倦まず辯士の氣焰益々揚る、獨二尾佐竹堅君登壇、君能州の産、黒面五尺三

寸の男、而も其の言ふ所豈黒色に止まらむや、五尺三寸に限らむや。光彩陸離、氣焰萬丈。君徐ろに論じて曰く

「試みに窓に倚りて校門に蟬集する群衆に眼を注げ、鐵の如き顔色を有せる健男、あゝ幾人かある、多くは青生瓜のみ、へなちよこのみ」と嘲弄し、更に一步を譲り、吾人はへなちよこを敢て咎めず、へなちよこは宜しくへなちよこの爲めに氣を吐く幾百尺。

君は更に論鋒を一變して生徒の奢侈及び不勉強を痛論し北辰會雜誌部に鋭鋒を向くるや、「現今の北辰會の雜誌は星君の集會場也、董君の展覽

會なり、吾人之を手にするをすら潔とせず、あゝ則に投せむ哉投せむ哉」と嘆じたり。君の辯は鐵錘の如し、音聲を以て人を強えず、奇矯を以て人を欺かずと雖も、吾人を裨益し病痾を治せむとするには極めて重要たる者なるべし、尾佐竹君降壇するや、校歌及び本校生徒心得五個條の印刷物が一般に配布せられた。英二北澤哲君次いで登壇

君は時習察舌界の明星なり、滿腔に溢るゝ熱誠を校風問題に注ぎかけたる君の雄辯字々言々凡て金鼓の響あらしめた。君は四高生の眞意義を精説し、校風の樹立上團結心の要用を喝破し、更に國家主義の上に吾人の見地を求むべきを論じぬ。議論明晰一点の間然する所なかりき。あゝ君自重せよ、國家多事、校裡亦多端、校風の淵源地たる時習察は今や兄等の腕によりて興廢の分岐点に立たるにあらずや、北澤君降壇、

突如英三品川主計君猛然として壇上に現はる、聽衆其の異象に驚いて噤然肅然。品川君「今し腐敗漢の本會を侮辱するを聞きたり」とてふ叫聲を冒頭として、猛烈に而も痛激に校内腐敗分子の横行を憤慨し、鐵拳高く振り翳して「弱輩來れ吾に正義の鐵拳あり」と怒鳴りぬ、今や場内殺氣溢れて君が肺肝の響四壁に反響す、凡そ五分間の後君の狂熱は君の身体を去れり。君は事に當りて直ちに激するは余の性癖なり」とてふ言を殘して靜に壇を下りぬ。あゝ君は熱烈の人なり、青年は熱烈ならざるべからずと雖も亦冷靜ならざるべからず。君は一を得て未だ他を得ざる者か、

次に英二京極逸三君登壇、君は直上の人、高潮の人也、今や北辰四百の健兒を睥睨して獅吼虎咆の雄辯を振はむとす。八百の炯眼今や君の身邊に集る。

君は深刻にして而も朗明なる音聲を以て極力校風の萎微を慨論したり。其の要に曰「吾人は自惚なかるべからず、適度なる自惚は之を自覺心と云ふ。苟も四高に業を受く、吾人豈第四高生徒なるの自覺心なくして可ならむや。然るに何ぞや一高の寮歌を歌ひて得々とし、甚しきに至りては二條の白線を帽子に附し恬然として大道を濶歩し「吾こそは偽一高生徒で御座る」てふ顔付をなすに至りては實に言語同斷。あゝかくして北辰校の將來をいかにせむや」と、君は佛陀基督のいかに自信念の強かりしかを引證し、自信力は神通力なりと結論したり、

京極君雷の如き喝采の中に降壇するや、獨三の健男子南鐵太郎君登壇。君は氣の人也、精力の人も、奮闘の人も、あゝ君が滔々諤々の大論議、吾夫れ與り聞くを得む。

君は登壇先づ至誠堂割れよと許りの大聲を以て

「諸君！」と許り怒鳴りつけぬ、四百の聴衆其の聲の大なるに仰天して啞然たらざる者果して幾人ぞ。

君は現化の文明を Kultur, Civilization. の二に分ち、物質的文明我に於て何かあらむ、精神的文明獨り尊ぶべしと論じ更に北辰校なる者を此の二方面より論斷して、吾人は斷じて物質的文明に心酔すべからざるを警告したり。此の人に於て此の言ある哉。君の論は突飛ならず露骨ならず、巧に思ふ所を述べて餘蘊なかりき。然れども君の言裏にはのめくもの果して何ぞ、斬馬の利劍か正義の鐵拳か。非乎非乎。

辯士幾人、言句幾十萬、凡て此れ愛校の熱血ならざるはなし、四時間ブツ通しの演説而も一人の退席者なく、靜肅に而も熱誠に聴衆の耳を傾けしめしは慥に喜ぶべき現象たらすはあらず。南君降壇するや新入生渡邊得司郎君奮然身を挺

して登壇し、熱誠なる奥州辯を振つて、上級生が新入生に對する警告を感謝し「余は新入生一同を代表し、此に神聖なる至誠堂に於て、本校々風の發揮に努力せむことを誓ふ」と述べたり。あゝ吾豈君の辯を喜ばむや、君の心情を喜ぶのみ君の熱誠を喜ぶのみ。

二年振りにて校歌は會場も跳り出さむ許りに歌はれた。河合氏の音頭にて「新入學歡迎會兼校風發揚會萬歲」を唱へられた。五十貫の甘藷と三千個の饅頭とは四百の荒くれ男の犠牲となるべく謹んで控席に端坐して居た。忽ちにして談戦起り笑鬪始まる。落花紛々雪紛々、時ならぬ冬を現じた。饅山須臾にして落城。芋城形勢危殆なり。散會五時。夕鴉悠々南して、北辰校裡精神的革命の旗幟、夕陽に映じて鮮かなり。

健康の必要を論じ精神の 修養上柔道の隆盛を望む

南 鉄 生

人生數十百年空々膜々に經過すべきに非ず此間必ずや相當の事業なかるべからざるなり事業なく徒らに生を送るは死に優る事幾何ぞや夫人人生には目的あり理想とする所あるあつて存す此目的を達せんとし此理想を實現せんとするには必ずや充分の事業經營なかるべからざるなりかくて事業經營の充分を致さんとすれば所詮累弱の身を以てしては能はざるなり

才子多病とは何者の言ぞ世の才子を見るに其病身を以つて返つて驕となすが如き者なきに非ず思はざるの甚だ敷なり才子三思せよ病氣と健康と何れが愉快なるかは論ずる迄もなしとして常に醫者の厄介となり藥瓶を枕頭に絶たざるに甘んずるの所謂才子にして一と角の健康者ならん

か社會は之が爲めに醫者と藥製造との勞力の幾分を減ずるを得べく従つて此方面の勞力を驅つて他の生産的方面に使用する事を得べく又目前の當人は病床に伏するの時間を轉じて活動の世界に致す事を得べし才子が病氣ならざるを病氣なるに比するに一舉兩得利害及ぶ所々に非ざるを知るべし

才子の多病は事實なり事實なりと雖も決して喜ぶべきの事實に非ずして悲むべきの現象なり才子の病氣なるは才子の欠点なり優點には非ざるなり病氣勝ならざれば才子たる事能はざるの理何處にかある此欠点あるが爲めに才子が其才を用ふるの時宜減せられ活動の世界は狭少ならざるを得ざるなり悲しむべき現象に非ずして何ぞ唯に才子に止まらざるなり世に立ち一事をなし一業を企てんとする者が其身に病あると其身の健全なると利害の及ぼす所唯に彼自身に止まらざるなり國家社會全般の利害問題なり健康の事豈に等閑に附すべけんや人にして生ある者必ずや一定の活動あり一個の事業あり社會の進化に一片の補益なかるべからずし而して如何なる事業に於ても一身一家の爲なるは勿論宜しく國家社會全般の利害問題たるに鑑みて其身の健康を保存し強健の体を養はざるべからざるなり

からざる事業にして其遠逝によりて社會は之を遂くるに別に他の人を用ひざるべからず且つ此人を無意味に去らしめんが爲めに費されたる一家の損失は即ち國家社會全般の損失なれば彼等は其身の天死によりて二重の負債を擔へる者なり二重の損失を國家社會に被らす者なり自ら利せんが爲めに破産する者あり元より惡むべしと雖も國家社會の財寶が此人に於て保持せらるゝ以上(不正とは云へ)全般の社會は別に寸毫の損益なきなり然れども他に其損害を被らすのみにして之に代るべき利益を社會の内に保存する事能はざる者即ち天死者は其被らしめたる丈の損害を正しく全般の社會に被らせしなり然らば即ち有爲の身を以て天死するの人は彼の惡むべき自ら利せんが爲めに破産せんとする者よりも社會に負ふの罪寧ろ小ならずと云はざるべからざるなり

且幸にして脱れて生をつなぎつゝある者と雖も一般に衰弱して生あるは名のみむしろ死せるに優る事幾何もなし帝國の男子たる價値なき國家の殻つぶしなり嗚呼彼死して罪あり生きて尙益なし何ぞ其れ憐まざるを得んや誠に健康を失ひたる人程不幸なるはなし

星亨やビスマルクやカーライルやワシントンや秀吉やナポレオンや苟も大志あり大事をなし偉業を企て其成功あり少くとも生き甲斐ありし者を見るに皆健康なる身体を有するに非ざるなり

且見よ南亞の偉傑故セシルローズは元來蒲柳の質なりき大學にて脩學するの困難なりし位の病人なり然も其大器は晩成を期し決然として南亞に渡航して身の健康を作り歸りて大學に學び暫くにして又南亞に赴き歸りて又大學生たり其間悠悠々學問の如何なる者なるかを眞に了解せる彼

には点数の如何修業年数の増加等更に念頭に非ざりしなり

學問の爲めに事業あるに非ず事業あるが爲めに學問あるなり學問あるが爲めに人あるに非ず人あるが爲めに學問あるなり彼能く之を知る故に遂には頑丈なる見るからに強さうなる體質に發達し、かく偉大なる拓殖の事を完成する事を得し所以なり

手つ取り早き話が日露講和談判にあり我小村外相の俊才を以てして唯頑固一方なるウイッテにうまう一盃喰されたる所以を考ふるに其原因多々あらん吾人は其健康の優劣強弱を以て其因となさんとする者なり見よ小村大使は偏々たる小男の病身者なり彼ウイッテが頑丈なる体格誰の眼にも強さうに貫目ありそうなるに見ゆ知るべしウイッテの常に堂々として小村の絶えず狼狽し遂に衆人稠座の席に赤恥を洒さるゝに至りし

所以

以上論ずるが如く健康が人生に必要欠ぐべからざるは明かなり然らば如何にして此健康を維持し強きが上にも一層の強からん事を期すべきぞ旅行航海等凡て健康に宜しかるべし然も吾人は体育によりて健康の資となさんとする者なり(勿論暴飲暴食を慎むべし毎日冷水摩擦など之に副ふべきものとす) 体育と健康と健康と体育と其相關聯する所は其道の人に聞かずとも其功用の如何は容易に之を知るべきなり

但し体育と云ふと雖も其種類少からずテニス、ボート、ボール、劍、柔道等皆宜しからざるに非ずと雖も吾人は此中特に柔道を撰まんとする者なり

其れ柔道は肉体的のものなりと雖も又彼の精神的なる武士道と相關聯する所少からざるなり否武士道と柔道とは切つても切れぬ仲なるなり彼

の勇壯なる閉塞隊に於けるが如くかの悲惨なる常陸丸に於けるが如く日露戦争中凡ての方面に現はされたる日本帝國の武士道が精神とする所の精神は誠に柔道が以て精神となす所の精神なり武士道を離れたる柔道は柔道に非ず一種の曲藝のみ何の取り立てゝ其必要を論せんや

現今の日本社會を觀察するに一面に於ては戦争の餘波を受けて武勇剛壯の氣風盛んにして書生に於ても滿韓旅行高山生活等勇壯見るに足るべき者少からずと雖も眼を轉じて他の方面を見るに思ひ半ばに過ぐる者あらん

頃日徵兵忌避の爲めに檢舉せられたる者東京の學生にありて既に三百幾十名地方を合すれば五百名を越へんとすと云ふを聞くだに其卑怯日本帝國の男子たるに齡すべからざるを感ずるがかる惡徒が我日本帝國の男子中に現在現存するが事實なるなり且一般學生は物質的文明に眩惑

せられて益々奢侈に流れ淫紊の風滔々として學生の社會をも風靡し柔弱小膽は粹と呼ばれ優しとほめられ腐敗墮落の極は遂に私立大學生中に押入強盜を出すを聞くに至れり豈嘆せざるべけんや

武士道の行はれざるや久し如何にして之が全滅を未だ普からざるに恢復すべきか吾人が体育中特に柔道を撰む所以實に此に存するなり抑々柔道の精神は武士道にあり剛膽にして勇壯剛健にして朴質敵に屈せられざると同時に又敵を憐み長上を恭ひ禮讓を重んじ奢侈を戒め亂暴を慎み廉耻を尊び饑寒に堪へ強を挫き弱を救ひ義侠の精神を養ひ技術の進むに従ひ悟道の域に達し安神立命の界に進むにあり

吾人は以上の理由により体育としては勿論精神の脩養上武士道の挽回策とし人心の鼓舞策として柔道の盛ならん事を希望し各人各個進んで此

門に入り其技を研くの間隱微の中能く其精神を脩養せん事熱望に堪へざるなり

柔道は元護身の要武術なり其強からんとする元より其所なり然りと雖も唯強さのみが柔道の目的に非ざる以上其志す所は近く体育にあり引いて精神の脩養にあり唯慢然強しと云ふのみならば柔道の精神に於て何かあらん

凡そ世に立ち事業をなさんとする者は身体の強壯と精神の脩養とを要すべし身体を強ふするには体育に待つ所多かるべし体育中精神の脩養を伴ふ所の柔道に因りて吾人は一舉して二方面の發達を期すべく再び云はんとすかゝる理由によりて吾人は柔道の隆盛ならん事を望む事切なり



演説の必要を論じ其不振を慨し此が振興の策として北辰會の演説會を公開にせん事を望む

南 鐵 生

シーザーが覇業半にして野心の名によりて斃さるゝや其葬式に際して人民が彼を罵倒するの聲を静めて賞賛の辭となしシーザーの愛すべくして唯ブルタス カシヤスの惡むべきを信せしめて易く此徒を平げ身は同志と圖つて再び三頭政治を興すに至らしめしは僅にアントニー一片の弔演説に非ずや

英本國の壓制日に甚だしく殖民地最後の請願は空しく大西洋外に退けられ殖民地の英國守備兵は其抑壓の力を増さんが爲めに増加せられんとするや集會の米人中に最早や詮方なし本國の命唯々従ふのみとさへ説く者あるを排して獨り能

く人心を動かして獨立の精神を鼓舞して阿米利加合衆國今日の盛あるを致さしめたる者はバトリックヘンリーが「吾人に自由を興へよ然らざれば死を興へよ」と叫びたる一片の演説に非ずや

マセドン王フリッパが野心滿々希臘全土を併呑せんとするを觀破して全希臘民人を覺醒し一時はフリッパの軍に抗するの旗を擧げしめたるは雄辯と大聲とを怒濤に對して練磨したるデモスゼネス其人の演説に外ならざるなり

セーベスの民主政体がスバルタ人の爲めに斃さるゝや其友がアゼン人に向つて訴へんとして訴ふる能はざりし所の者を自ら伐りて巧みに訴へ其國人の同情を一黨の下に集めて遂にセーベスの恢復を遂行し更に全希臘の覇權を握るに至らしめし者實にエバミノンダスがアゼンの公演場に於ける一場の演説に外ならざるなり

演説の力亦大なる哉且其例を古さに求むるを要せざるなり見よ阿米利加合衆國の大統領たらんとする者空手徒拳三寸の舌を振うて四十余州を奔れば幾方里の地幾千万の民一朝にして其治下に服するなり我國に於ても代議士となり地方議員とならんとする者更に進んで議場に立ち自己の政見を行はんとし勝を敵黨に制せんとする者凡て演説の力に待つべきなり

演説の用唯に政治社會に止まらざるなり銀行會社の集會に自説を貫かんにも學者先生が學生を教へ其研究する所を發表するに至る迄皆演説の力に待つ所多かるべきなり演説の功愈々増加して愈々極まる所を知らず實に野蠻の世他を制する者腕力にありし如く文明の勢他を制するもの演説に非ずして何ぞや

演説の功用夫れ斯の如し愚者何を苦んで演説の功用を認めざる過去に於て然りし如く未來に於

て然り現在に於ても亦然らざるを得ざるなり偉大なる哉演説の力

元來我國には現時の所謂演説なる者なく現時の所謂演説は唯明治世界の新發明なり従つて創立日尙淺きの故を以て其發達未だ著しからず青年有爲の輩にして雄辯に心掛けざる者多きは誠に残念の事なり豈嘆せざるべけんや

先學年の我校演説會には委員諸君の盡力が奈邊迄普かりしは吾人の知る所に非ずと雖も堂々たる北辰會の演説會に聽衆は辯士を合せて僅々二十名を集めたる事あり又演説其物を寢言の云ひ合ひと語りたる者あるを耳にしたる事もあり豈にあきれて物の云へやう道理あらんや

然るに先々學年吾人が寄宿舎生活をなしたるありし當時に於て寮内の演壇は如何なりしぞ演説會は勿論の事茶話會に於ても辯士は雲の如くに起り高論湧き卓說出で演壇は相當に繁昌したり

きその所以は何ぞや他なし一概には云はれざるべけれど先づ演説の

盛衰は聽衆の多寡に懸るを以てなり寄宿の時舎生は義務的にも吾人の演説に傾聽したればなり聽衆の多かりしを以てなり

然り聽衆多ければ辯士に張合あり張合あればこそ充分熱心に其技を練る事を得るなれ聽衆寡き時には辯士自ら懈怠の心を生じ張詰めし勇氣も消ね失せ熱心の度合も減じ果ては其技進まず演壇に立つがいやになるやうになるなり

少なくとも演説の盛衰を念頭に懸ける者は必ず先づ聽衆の多少を懸念の中に置かざるべからず演説會の盛大ならんと期する者必ずや聽衆の多からん事を計るべきなり

而して聽衆は勿論校内の生徒間先生間に求むべし然りと雖も吾人は之を以て足れりとせざるなり専門學校中師範學校生宜しく聽衆として招く

べし一般の市民喜んで我校堂に拜聽を許すべし如何にもして聽衆を多くし辯士をして張合を生せしめ最良の努力を演説の練習に用ゐしめざるべからざるなり北陸の最高學府たる四校をして流石は四高なり演壇の盛斯くの如し學生の氣焔斯の如し吾人學ぶべし倣ふべきなりこの觀念を中師範生一般市民に抱かしむべし北陸の夢少なくとも金澤の寢りを醒まして人間らしき元氣を奮起せしむべきなり然りと雖も説をなす者あり金澤の夢を醒ますは扱て置き四高の四高たるを公示するは扱て置き見つともなき寢言のやうな言を聽かして返つて四高の四高たる價值を落し物笑の種たらしむるなきを得んやと是或は尤もらしき非難ならん然も吾人は唯其杞憂たるべきを斷言せんとする者なり

何ぞや他なしかく大仕掛に聽衆を呼ばんか辯士たる者充分の張合を生じ一種の功名心を生じ一

種の覺悟をなし責任の如何に重んずべきかを知りて今を晴れと揮身の心血を瀝いで其演説に従ふべきなり然らば即ち其場に於ては其人上乘の成績を示して外來の聽衆を驚倒せしむべく内に顧みては其人格一段の進歩上達を見るべく次回には更に一層の雄辯を聽かすべきなりかくて連續致々眼勉せば皆上乘の雄辯家たる事期して待つべく天下の雄辯家は北辰校に出でずして果して何處に出づるかを疑はしむべきなり且忌むべき事ありて外來の聽衆を容れざらんと欲する時何時にても公開演説の廣告を出さざるを得べきに非ずや何の障か之あらん

人間演説の必用を感じ現今演説の不振を慨嘆し之が振興を計らんとするの諸君は吾人徹忠の存する所を察し是非善惡利害得失の見易きを見て以て宜しく北辰會の演説を公開にするの舉を贊せられん事を

演説部報

十月二十七日。

土曜午后六時より各學校聯合演説會を開く。

これよりさき羽檄を飛ばして各學校に辯士の出會を計る。來り會するもの醫學專門學校二名、第一中學校、第二中學校各一名、工業學校、商業學校も亦各一名、これに本校出演者を兼ね併せなば十有七名、けだし稀有の大數ならずむばあらず、定刻に至つては、さしもの至誠堂も立錐の余地なきがごとし、

新井堯爾君(英二)開會の辭、

本會を開くに至りし所以を告げ、やがて演説の要用に及ぶやアントニーの雄辯ローマ人をして泣下せしめ、基督の演説集とも見る可きバイブル千載に時人を濟度す、釋迦の佛書、孔子の經典みな然らざるはなし、演説の効果の大なる

想ふ可し、肺腑より出づる演説最も吾人の悦ぶ處なりと叙し去るや、

三竹先生。徐ろに立ちて、辯士の氣焔を拜聽するに先ち一言諸君に望む、至誠堂裏いかゞはしき言辭を發し、暴言を陳じて快とするなかれと、注意せらる。

富田愛次郎君(英二)余が天才主義

曰くプラトンの眞理は何んぞやとの言は今に未解決あり、この故に余は天才を求む、佛國の革命には國民精神を躰現したる天才那翁あり、われ彼を愛す、モンロー主義も亦可也と、論調を一轉し、青年の保護に任ずる宗教界腐敗を極め世の指導者何處にかある、國家の自營を以て職とする政治家、學者那邊に聲を潜むるや、これ天才を呼ぶの時也

かくて日英同盟を論じ東洋人種を説き、日清、日露の戦争に自覺の發念せし事を明らかにし、世界は英雄天才の才略に出づるものと論結す。傾聽すべき論、自今益々辯士の自愛を祈る。

松井貞次郎君(獨二)勞力と機械

勞力と機械。辯士云いけらく、文明は諸器械を産出したるも畢竟勞力を省くものとならずして、電氣の發明應用に伴ひ愈々以て人間勞苦多く寸暇なし、人生をして苦煩あらしむる諸器械をば然らば人類は何の爲めに作出するに至りしか、器械をも人生に無意義か、

論者あり、吾人は爲めに大文化を得たりと、又曰く社會經濟大に發達を促されたり、現世は爲めに多大の進化をなしたり、われ等は已に動物界を征服し、かてて天体を制御せんごしつゝあり、輕氣球の如きこれ、故に人間は一面煩雜に趨ることも文化進運の上より見れば愈々器械の力を要するにあらずや。

文化を希ふ人にしてこの言あるは豈て奇とせず。素より器械の進歩は社會及び人心に多大の益を與へぬ、然れども物質科學の進歩はその實利的方面を外にし今は吾人の思想生活に何等の變化を與へしか、又物質文明の爲めに所謂物質と、勢力との根本問題に於てはいかに驚く可く

ラヂウムの發見も解釋するに由なきに非らずや

加之社會文明に供なう暗黒の反面を想像せんか、吾人は却て文明の爲めに煩はさるゝその多きになやむに非らずや。辯士はよもや不具なる文明、人心を害毒するも尙器械力を崇拜せんとする人なるかを疑ふ。

小島修三君(商業)信用に就て

信用は價值なり、とは吾人これをミルに聽けり、然るに今や君この好問題につきて商人と信用との關係を論せんとす、商人に必要なるも多けれど、信用を以て尤もす取引爲めに敏活に繁昌すべし、信用よりして手形あり紙幣生る吾人はこれ等の物に依りて利益を得。

かくて直輸入は商業界の發達上緊要なるを證し、「僞言は寶なり」と自稱して掛直を吐き外人を苦しめ、その他、國産物の不正品あるを嘆き英人の信用に富めるを稱讚して論を終る。辯士として場馴れせざるの態ありしは遺憾なりと。

正力松太郎君(獨三)四高の運動界

鐵線眼鏡の偉丈夫、本校屈指の柔道家今や得意の問題を提げて壇上に仁王立す。緒を運動部の發展奈何は以てその校學生の元氣一班を知るを得べしと云ふに發し、我校近來諸般の運動部甚大の發達をなす、

五六年前わが運動部は三高に戰をいごかし、たい彼の乗する處となりわが校撰手は屈辱を負ひて歸來す、以往いくそ度か回復策講せられしも未だ事實ならす昨年初めて柔道部は率先して仕合を彼に告知せしも、かれ言を左右に托し肯んずるが如く拒むが如く又我を畏懼するものゝ如し、

と厲聲一番今年こそは捲土重來、北辰校旗を三高運動部に樹立して雌雄を決せんは眞に快ならずや、と斷するや滿場意氣豪然之を壯としこれを快と叫ぶ。やがて非運動家の無爲纖弱なるを叱咤し四高の運動界の爲めに氣焔萬丈。熱烈勇猛の辭一々人をして首肯せしむ、好哉。演説部この好漢を得たるを賀す、運動部の發展は君に

まづ吾人發達の生面を(一)襁褓時代(二)學校時代(三)社會時代と分ち、各時代發達に要する監督教育の變動的より、自治教育に遷る迄の關聯を明らかにし、第一期に哺養よろしからざるもの、第二期にありて師長朋友のあしき者、最後に自治的精神の乏しき人はこれ疑もなく時勢に

後るゝの輩なりと反證を置き自治教育の眞髓を解釋せらる、流暢の辯敬すべきも聊か秋霜の辭に乏しきをうらむ者也。
中島鶴治君(醫專)公德と衛生
問題なか／＼に膨大也、わが善くする處にあらざれば請ふその外觀を論じて止まむと前提し、公德私徳と云ふも異辭同義なり、私徳ある人公德に心ある士也、公德の人にして私義あらざればなりと起論しこゝに公德と衛生との連絡を保たんとて、水と攝生、かねて水道問題に嘴

負ふ處多大なれば也。

三谷文吉君(二中校)英艦觀覽記

由來二中校は眞摯を以て鳴る。今日しも亦重厚なる君八月三日能州松ヶ下灣に投錨せし英艦訪問の概況を叙事せらる、勿論文飾虚構の跡なし、先づ英艦の灰色はこれ友邦情誼の最も濃やかなる表證なるを傳へ、艦内石炭庫の傍に至るや直に有栖川宮殿下のかつて英國御留學の砌、テームス號にあらせられてひとしく斯かる石炭庫に執銃服務し給ひしを連想せしなど、どこ迄も君の觀察は實意あり、只云ふ可くんば漠たる觀察談よりは自ら見地をたて、この軍艦、延いて友邦國人の眞情を批評したらんにはと望まざるを得ざりき。

森岡二郎君(獨三)自治教育

僕入學以來、そこに演説會あり、そこに茶話會あり、そこに語學會ある毎に、必らず君の名を

を入れ、

然るに物貨の進歩と共に公德は長足の退歩をなしたり、衛生も各人の内部にあり、社會には公衆衛生あり個人の衛生をつゝしむは公衆道徳の一端なり、こゝに於て衛生と道徳とは宗教の信仰に於けるが如し、衛生發達し公德備はりこゝに完璧の社會生活就るものなり、

もし夫れ衛生と宗教とは發達相伴ふものなりと云ふ論旨は大に可なり、爲めにローマ印度を引證したる尙可也、然れ共論者は大我なる大精神の根底によつて成立する宗教を單なる衛生宗教、潔癖宗教と偏狹視せしには非らずや。水を説きし君は又さらに空氣を解説し塵埃の害毒、都會の不潔はいかに工業的の進歩をなすもこれ防く態はざるは獨乙の媒姻の爲めに歳々裁判沙汰の絶えざるにも徴すべし、かゝるが故に文明の整頓するは公衆衛生の發達するに於て然りと

なすと結論す。時に洒落ありてうれしかりき。

佐藤正俊君(獨一)偉人の心を心とせよ

古人の句に曰く、人生三萬六千日、半是窮悲半悲哀と、吾人この間に生をうけ人間の行路を辿る幸福を得んは吾が心也、不安なき快樂を得んとするは吾が願ふ處也。われ常住の安樂を獲んとすれば佗人も亦これを求めんと焦せる、こゝに鬭争して、比周し、校の中にも人の中にも只小なる區域のあるを知つて、融通の愛あるを知らず、これをいかに。佐藤君の論せんとする處即ちこれの要点也。

世の人私利にあこがることの憐むべきか、只偉人において協同利他の精神を以て人生に臨むその間一点の私心なし。かつ世人の幸福を得たりとす状態を見果してこれ俯仰天地に愧ざるの幸福なるか、否、かれ等の多くは他を虐げてこの安易を奪取せしものなれば榮華の反面にはかれ等の罪證を憎むの良心の呵責に堪へ能はざるなり。

害を避け利に就くは人性の自然也、吾人は睡眠中にすら手を搖かして蚊を追ひ蠅を拂ふに非らずや。されど悉達太子は十九にて伽耶城を出で壇獨山の麓に難行し、基督は親朋にすてられし

も尙愛を説き利劍をこの世に持參したる、マホメットの亞刺比亞の一角に「我とける事は天下の眞理なり誰かこれを遮り得むものぞ」と、獅子吼したるが如き孰れか衆生濟度、愛の福音、眞理の確立に非らざるものぞ、私心なしとはこれ謂也。故に君語を高めて云ふ

私心なき偉人の行蹟今日に傳へて赫灼、利他協同主義の宗教の人心を救ふ故なきにあらず、何となればかれ偉人は道の爲めに生き道の爲めに没す、然もその道たるや公明正大、些の私慾なければ也

君さらに老子を釋いて偉人の心事に及び、偉人と云ふも素と天性にあらず、修養の人なり故に吾人も修養の一端として偉人の心を心とし我が周圍と調和しわが周圍を友化するは生活の第一義ならざる可からず、と案をたゞいて壇を下る。

君京華の出、根本先生の許にある多年、この人にしてこの言あり、最も吾人の首肯に値す、

音聲賤達、論旨明晰わか校この人を得たるを誇とす。云ふ可くんば君に卓厲風發の慨なきを憾とす。

田邊孝次君(工業校)わが校

三峽星河影動搖。窓外夜更けて至誠堂蕭靜水を打つたるが如し、されど君一度壇上に現はるゝや滿場絶喜絶快す、君果して何を解かんとするか。その工業校たるだけに實業教育の隆盛ならんとを望むと云ひし處大に無邪氣なり、やがてわが校の内容を紹介するに當つては圓轉滑脱、時に美術を説き時に軟文學を談じて鋭鋒前なし、前の無邪氣なりし人はこゝに於てか嚴正なる審美眼を有する人となりき。

わが工業校はその設備に六万円を費したる事に於て全國に冠たるのみならず、成績に於ても隨一たるを失はず、われ等は第五回博覽會に出品して第一等賞を得たれば全國工業校を代表して聖鄧路易博覽會に出品して金牌を得たり、

と揚言して得々たるかど見れば

抑揄し得て妙を極む。工業校しりへには居けずとアツト感嘆しぬ。次回の聯合演說會には又君の輕快の辯をきくを得ん乎。

尾佐竹堅君(獨二彌次馬品格論

吾人は視ざるも可、聽かざるも可、然れ共吾人は遂に語らざる可からず、音聲の發する處即ち談論の快あり、堂々たる論議あり、北辰校演說部あるもこれが爲め、わが彌次馬論をかつぎ出したるもこれ吾人に云はざる可からざるものと存すればなり。その論題に入るに先んじ本校對高岡中學テニス、マツチに就きてかれの我觀にきけ。

四高亂軍の様となるや彌次一齊に四高軍の無能を嘲る、然れども一朝渡邊、稻本の兩君陣頭にラケットを持し顯はる、

や高岡軍朝日に解くる雪氷の如く屍を馬前に暴らす、敵と云はす味方の差別なく、口きたなかりし彌次馬も何れも兩君の技の神妙なるに喫驚して一言なし

彼この事實を促へて

憐む可し野次の胸中、汝らは弱者を蔑にし、強者に潜伏するの外能事なきか、弱を嘲る尙可なり、されどかゝる彌次馬に限りわが失敗は他人に加之、功あるに於ては撰手の功も我が手に睡して得たり顔す、心事の劣等なる遂に度す可からず

これを手始めにして、渡邊稻本の兩君を稱讚措かず即ち曰く

われ兩君を尊敬する高岡軍を薙ぎ倒したるを以てに非らず、運動をして神聖視せしめたる事に存す、何んぞや、嚴格なる紳士の面前にありて狂人ならざるよりは誰か得てこの紳士を面罵し得んものぞ。渡邊稻本兩君の神に入る技、自信に厚き態度野次之を難するに由なく、觀者その妙技に酔ふ、運動、こに於てか神聖なり、渡邊稻本君こゝに始めて尊敬に値す、彌次いよく品性下れり

彌次獨り運動家を解せざるのみか、一般人士も亦運動家の心情を洞察しこれに同情するなく敗るればこれを疏外し、勝てはこれを觀炙して以て誇とす、今や我校三高遠征の擧あり撰手こ

れに對していかなる準備をなし校友以ていかなる觀想を抱けるか。
三高遠征は北日本對關西との競争なり、撰手の氣根くらべ也いやしくも辛抱せんとするの意志あらば何處迄も辛抱するの意志なかる可からず、何事も知り抜いて奮進するにあり。
と論じて撰手に意氣のある處を明らかにせん
とを乞ひ六百の校友卿等の后りへにあり、后患なし機を逸せず邁進せよ、猫顔大の小天地に安住して得たりとす可きに非らず、只に我校とのみ云はんや一中然り、二中、工業、商業、商業共に然り、四高同盟を作り各々欲する所を表示して關西を蹂躙せよ。工業も日本一とほこるを止めて京部美術界に出て競争を試みよ、商業はその信用策を關西行商に實行せよ、名譽を得んとするもの皆な起て、總立をせよ。
かれ百尺竿頭一步を進めて、野次馬改革論に入りて得意の三十棒を加へんとしたるも、時間

の切迫するありしを以て腓肉を生せしめて壇を下る。

神田外茂夫君(一中校)理解

満場の叫喚、千衆の拍手に耳を聳せんばかりなり、既に見る一中校の秀才神田君壇上に起り。もの皆多様なるよりして、又意味の種々あるよりして誤解來る、誤解あらば真正面にこれを解釋し寸毫も不可思議を存すべからず、これ理解のある所以也、

事に當りては疑ふべし、疑に次で解至る、表面をのみ視ては透徹せる理解をなし難し。又疑ふには充分なる常識を要す、これなくては見解偏狹となり判断應用を誤る

明確なる頭腦こゝに於てか要あり、徐々論鋒をすくめ

衷心會得し悟了するなくして万巻の書を涉獵す何の益かあらむ、万事以て推し知るべし、理解せざるものは知識に非らず、小兒と聖賢の差は當の理解より來る確信の有無のみ、

詰込主義の學生眞に顔色なし。わが一心の自

由を擁護し、吾意力を最高度に活動せしめて理解せんと努力するは吾人が畢生の工夫たらずむばあらず。縦横觀察始めて我意の欲するか如く解釋するを得べし。疑ふは大に信ずるとはこの謂なり。
然れ共君よ、冷靜ならずは事實を觀察する能はざるも、乍併同情なくば真相を理解する能はざるを奈何にせむや。

伊藤運隆君(獨一)偉人論

余は奥州出羽の産ヅ、辯の親玉也、とは君の自白なり。赤心の發する處そこに金石の音あり、熱誠の奔しる處そこに人性の眞泉沸々たり、文士並飾もと男子の本領にあらざる也、況んやそれ區々たる言辭のナマリをや。

勢力の優劣なるもの、これ偉人が、常人を超越せるもの仰も亦偉人か、吾人をしてその偉大なる人格を信仰せしむるもの、これか、刻苦精厲したるもの謂か

君、偉人論の前提かくの如く然り、偉大なる人

性は偉大なるを信仰するに依てなる。朝敵に對して卿等は壯嚴の感に打たれずや、大海の怒濤狂亂するを見て自然と人心との契合を認めざるや、

天地以て友とす可く語るべし、自然には感應あり、天地は偉大なる力その者也、この力を觀る能はずむは自然に對する觀念は空なりと云ふ可し。宇宙は大意志常住の相なり、大風の迅來するを見よ何ぞそれ雄大なる、この神氣に乗ず偉大ならざらんとするも得べからず、心氣恍然たらざるも得べからざるなり、偉人とは即ち、この大氣の一部を體現したるもの、

議論高潮に達し神韻習々たり、聽衆恰もチャームせられし如し。よつて人性と自然との關係を細説し、眞正なる自覺は天上天下唯我獨尊なり、不退轉の精神もてこの域に達すべし、不能と云ふを止めよ、これを百年の後に期し千年の末に俟つ何ぞ遅しとせむや、人間愛す可きは勇猛進達止まざるにあり、この点に於て偉人最も尊ぶべし、わが偉人論けだし是のみと。

の歴史を見るに高傑なる感情の爲めに國華を發揚し、國の完全を保ちたるも多し。これを教育に觀るも、理性にのみ馳する學科のいかに吾人の腦裏に入るとの難きに反し、熱誠なる師長によりて授けられたる感情的の課程は終生忘れんとして忘る能はざるもの、一收一放相互酬唱とはこれ也

智に働けば角が立つも、情に棹せば流れ易し、さらば感情を善用するの途いかに、君曰く

宗教に依るを易行道とす、いかに感情的宗教の人心に投じたるかを見れば思半ばに過ぐるものあるべし

感情論はかくして終りを告げぬ。宗教が人生に與ふる最大の又唯一の賜なる、信と愛と望との三徳と感情の一致する處を明らかにし、文明の弊、科學万能主義の迷夢に陥りつゝある人に、長き繩を與へて深泉に入らしめ、強き翅を借して大虚にかけしめざりしは、千秋の嘆なくんばあらず。

高野宗重君(醫專)學生と神經衰弱、美髯士出で、壇にあり、時針滴りて十時に垂

然れども君よ、所謂る双翼を鼓して天空に翔り上らんとするが如きは吾人の欲する處にあらず、小心堅固、双脚を踏み張り、石橋をたゞいて渡らんとするは、それ好しとせずや。君以て奈何となす。説あらば與りきかむ。

京極逸三君(英二)感情萬能主義

山はこれ山、水はこれ水、高きものは時ち、長きものは流る、諤々たる辯、滔々たる論、殆んど送迎に違あらず、夜氣蕭々として身を刺すものあり、この時感情万能主義を聽いて情緒を寛かす眞にその處を得たるものか。人間を最もよく表はすものは感情なり、感情の高潔なるは嘉みす可きも一度誤つては極端なる罪惡の根元となる、感情然らば云ふに足らざるか、吾人をして君の云ふ處をさかしめよ、

一朝講和の條約に平ならざる感情の暴露は擴古の慘劇となりて東京市中を騷亂の巻となしたるも、既往わか國二千有余年

んとす、忠實なる聽衆諸君辯士の片言半句も漏らすまじと、更の老ゆると共に益々靜寂として座にあり、高野君眞に聽衆に酬ゆるに何の辭を以てせんとはする。君の命題己に珍らし、加之君天來の稽滑才能を以てす、奇警の句、頤を解くていの語續出し、抱腹その坐に堪へざらしむるものあり、輕妙なる恰も風青く春暖き日に蝶の背に跨つて百花園を浮かれ廻るが如し、

神經衰弱の起因病名に至つては又一段の風味を添ね、そのユーモアの才に富める眞に驚倒すべし、學生もし神經衰弱を病むあらば馳せて君に訪へ、恐らくは藥そのものよりも一層君の得意なる諧謔は症病療治に功あらんとを信す。

南鐵太郎君(獨三)噫金澤

秋季演說會も終に押し迫りてあと二人の辯士を残すのみ、しかも場内容疎影となり秋氣蕭殺人に迫る、南君和服にて現はれ先づ短刀直入金

澤の腐敗を痛罵し萬波起り、千波捲く、忽ち場内、否々の續發し、賛成の聲又相續ぐ、否々と云ふは金澤を辯護するの聲か、然々と云ふ辯士と意を同ふするものか、暫時騒然たり、三竹先生長髯を撫して起ちて、至誠堂裏かゝる輕舉ある可からず互に人格を尊重せよと注告せらる。

關せず焉演壇の上、鞍上願賄、南君堂々として論議を精にす。再び否々の聲起り、之を三再するに至り、三竹先生は壇上に立てり——解散せよ——始め呆然、漸くにして憤然。

大憂は生せり。造化妙事時にかくの如き活劇を演じて寰宇を寂寞たらしめず。

河合良成君(英三)幽靈の欠伸を論ず

當日の殿將たる可き河合君は司會者としてこの結末を爲す可く壇上に在り、君の動くや獐獅の如し咆吼一聲、不幸この解散の止むなきを告げ、やがて破れよとばかりに、北辰會演説部の

萬歳を三唱し衆これに和す。喝采して袂を別つ、履聲靴聲轟々然として遠くに反響し去る、北辰星座依然として動搖なきも、何となく蕭條として徐洒空し。演説部は未前の成功を告げぬ、殊にそれ半公開的の演説會を催して各學校の辯士を招くを得るに至る、時勢それ然らしむるものあらんも、すべての点に於て演説部長永井先生に負ふ處大なり、深く先生を徳とするもの也。(かたし誌)

野球部報

狂球生

我が野球部は、昨年以來、漸次隆盛の氣運に向ひ、本學期に入りて、未だ二ヶ月を出でざるに左の試合をなすに至れり。

第一回混合試合

紅軍には、老練なる鈴木を大將に、加藤猛、竹

山、山崎あり。新進の海部、赤羽、石渡、等之に加はる。

白軍には、本校隨一の猛者、栗田投手たり。安藤之に對し、輕快なる藤崎の遊撃として固むるあり。久島、加藤彌、杉浦、今川、小池等之に従ふ。

勝利は、三對五を以て、白軍に歸したり。

第二回混合試合

紅軍は、鈴木投手として、山崎と對し、遊撃に加藤猛、一壘に久島あり。二壘に海部あり。竹山、小野等、外野を固む。

白軍には、栗田、渡邊の好投捕手あり。藤崎、加藤彌、不破、町田等の老手、内野を守り、赤羽、今川、等外野に備ふ。

第一戰、第二戰、双方得点なく、第三戰に、白軍の打撃大に振ひ、渡邊、藤崎、加藤彌、不破生還して、一舉四点を得。

第四戰、紅軍、亦大に振ひ、安藤、海部、鈴木、本壘に入りて、三点を得たり。

第五、第六、第七戰、紅軍一も得るなく、白軍、

第六、第七戰に、各々、二点を得。

第八、第九戰は、紅軍、大勢を挽回せんと、攻撃甚た急に、よく、四点を収めしに反し、白軍

の得る所は、只一点なりき。

勝は白軍に、九對七を以て、歸したるも、實に、目さむるばかりの勝負なりき。此日立派なりしは、白軍赤羽の右翼を襲ひし、安全球の打ぶりと、紅軍遊撃加藤猛の働きぶりとす。

高岡中學との野球試合

高岡中學との野球試合は、十月二十日午後二時半より、本校々庭にて、谷君審判の下に開かれり。今其概況を述べん
打撃順

高松村 倉井元上 林條
 中壘 擊翼壘 堅手壘 翼手
 二遊 左一中捕 三右投
 本 木邊部 崎藤羽 破崎田
 鈴渡海 藤加赤 不山栗
 校 壘手壘 翼擊堅 翼壘手
 三捕 二左遊 中右一投

第一戰、本校方先づ守る。ネットを中に、兩翼を張れる、數百の健兒が應援隊の拍手に迎へられ、先登に現れたるは、高中の松村なり。打ちし高球は、遊撃、加藤に名を成さしめ、次に、釣痛快なるゴロに、右翼を突きしも、二壘に刺され、本校方交り攻む。鈴木、打つて、難なく、一壘を取り、其巧妙なる走壘法により、三壘迄達せしも、渡邊、海部、續いて、三度振に倒れ、藤崎、亦、投手にゴロを送つて、一壘に死し、万事やむ。得点、双方、〇。

第二戰、篠井、投手にゴロを打つて、一壘に死

し、安元、三度振の醜を演じ、村上、亦一壘に達せずして倒れ、本校方攻む。加藤、赤羽、本壘に死し、不破、亦投手に、高球を送つて倒れたるは、物足らざりき。得点、双方、〇。

第三戰、高中の宮林、長棒一閃すれば、高球遠く外野に飛ぶ。左翼藤崎、亦さる者、難なく取つて之を殺す。次に、續さし中條、岫、投手の怪腕に、弄せらるる所となりて、交替す。山崎、投手を突いて成らず。次に、栗田、見事なる安全球を、二壘の後方に打つて、一壘に入りしは、立派なりき。次に、渡邊、打つて一壘を得しも、海部の右翼を襲ひし球、中條の功名に歸して終る。得点、双方、〇。

第四戰、回は進みて、第四戰となれり。然も、双方の得点は、俱に、〇なり。勝敗の決、客易に知るべからず。聲援彌々、猛烈を極む。松村、一壘に死し、次に、高中方の好打手、釣、二壘

を突きしも、海部の棘腕は、又も、彼をして、一壘の露と、消ゆるの、止むを得ざるに至らしむ。木倉投手にゴロを送りて、敢無く、倒れて替る。本校方の攻撃は、之れより振ひ初めたり。藤崎のバンド、功を奏して、一壘に入る。次に、加藤投手に刺されしも、不破の打撃は、藤崎、赤羽を生還せしめて、一壘を陥れ、拍手、喝采、暫は鳴もやまざりき。山崎、打つて、不破、本壘に入り、栗田三度振して、終る。得点、高中、〇、本校、三。

第五戰、篠井、打つて一壘を得しも、冒險功を奏せず、二壘に死し、安元、村上、投手に刺されて、交替す。渡邊、外野に安全球を送つて、一壘を得、海部、三壘を突いて、宮林に名を求さしめ、續く、藤崎、加藤、赤羽、不破、皆、よく打つて、渡邊、藤崎、を生還せしめたり。今や、フルベースとなり、アウトは、猶、一な

り。走手、しきりに本壘を窺ふ。高中方の苦心、亦察すべきものあり。然も、よく、次の打手、山崎を、三度振に倒し、栗田を、一壘に殺せしは、天晴なる働なりき。得点、高中、〇、本校、二。

第六戰、宮林三度振つて一壘に死し、次に中條、高球を投手の背後に送りしが、加藤長驅して、之を得たり。岫、打つて出しも、松村の失敗にて、立往生と成る。本校方替り攻む。鈴木三度振に死し、渡邊、捕手の失策に乗じて、難なく一壘に入り、ついで生還す。藤崎、捕手に高球を得られ、赤羽、投手を突いて成らず。茲に於てか、加藤、海部は、立往生しぬ。得点、本校、一、高中、〇。

第七戰、第七回は、初まれり。時に得点は如何。本校方は合計六を算するに、高中方は猶〇なり。あはれ、スコンクチームの不名譽の下に、試合は終られんかと思ひしに、捕手の失策により、

釣先づ本壘に入る。鳴を静めし、高岡方の聲援隊は、一度に騒立て、入るは此時なりと、盛に、聲援す。復々、捕手の失敗は、高岡方を利し、木倉、安元、村上、等相續いで生還せしが、篠井、宮林、中條の或は、一壘に、或は、二壘に、刺さるゝに及びて、四高方攻む。不破、三度振し、山崎、捕手の失敗により一壘に入り、鈴木、強ゴロに、遊撃を破つて出で、渡邊又も、安全球を打ちたるは、目ざましかりき。然れども、先に、栗田の倒るゝあり。今又、藤崎の、高球を遊撃に呈して、死するに及び、山崎鈴木は、生還せしも、渡邊、阿部は、衣川の辨慶となる。得点、高中方、四、本校方、二。

壘遊撃の間を突いて出で、續く赤羽、不破、山崎、栗田、等亦よく打つて、ホームインの連發をなし、五点を得たり。然れども、鈴木、海部、藤崎の、死するに及び、渡邊、立往生す。得点、高中、〇、本校、五。

第九戦、最後の必戦なり。高中方、必死となりて攻めしも、栗田の球に如何で敵すべき、木倉、安本は、三度振に、篠井僅かに、投手にゴロを送りしのみにて、今日の戦を終りぬ。

得点を算すれば、高岡中學、四、本校、十三に加ふるアハルにて、本校の勝利に歸したり。

時習寮新舊生對抗試合

第八戦、岫、松村、三度振し、釣は二壘に突進せしも、捕手渡邊の好球と、壘手、海部の手練とは、相須つて、物も見事に、打どめたり。本校方、替り攻む。先鋒に出でたる加藤見事、三

舊寮生方には、渡邊八、一壘に老練の手腕を振ふあり。投手小池、捕手今川、亦さる者、大井、淺田、二本杉、北澤等之に従ふ。

新寮生方には、群を援ける海部、投手として石渡と對し、富田、山本等の勇士、之に従ふ。

勝負は、僅かに一点の差を以て舊寮生方の勝利に歸したりしは、面白き試合と言ふべし。

獨法二年對時習寮試合

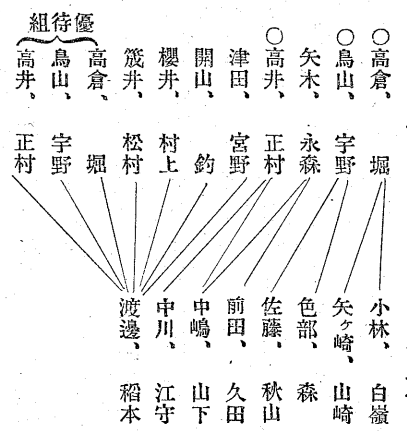
獨法方は、兩加藤を中堅に、尾佐竹、長谷川、小野、渡邊、亦よく其任に適し、松井、山根、宮崎、外野を守る。

得たり。稻本の前衛眞に神に入ると稱すべく、渡邊亦よく後顧の患なからしめたり。概して高岡方はサーブ及びロッピングに巧に四方番組の順序に於て失敗せし者の如し、詳評は後ほど。

寮方には、海部、石渡、今川、富田、山本、二本杉、千田、丸井、岸本等の諸勇士出陣す。勝は、五回を以て、危く、獨法二年に歸したり。當日の功を論せば、獨二方に在りては、尾佐竹を第一とし、寮方に在ては、魔球よく、數名を倒せし、海部を押す(狂球生)

對高岡中學庭球試合

十月二十一日本校々庭に於て行はれたり。四高方連戦連敗、高岡三組の優待を殘し長驅して牙城をつく。稻本渡邊組一騎當千の勇を振つて七組を斬り倒し漸くにして回天の事業をなすを



(か、り、生)

暗流

○峻巖なる秋霜に勵まされてか木々の木の葉の

紐や黄金や、見る目はゆく様々に織りなす如く、やさしき小春の老に恵まれて黄菊白菊紫菊雛菊思のまゝに薫を争ふ如く、北辰會諸部は色めき初ぬ

○白山の峯の如く老ひらかに、幾千代かけて黙すべかりし講和部は、すでにこの名士に縁遠き金澤の地に有りながら、二回迄長廣舌に聞く人を驚かし、雄辯は銀の如く沈黙は黄金の如しと澄ましたる案山子の如き演説討論部は、ここに燕雀の侮を怒るか如き勢に叫ひ立て、九阜に鳴く田鶴の如き氣高き

○英語部獨語部、各ここに時期を劃して發展の緒につき、ボール部テニス部弓術部擊劍部柔道部、將さに大鵬の飛はんとして礮岩にあれ狂ふ海波を睨むか如き風情ならずや、たゞ國語漢文兩部の不振はうたゞ寢の夢も圓かに、さも下界にある嵐を外にたかく澄む月の如く、忙中の

閑、側目愛すべき物の對比かな

○公會の斯く活躍する間に私會は悉く如何にも神代の如く靜かに、枕頭走る瀛車の響にも驚かず、天の安河安すらけさうまひなる哉

○和歌會何んぞさびれたるや、創立の日尙淺しと云はく、そは却つて新興の霸氣の云何に憐れなるかを語るのみ、俳句會は我が文苑に離すべからざる歴史を有する元勳ながら、その寂寞遂に和歌會に譲らざるべし

○大鯨の沙に后れて淺瀬に自由を失へるは道友會なり、私人の會として最も大なるはこれなり、

最も一般の思想界に勢力を及ぼすべき位置にゐるはこれなり、而も今果して何等に狀そや、そは強ち斯界の罪にあらず、舊宗教の一切より忘却せられんとする潮流に抗する能はず、遂に遭遇せざるべからざる運命なるべき者のみ、然れども斯會の如きは何等舊宗教に義務附けらる

るものにあらず、其行動は自由なり、新らしき要求によりて新らしき方面に開拓すべきものなるべからず、經文の解釋義果して何の意義そや、理の道よりして宗教の門に入るも可なり、詩趣よりして壯嚴なる神廟を拜するも可なり、要は直接なる個人が要求を基として進まざるべからず、極端に云へは信仰追求の第一は全く性を異にする疑ならざるべからず、宗教の教義は證者か心月を言葉の水にうつす題のみ、こはたた吾人をして自覺を呼び起すもののみ、證道は暗記にあらず直覺なり、他人かいけすに泳く鯉魚の大小を論究せんよりは、身自ら退いて網を結ぶに如かず、若し道友會にして清新の氣力を挽回せんとならば、假面を脱したる赤裸々の吾人が要求を基として進まざるべからず、再言すれば道友會はやゞ哲學的講演を加へざるべからず、敢て同會の士に問ふ

○出生の日尙淺き伐柯會に付て何等を云ひ得ず、疑ふらくは如何なる時勢(校内)の要求によりて生れ出てたるか、心あるものは道友會の不振を嘆けく時に當つて、何故に同根底に立ち同主張を有するこの會か別生せざるべからざりしか、さもあらはわれ人間心靈の源泉たり得る組織の教義か空し劍客の助太刀にせらるゝ事ありたりとすれば、さすがに釋迦佛も苦笑し玉ふ處なるべし

○文明の先驅を以て任せるか如き福音會のじみなる寧ろ怪幻の到なり、花々しく活動するを要せずとするか、又その熱心を有せざるか、果た又これを能し得ざるか、遂にそは不振に歸せざるべからざるか

○公會の勢を揃へて飛躍するに反して、私會は何故にかく振はざるか、盛大なる公會かよく校裏の意氣を發表し得るとするか、果た又振はさ

るに私會かよく校内の元氣を代表する者さすべきか、暗流は將さにこの間にあり

○所謂公會の活動とは多く形式的活動には非らざるか、所謂私會の不振とは個人が事實心意の不振にあらざるか、前者の活動とは比較的少數の覺醒か具体的に表現されたるものにして、后者の不振は比較的多數の苟安かこの結果を作れるにあらざるか、吾人は前者を見て慶賀すべきか后者を見て畏怖すべきか

○校風發揚は自覺の聲なり、吾人は滿腔の誠意を以てこの聲を愛し敢てこれに和するを辭せざるべし、然れども自覺は模倣に落つるべからざる者なから時に會これに失するあり、こゝに於て吾人はこの叫ひの前途を思ふ

○明治維新は國民的自覺の發現なりと云はる、而して時勢の要求はこの自覺を全然歐洲風の模倣と變しぬ、國民的眞正の自覺は遙かに延て日

清戰役後にその萌芽を顯はして日本主義となり國粹主義となり、完全の域に入らんとするは日露戰後の今日や將にその時なり

○吾人は多く明治初年の思想界を知らず、明治十年の頃は盛に民權の主張せられ自由の宣言せられ平等の絶叫せられて、民約論の名は人口に膾炙せられたる時勢なりき、然してこぼすてに一世紀已前に大陸にて花もあり果實も結びたる者なりき、かゝる時世後れば徳川三百年の太平の罪のみ

○次てニーチエの一時我か思想界を騒かしたる事ありき、本能の満足はたゞ獸性の満足として退げらるゝと共に、一方にては從來の倫理道德の士は所謂道學先生なる言の下に嘲罵せられたるは過去五年の昔なりき、而してこの論戰に血汐を流す頃は、ニーチエは大陸にてやその呼聲を和げたる時なり、こは太平の罪にもあらず思想

家の不注意にもあらず、大陸を離れて孤立せる邊地正にその責を受けざるべからず

○自覺するものはやくもすれば熱誠のあまりアナタチカルなる体度を免れず、明治の初年は最も危険なる暗流に曝されたるか如し、刺客は時の大臣を睨ひ、奸惡なる手段は常に當事者の身邊に出沒しぬ、こは必然の勢なり、一個の微

力を以て天下の大勢を動かさんとす、功果あらしめんと欲せば手段を擇ふ要地なし、陰險なる手段は正にその微衷を察して許すべく愛すべし、然れども獨立してその自身の價値を問は、稍高く柿をついばむ鳥を追ふへき坊ちやんか三尺の杖なるのみ

○最も趣味ある現象はこれに反して鶏を屠ふるに牛刀を用ふるの愚あり、高時は暴戾の行爲多しと雖も又北條九代中の人物たり、而して京畿に事あるや、十万の師を出して金剛山を圍む、

敵はたゞ三千のみ、高時の激するや、一舉して近畿を平げんと欲する狂熱より、三千の雛雞を屠るべく十万の牛刀を送りぬ、由し功あるも嗤笑すべきを、激するものは事破れやすく、牛刀は遂に雛雞をも屠り能はず、靜平なる考察は處世の訣なり

○近時我か詞壇を纖弱の文字多しとなす、然り我か詞壇のみにあらず、我國文壇の概評は或る意味に於てこれ等の語を以て表し得るべき者なるべし、否世界の文壇は舊き哲學をすて、新らしき系統の下に組織せられたる哲理を體現して個性の自覺に苦悶する思想界を導くに足るべき雄健の文字に接せず

○一方の論者か評する如く、我か詞壇はしかく纖弱なるものにあらず、時に放つ論者か評語は惜むらくはその詩境の如何に狹隘なるかを示す、外何等の力を有せず、文學は論文のみにあらず、

詩は革命家の慷慨悲憤のみにあらず、純文學は寧ろ論文已外にある如く、詩も亦超絶的地位に進んで價値あり、劍舞の材料たると否とは文學に何等の累を及ぼすべき者にあらず、こは隨分横道に入つて面倒なる議論なり

○星と董と彼れ創世の昔無限の大虚にかゝりやきそめて己來、これ漂渺たる春の野には、笑み初めて己來、今日より甚たしく侮辱せられたる事はあらざるべし、霜やたく菩提樹下千古の偉人釋迦を證らしめしものは明星の光ならずや、日本古來有數の評家兼好をして稱揚せしめたるは淺茅の莖の色ならずや、彼の光此のゆかり常に昔も今も變る事なく、これ等を讚嘆せる人格は尙更に代はる事なき世に、如何なる眼光を以てすればかく反對の思想を呼ぶや、曰くたゞ人格の及はさると趣味の至らさると

○輸入文學は常にその風俗の了解せられざる外

人には誤解さるゝ處なるべし、星董の趣味を誤まつて味ふもの誤まつて攻撃するもの、共に蝸牛角上の争なるべし。(空山白雲洞主人)

情眠！情眠！

か、り、生

大鯨あり、背上六百の白斑を有す、北辰の下情眠を食ふこと此に數歳、北海に漂うて浮々萍々たり。漁夫群り來り白刃を揮つて其皮を去り肉を奪ひ、忽ち退いて其生死を窺ふ。大鯨敢て動かす、漁夫愈々疎んじて利刀を閃かすや再三再四、憐むべし大鯨今や肉爛れ血流れ、撲々然として枯木の谿谷に横はれるが如し。而も大鯨更に動かす、波に漂うて躑々然。あゝ及尖未だ骨髓に達せざるか。

さらば吾毒槍を掲げて其の骨髓を貫かむ哉。醒めすや大鯨、海神汝の跳梁を待つや久し。風

伯汝の掉蹴を願ふや久し。汝立たずは北海の潮音敢て揚らざるなり、汝醒めずば北天の爛星敢て光を發せざる也、若夫れ汝尙ほ情眠を食るあらむか、われ銳刀をかざして汝の頭足を分たむ哉。利刃を磨して汝の心臓に風穴を作らむ哉。さらば吾れ毒槍を掲げて汝の骨髓を貫かむ哉。

秋風來

か、り、生

秋風來、後苑の桐葉ハラ／＼と落ちて隣家の柿實ニツコと笑みぬ。吾赤柿に於て秋を讀みたり、

吾赤柿に於て人生を觀じき。

秋風來、暗雲既に西に収りしと雖も東天更に白虹の現はるゝを見すや。茲秋諸子健在なりや、あゝ果して健在なりや。

秋風來、天下を舉げて落葉す。諸子豈落葉せざらむや、果して落葉せしや、あゝ諸子果して落葉せしや。土に身を委す落葉の姿、あゝ亦哀なる

哉。

秋風來、白霜白く、紅葉赤し、溫柔なる諸子尙ほ溫柔なるや、不活潑なる諸子依然として不活潑なるや、あゝ諸子依然として不活潑なるや。秋風來、秋風梢を撫して靜に來らば吾諸子と靜に語を得む、秋風枝を搖がし騒然として來らば吾口角泡を飛して諸子と激しく論ずるを得む。若夫れ秋風幹を摧き石を飛し轟然愕然として來らむか吾れ劍を按じ眼を怒らし憤然爆然諸子に飛び懸らむのみ。

南下説

か、り、生

今春一たび第三校に挑戦せしも不幸彼の事に托して拒絶するに遇ひ、吾運動部の南下説は一時頓挫の状態にありき。然れども謀士猛將は豈脾肉をのみ嘆する者ならむや。近來南下の説再び吾人の耳に入るに至れり。吾人豈説なからむや。

南下の擧眞に喜ぶべし、吾人は諸子に此の意氣あるを見雀躍禁じ能はざる者あり。特に來春の擧を今秋より企てむとする諸子の深慮や實に吾人をして諸子のいかに慎重の態度を以て事に當らむとするかを想見せしむるに足る。諸子の深慮や眞に可なり、諸子の策略や毫も間然する所なし、然れども諸子は果して深慮に適合せる練習をなしつゝありや。此の点に關して吾人大に慚焉たらざる者あるなり。

大擧第三校に押寄せむとするが如きは吾校に取りては由々しき重要問題なり、其の一勝一敗は直ちに吾北辰校の聲價に確然たる評價を與へ、引いては北日本に於ける運動界の盛衰問題に關す。されば苟も撰手として此の決戦に臨まむとする者の如きは、敢て身を顧みる暇なく誠心誠意技術の練習に熱中し、幾分の犠牲を辭せざるの勇氣と決心とを有せざるべからず、然るに何

ぞや、高中どの仕合以來意氣頓に沮喪し、或は北國の天候を眼中に置かずして悠々閑々未だ撰手の撰定をも爲さざるか如きものあるに至りては實に無責任も極まれりと云ふべし。

不熱心なるは獨り撰手諸氏にのみあらざる也、例へ北辰會運動部の南下にあらずとも運動部有志者の南下は其の實質に於ては吾北辰會の南下なり、諸子豈冷然たるを得むや、撰手に加はるを得ざる諸子は少くとも學校の輿論を喚起して陰に陽に南下策の成立に盡力し以て遠征の途に就かむとする勇士をして後顧の憂なからしめざるべからず。事業は熱心と統一とによりて成立す、吾南下策には此の二者を欠けり、此れ吾人の甚だ遺憾とする所なり、聊か諸君の猛省を促す。

果然飛報あり、曰挑戰狀既に京洛の天地に飛びりと。其内容に曰。

拜啓秋冷の候に御座候處貴校運動部益々御勇健の御事と奉存候。扱て明年四月の春期休暇を期し吾第四高柔道劍道野球庭球の四部有志者一同御地へ罷り出で、御校運動部と競技仕りたき希望に御座候間御應否御回答願上候。尙ほ柔劍道及び野球部は嘗て御校へ出で雌雄を決せし例も有之候へば萬障御繰合せ御應諾願上候。甚だ早計に失する感も有之候へ共今春の如き御校の御都合も有之候ては甚だ遺憾に御座候へば豫め貴意を得し次第に御座候、頓首

明治三十九年十一月三日

北 辰 會 柔 道 部
劍 道 部
野 球 部
庭 球 部
有 志 者 一 同

第三高等學校運動部御中

あゝ吾肉躍る、吾腕奮ふ。行け撰手諸士、行つて奮闘せよ。京洛の櫻花をして狼籍たらしめよ。關西の平原をして青草なからしめよ。第三高校庭春風吹き渡る所、辰章旗の影をして彌高からしめよ。諸士戦へ、猛烈に戦へ、北國の寒冷に練ひたる鉄腕を奮ひ都人士の肝膽をして戰慄せしめよ。あゝ健兒躍如の舞臺亦倅ならずや

「國に事あり吾血湧き立つ」苟も校に遠征の擧あらむとす、吾胸豈跳らざらむや、吾腕豈鳴らざらむや。南下の行を目して彌次の空騒ぎと爲すの輩は此れ校を愛するのみにあらざるなり。青年にあらず、男子にあらず、木石の人也。墓穴に入るべき人也。煌々たる日光の下に活動すべき人に非ず。寧ろ去つて水中に住め、土中に居を求め、而して冷血動物と化せ。吾人かゝる輩と肩を伍するを耻づ。

島田氏云はずや「敵國外患なければ國即ち亡

ぶ」と。今や百里の外に事あらむとす、満校の健兒振つて協力せよ、應援せよ、撰手をしてあらゆる便宜に浴せしめよ、而して健全なる校風を發達せしめよ、此れ吾人が満校の健兒に切祈して止まざる處なり。

北辰會各部管見

か、り、生

雄飛とは北辰會各部の現狀也。斯くも變れば變る者哉、あらゆる誹謗の中心となり焼点となりし吾北辰會各部は勃々として其の潜勢力を發現し始めたり、乞ふ吾人をして先づ筆を柔劍道部に起さしめよ。

柔劍道の隆盛は其の必修課目となりしを第一原因とす。四五月前まで死せりとさへ稱せられし劍道部すら今や日々數十名の熱心者を見ざるなく特に適當なる發達をなせし柔道部の如きは二段藤喜先生の熱心と妙技とによりて空前未

曾有の隆盛を極めつゝあり、今秋更に河尻、岸本、長屋の諸士を得たり。該部の進歩は刮目して待つべき者あるべし。

野球部、小木捕手を失ひし該部は頓挫すべしと思ひの外、新に渡邊捕手、海邊二壘、其の他幾多の猛將を得て數年來嘗つてなき活動の狀態に入り。投手栗田の休暇中の練習は大に見るべき者あり、過日高岡軍とのマッチの際の如き狂球魔球、殆んど其の棘腕に翻弄し終れり。

高岡軍の來襲は常に吾野球界には覺醒の投藥也、今や野球對抗マッチは頻々として行はれ校庭亦ノックの音を聞かざるの日なし、あゝ喜ぶべき哉。

庭球部、野球部は幸にも高岡軍に勝つを得しと雖も不運なる庭球部は殆んど高岡軍の蹂躪する所となれり。稻本渡邊の兩氏大勢を挽回し赤手回天の偉業を完ふせしと雖も、北辰校庭球界の名

聲爲めに墜下せしこと幾千丈ぞ。然れども諸子乞ふ安せよ、現今の庭球界は昨日の庭球界にあらず、對高岡のと失敗及び來春の南下策は斯界の諸士として骨膽の苦計を學ばしめつゝあり、其の結果の一端にもやあらむ先日金の澤各學校聯合軍との對抗マッチは三組の優待及び稻本渡邊、森河合二組の手を煩さずして勝を収むるを得たり。諸子乞ふ安せよ、來春關西の平原にラケットを振ふ我庭球部は斷じて昨日高岡に對したる庭球部にあらざるべし、

講話部、昨年二圓の講話部豫算一躍十圓となれり、其の企圖せむとする鵬志以て想見するに足る。果然、實行は伴へり。島田三郎氏來るや此を聘し高峰讓吉氏來る亦此を招待し、今や名士の來澤するものあらば凡て聘して以て講話をなさしめむとす、蓋し吾人の意を得たる者也、演説部、死せる演説部は此に復活せり。見よ其

の飛躍の様を。小仕掛而も二三十人の聽衆を有せし演説部は今や半公開的となり數百の聽衆を有するに至れり、聞くが如くんば演説部は本學期間に數回の小演説會、討論會及び出來得べくば一回の擬國會をも開催せむとす。

雜誌部、第一回募集に於て原稿の集りし者凡て二百枚、其百枚は遂に此れを載する能はず。あゝ昨年豫算よりも一頁だに増加する能はざる吾雜誌部の運命、吾人亦何をか云はむ。吾人は只だ委員が一投手の勞をもなさずして机上うす高く集まる諸君の玉稿を眺めて感謝の涙を流しつゝ、他方一定の豫算に制限せられたる我雜誌

部の運命を嘆じて轉た悲哀の涙を流さむのみ。秋季運動會、本年秋季運動會は未曾有の偉觀を呈すべし、一部二部三部は各、其の設備企圖を密秘に附すと雖も各部互に鎬を削つて其の盛況を競ひつゝあるや明なり。特に本年運動會に於

て注目すべきは各部撰手競走なるべし、一部は松岡、檜田、河合、二部は國峯、横田、高井、三部は安田、坂本、岸本の三氏なり、中一部檜田河合は各一哩に於て月桂冠を戴きし事ありと雖も二氏共に短距離に巧ならず、特に河合氏は一中運動會に於て失敗せし以來意氣頓に揚らず松岡は昨年の失敗に鑑みて大に奮勵せし結果、稍嚙望すべく、二部高井國峯は名聲鏘々横田亦老将也、三部は坂本獨り有望なりと稱せらる、故に本年撰手競争は松岡、高井、國峯、横田、坂本五氏の舞臺なるべきか。十月三十日の練習の結果によれば二部一着一分四十七秒、三部一分四十八秒、一部一分四十九秒。亦二部撰手の行ひし津幡金澤間長距離は四十七分を費し、一部撰手の松任金澤間は三十分三十秒を費せりと、

軟文學を排す

か、り生

近來北辰會誌を目して星や莖の展覽會なりてふ非難の聲稍高きを加ふ。吾人實に其一人なり、軟文學は必しも不可なるにあらず、吾人は或る意味に於て軟文學の必要を認む。然れども苟も一校の校風を代表し、健兒の活動を表前して立たむとする北辰會誌の如きは斷じて軟文學の跋扈を許すべからざるなり。若夫れ吾北辰校六百の健兒にして軟文學的男子ならむには即ち止む、苟も吾人に青春の意氣存し活動の念燃ゆるあらむか吾人は極力軟文學を排せざるべからざるなり。

「男子歌はす蝶鳥の情、野客尙知る君王の恩」吾人は吾人の文學をして言々句句鉄鼓の響らしめざるべからず、血の鳴る音あらしめざるべからず。「時鳥が囀つた。鳥が跳つた」の如き婦

女子的の文字は悉く淵に沈むべき也。火中に投すべき也。

軟文字は青年を蠱毒す。吾人の文字は凡て武裝せざるべからず。六尺の秋水を振つて敵陣目懸けて切り込むが如き概あらざるべからず。一高く吼いて百獸ひれ伏すてふ獅子吼の如き概あらざるべからず。徒に迂遠なる頓問なる人生觀を振り廻して生嚼り哲學を謀々し。或は戀とかと稱する變な者を説き散らして得々然たるが如きは實に吾人の極力排斥せむとする所なり。文學の爲めに文學を學はゞ吾人此れを云はずと雖も（亦かくの如き目的を有せる文字は誌上に羅列するの必要なし）、苟も吾人の文章を以て他を感動せしめ裨益せしめむと欲せむか、吾人は必ずや硬文字に依らざるべからざる也。試に見よ、六百の生徒の中北辰誌の文苑に眼を注ぐもの果して幾人かある。北辰會誌は二三文學嗜好者の

爲めに多大の頁を割くを欲せず。吾人は文苑の不必要を唱ふるにあらずと雖も、少くとも之を改善して軟文學の巢窟ならしめざることを切望して止まざる者也。

金澤人士の偏狹

か、り生

巷説をして真ならしめよ、吾人は巷説に従つて論せむ。

新入學生歡迎會席上森岡氏金澤市の腐敗を論じ「金澤人士は小人也、豈閑居して不善をなさざらむや」と極言するや、言金澤人士の忌諱に觸れ、その激昂を招きたりと云ふ。果して真なるか、余は不幸金澤人士の小人たるや否やを知らずと雖も、森岡氏に對する金澤人士の行動既に小人的なるにあらずや。金澤人士諸君、諸士は尙ほ封建を夢みつゝあるや、百万石を笠に着つゝあるや、孤城落日の一

個森岡氏を目標として團練の力を借りて壓迫を加ふるか如き、此れ堂々たる男子耻づべき處にあらずや。諸士以ていかんとなす。

森岡氏の極言勿論賞すべきにあらず、然れども金澤人士のなせし如き行動は苟も事言論の自由に關す、諸士は果して北辰會の言論部に何等の拘束を加へざりしか、雜誌部に何等の箝制を與へざりしか、諸士一考して可なり。

此れを加能同志會の問題となすは尙ほ恕すべしと雖も、之を金澤學生の團練なる一日會の問題となすか如きは諸士果して輕擧の誹を免るゝを得るや、兄弟橋に闖けども外其侮を防ぐと、諸士は學校内の問題を學校外に持出し一種の勢力を應用して森岡氏を壓迫したる形跡なきにあらず。然らば此れ獨り森岡氏に對する侮辱のみにあらず學校全部を侮辱せむとせしものにあらざるか。

森岡氏の失言を面折するは可なり雖も堂々問責委員を發して訟狀を取るに至りしが如きは之れ寧ろ兒戯に類すと稱せむか猶稽と云はむか。わゝ諸士、諸士は常識を具備せるや。豆粒大の度量をさへ有するや。徒らに事を好むの誹を免るゝを得るや。

吾人は森岡氏に何等利害關係を有する者にあらず。然れども吾人は弱点をつけ込みて自己の偉きことを威張らむとするが如き金澤人士の行動に關して説なくばあらざる也。

編輯便り

原稿多數の爲め本號に載せ能はざりし者次の如し、

感想錄 平松萍水
兒玉將軍の死を惜む 南鉄生
忘語 三郎

勤儉

方言について(續)

滿韓瞥見記(續)

校風の存在を疑ふ

秦敏夫

へ、な、生

入江生

か、り、生

靈太鼓

高等學校時代

時雨記

何れ機を見て登載せむ諸君諒せよ、

か、り、生

か、り、生

秋水生

明治三十八年度北辰會費決定計算書

×印ハ朱字

科目一區分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 經常收入	一、二、三、三七二	一、二、三、五二一			×三、六、二、四〇
第一項 特別會員寄付	二、五〇〇〇〇	二、五〇〇〇〇			〇
第二項 通常會員會費	八、五、八〇〇〇	八、七、三〇〇〇			×一、五、〇〇〇
第三項 預金利子	三、九、七〇〇	四、八、八三〇			×九、〇〇〇
第四項 春季運動會乘艇申込料	一〇、五〇〇	一、二、六〇〇			×二、二〇〇
第五項 寄付金	五、五〇八二	五、五〇八二			〇
第二款 臨時收入	六、五〇〇〇〇	六、三、三、六三三			一、七、三、九七
第一項 受入金	一、五〇〇〇〇	一、五〇〇〇〇			〇
第二項 借入金	五、〇〇〇〇〇	四、八、二、六三三			一、七、三、九七
收入合計	一、八、六、三、三七二	一、八、七、二、二四			×八、七、四三

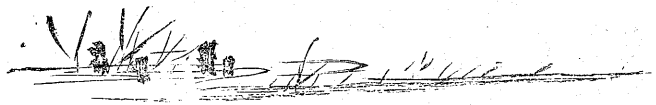
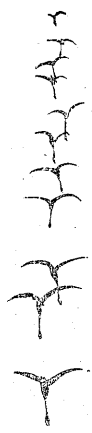
第一款 經常支出	1,026.85	986.34	233.92	×156.41	468.01
第一項 講話部費	2,000	1,580	0	0	0
第二項 演說討論部費	2,000	1,500	0	0	0
第三項 語學部費	1,950.00	777.5	0	×64.00	533.5
第四項 雜誌部費	2,733.25	2,455.94	0	0	277.2
第五項 弓術部費	2,700.00	2,383.3	0	0	316.7
第六項 劍道部費	5,650.00	5,600.5	0	0	49.5
第七項 柔道部費	5,670.00	5,628.0	0	0	42.0
第八項 ペースボール部費	5,760.00	5,759.9	0	0	0.1
第九項 ロンテニス部費	9,145.00	9,129.3	0	0	15.7
第十項 フットボール部費	9,500.00	7,330.0	0	0	2,170.0
第十一項 遠足部費	2,500.00	2,369.9	0	0	130.1
第十二項 漕艇部費	1,312.00	1,274.9	0	0	37.1
第十三項 春季運動會費	100,000.00	94,422.0	0	×1,500.00	5,578.0
第十四項 秋季運動會費	18,000.00	17,100.4	0	×77.41	899.6
第十五項 會務費	5,000.00	2,641.1	0	0	2,358.9
第二款 豫備費	70,605.00	0	0	×77.50	68,828.5

百四十

第三款 端艇新造基金	60,000.00	0	0	0	60,000.00
第四款 臨時支出	7,508.1	6,768.4	0	0	739.7
第一項 艇庫改築費	7,508.1	6,768.4	0	0	739.7
支出合計	1,833.71	1,673.8	233.91	×233.91	1,870.53

寄贈雜誌 (北辰會苑)

輔仁會雜誌	六十九號	學習院	輔仁會	校友會雜誌	十四號	北野中學校校友會
商海	十三號	大阪高等商業學校校友會	校友會雜誌	九號	大成中學校校友會	札幌中學校校友會
校友會雜誌	百五十八號	第一高等學校校友會	親友會雜誌	七號	柏崎中學校親友會	前橋中學校校友會
無盡燈	七號ヨリ九號	無盡燈社	坂東太郎	四十四號	松山中學校保惠會	外國語學校校友會
校友會雜誌	十七號	松本中學校校友會	保惠會雜誌	八十九號	松山中學校保惠會	三重大中學校校友會
校友會雜誌	廿一號	麻布中學校校友會	校友會雜誌	一號	高田中學校修養會	長岡中學校和同會
校友會雜誌	九號	三重第二中學校校友會	校友會雜誌	廿八號	三重大中學校校友會	東京高等商業學校一橋會
校友會雜誌	四十一號	關成中學校校友會	修養	十二號	高田中學校修養會	滋賀第一中學校校友會
校友會雜誌	九號	德山中學校校友會	和同會雜誌	廿七號	長岡中學校和同會	
同文會報告	七十九號ヨリ八十二號	東亞同文會	一橋會雜誌	廿四號	東京高等商業學校一橋會	
學友會報	廿三號	山口高等商業學校校友會	校友會雜誌	五號	滋賀第一中學校校友會	



附 録

方言について

附 金澤市の方言輯

へ、な、生

ある一地方の人々のみに通じて他の地方の人々に通せざる言語を方言といふ、方言は吾人の郷里の山嶽、河川、故舊等と同じく何となくなつかしく思はるゝものなり、同郷の人々互に遠慮無く方言を用ゐて談話せば饒々たる和氣自ら其間に生ずべし、之れ蓋し諸君の多くが屢々遭遇したる事實ならん、

我が國、封建の制破れてより尙ほ未だ多くの年月を経過せざるにより各地方の方言の間に非常なる差異あるを見る、今若し東北地方の人、鹿兒島邊の人と相會し互に方言を用ゐて談話せば無教育なる英人と佛人とがたのく自國語にて語る有様と恐らくは大差なかるべし、ある年ボ

ット出の佐賀縣の人二名東京より房州の海岸に赴きて滞在せり、一日舟遊をなし、今は宿に歸らんとてある荒磯に舟を寄せしが、船頭は何思ひけん錨を下さずして客に先立ちて上陸しけり、二人は船を下りかねて「ワサンドギヤスルノカ」(モシアアナタドーナサルノデスとの意なり)と口々にいひさわぎぬ、無論船頭に佐賀地方の方言を解する理なければ、二人の上陸せざるは多分再び出遊せんとしてにやと疑ひ、聲張り上げて「オミマイラ オリルノカ アジスンノカ マダノッテルノカエ オマイラ ハヤクオリナ イト オダ イッチモヨ」(オマヘラ オリルノカ ドースルノダ マダノッテイルノカ オマヘラ ハヤクヲリナイト オレハ イッチシマウヨとの意)と呼ばはつたり、房州の浦言葉いかでか西國の人に通ずべき、二人は唯「ワサンナンチエーコッキヤ オドモニヤイッチモワカランポー」(アナタ ナンノコトカ ワタクシドモニハ スヨシモ ワカラナイヨ)とさけびつゝ、波にゆり上げられゆり下げられ、顔色を青くし

てアショくともがき居たり、たましく物識れる人一人そこに來逢ひて普通語を以て通譯せしかば、双方やがて大笑となり 船頭は船を濱邊に引き上げて二人を陸に上らしめたり、なんと抱腹すべき事ならずや、かくの如く各地方々々により方言の間に懸隔を置くは封建の昔は知らず、今日之れを存在し置く可き謂れ一つもあるなし、されば斯かる弊害は一日も早く除去したきものなり、之れが矯正をなすには勿論教育の普及に待たざる可からざれども亦一方に於ては各地の方言を研究するの要あり、混濁の波中に漂へる我が國民を救はんとする諸君は斯かる瑣事にも平素より注意して貰ひたきものなり、

す、又づとず、らふとらう、其他をとた、るとい等の如きは一切區別せず、何となれば余に其れを區別するの理解力を有せざればなり、讀む人心してよ、

方言 金澤の方言輯 いろは順

紙鷲

親類

里芋

鯛

探偵

醉狂者

痘痕顔

湯氣

井戸、無論池をもイケと

いふ

螳螂

小供に就て云ふ言葉にして無邪氣にして可愛らしといふ意味に用ふ

われ此地に來てより二年、金澤の方言の手帳に上る事既に數百に及ぶ、乃諸兄の參考に供する所以なり、表題に金澤市の方言とあれども其實市中の方言と近在に用ひらるる方言との區別を知らず、されば表中には金石、大野あたりの方言も混入せられあるやも測られ

いもちやけ
いちやけな
いもくし
いさきり
いけ

いれな

いざごしい

いぢごしい

いぢくらしい

いごくりわるい

いやや々々々

いんぎりと

いらはん

いらはる

いぢかる

いらして

いらしやん

いじりになる

いかなて

いらッし

いらッせ

いッてらッせ

いッさんばらり

色々な

ウルサイ、ウツシイ

立派な

ウルサイ

意地が悪い

多忙な

ユックリト

居ない、留守

在宅

カムム 主に小供が用ふ

客の歸るを送るに用ふ

行て御いでなさい、又は

御いでなさいの意

留守

一生懸命になる

ドウイタシマシテ

オイデナサイ

行て來なさい

其場限り

いッすりむッすり

いッしきのこと

いんにや

いふにもことかいた

いのぐ

ばんば

ばあ

ばい

ばい

ばい

はくしよ

はくしや

はだこ

ばんしよ

はらき

はがすみ

はちやくちやもの

ドウデモコウデモ

セメテノコトニ

否の意

云ふにも程がある

ウゴク、此の類に訛りしもの甚だ多し、ウゴカス

を「いのかす」と云ふが如し、

し、

乳母

衣服

棍棒の類を云ふ

薪

嚏

襦袢

火桶

豪膽な人

齒糞

ソ、ツカシイモノ

はべん
はんがい
ばーば
はしかい
ばりばりの
はいだるい
はようらと
はんちやぼ
ばらいた
にやーにや
にやほや
ほえ
ほそぬけ
ぼるば
ぼんぼ
ほそぐり
ばーや

カマボコ
飯を盛るシヤクシの事
バアサンと云ふに同じ、
呼びかける時に用ふ
カシコイ
物品の極く上等なものを
いふ時に用ふ
ツカレタコト
早く
中途「ハンチャボでやめ
る」の如し
ヤリソコネタ
ネーサン
ドツチツカズノ事
楯
マヌケ
バカ
背負ふ事
シゴキ
丁稚、下男の二人稱に用

ぼこい
ぼっかける
ほびらかに
へちやもくれ
へちや
べーや
べちや
へしない
べんこな
へんばいな
べたくらしい
へいろくな
とんこ

ふ
小供の何にも知らぬをい
ふ、マヌケと云ふが如し
オヒカケル
遠慮しないで
多くは人に悪口云ふ時に
用ふ、馬鹿の意味あり
下手
下女 名詞、又は代名詞
として用ふ
女を嘲笑して云ふ言葉
待遠い
カシコイ、ナマイキの意
味を含めり
ナマイキナ
オシロイなんご顔にべた
〜ぬり付ける事
冗談な
梅毒
梢、其他棒の如きもの

とんぼ
とんぼさ
とんぼしん

端をいふ、而して此三者
自ら別あり、とんぼは原
級の意、とんぼさは比較
級、とんぼしんは最上級
の意なり
肥の入れてある直径一間
もある大桶をいふ
不作法者
氣のオチツイテル者
嘴
小さい胴着、小供に用ふ
堰といふ意も含めり
下水
癩病
未明、小供などが暗い内
に起き出で騒ぐ時に用
ふ、罵りの意を含むと知

とんたく
とんしよ
とふさる
とぢめる
とかでか
とくどく
とっちり
とだいから
とぼんと
とまつく
とろ
とこ
といこと
とーない
ちんこ

れ、
放蕩者、時にとんたくれ
とも云ふ
胴
寝る
問ひつめる
騒々しく
クドイ、甚だしく
ユックリ
始から、根底から
ツクネント、ボンヤリト
マゴツク
何々して居れと云ふ時に
用ふ「すわ。どろ」の如し
何々して置げと云ふ時に
用ふ「どうや」とこの如し
如何なること
新平民
俗にチャン〜コといふ
ものなり

とねつもの
ととばし
とーぎん
とんぞ
とんざり
とんぞ
とんぞ
とすぼす
とすす
とちくらがり

とねつもの
ととばし
とーぎん
とんぞ
とんざり
とんぞ
とんぞ
とすぼす
とすす
とちくらがり

とねつもの
ととばし
とーぎん
とんぞ
とんざり
とんぞ
とんぞ
とすぼす
とすす
とちくらがり

ちえーぼ
ちようだい
ちいこ

杖
里歸り
小供の一人稱二人稱に用
ふ

ちよっこり
ちよびんど(こ)
ちよ(ちんど)

少々

少し、一寸、「チョコ來マ

シニー」の如し

ちやッど

早く

りくつな

巧みな

れもし

味増

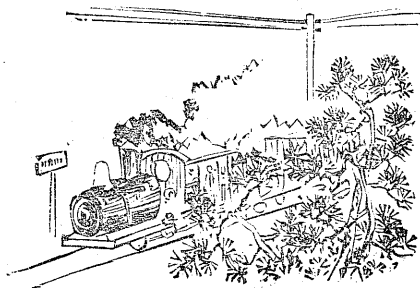
れんぼ

新平民

れんちや

雄

(未完)



投 書 心 得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治三十九年十一月十五日印刷
明治三十九年十一月十九日發行

編輯兼發行者
印 刷 者
印 刷 所
發 行 所

吉 村 政 行
生 沼 倍 男
明治印刷株式會社
同縣同市高岡町九十番地
第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地
同縣同市穴水町二番丁廿九番地

